

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

松本 HIROSHI
MATSUMOTO 紘

第二十五代総長の

挑 CHALLENGE 戦

～魅力・活力・実力ある大学を目指して～

平成20年10月～平成26年9月



京都大学

KYOTO UNIVERSITY

松本 HIROSHI MATSUMOTO 紘
第二十五代総長の
挑 CHALLENGE 戦

～魅力・活力・実力ある大学を目指して～

- 2 | 改革と己からの自由
松本紘
- 4 | 革新と創造の軌跡
挑戦 平成20年10月ー平成26年9月
- 30 | 松本総長VOICE
- 50 | 各界からのメッセージ
松本総長をご支援いただいた方々
- 64 | 改革の道程
活動年表 平成20年10月ー平成26年9月

改革と己からの自由

Message

平成20年10月に京都大学総長に就任し、平成26年9月で6年間の任期を終えました。京都大学が法人化されて4年半が経過した時点での総長就任でしたが、国立大学では法人化の前後で学長の役割が大きく変わり、実質的に「経営者」としての手腕も求められるようになりました。私自身は総長就任前から理事として執行部の仕事をしてきましたが、それでもいろいろと苦労したことを覚えています。

また、大学を巡る環境が激しく変化した時期でもありました。長引く経済停滞の中、特に景気回復という文脈から大学の持つ教育力・研究力をもっと社会に還元していくべきではないかということで、大学改革を求める声がこれまでになく高まった時期だったのではないかと思います。

大学全体では、18歳人口の減少に伴う大学全入時代が到来し、京都大学のようないわゆる難関大学においても学生の質の変化が肌で感じられるようになりました。同時に、グローバル化やIT化といった時代の変化に大学教育はうまく対応できていないのではないかという指摘が様々なところから聞かれるようになり、文部科学省もこうした声を受けて、中央教育審議会の学士課程答申(平成20年12月)や質的転換答申(平成24年8月)、さらには大学改革実行プランなどにおいて、大学教育の根幹に踏み込む改革を求める姿勢を強めてきました。

国立大学固有の問題としては、厳しい国の財政状況が続く中、国立大学予算の基礎となる運営費交付金が毎年1%以上削減され続け、各大学の外部資金獲得や経営効率化の努力で対応できる限界を超えて大学の基礎体力を奪いつつありました。また、法人化の際に非常に限られた時間で様々な制度変更に対応せざるを得なかったことから、法人化前の「慣習」の多くを引き継いでしまい、国立大学の学長は大学運営の全責任を負う立場に置かれたにもかかわらず、その職責を果たせるだけの権限を持たされなかったという構造的な問題も抱えていました。こうした状況の下、文部科学省は国立大学改革プラン(平成25年11月)や国立大学のミッションの再定義といった政策を次々と打ち出してきました。

世界に目を向けると、世界大学ランキングの存在感の高まりによる国際的な大学間競争の激化がありました。特に優秀な研究者や学生の奪い合いは世界的な規模で起こりつつあり、日本の大学は

その潮流に乗り遅れていたと思います。また中国、韓国、シンガポールなどのアジアの大学が台頭し、日本のトップ大学と肩を並べるところまで追いつかれてしまいました。

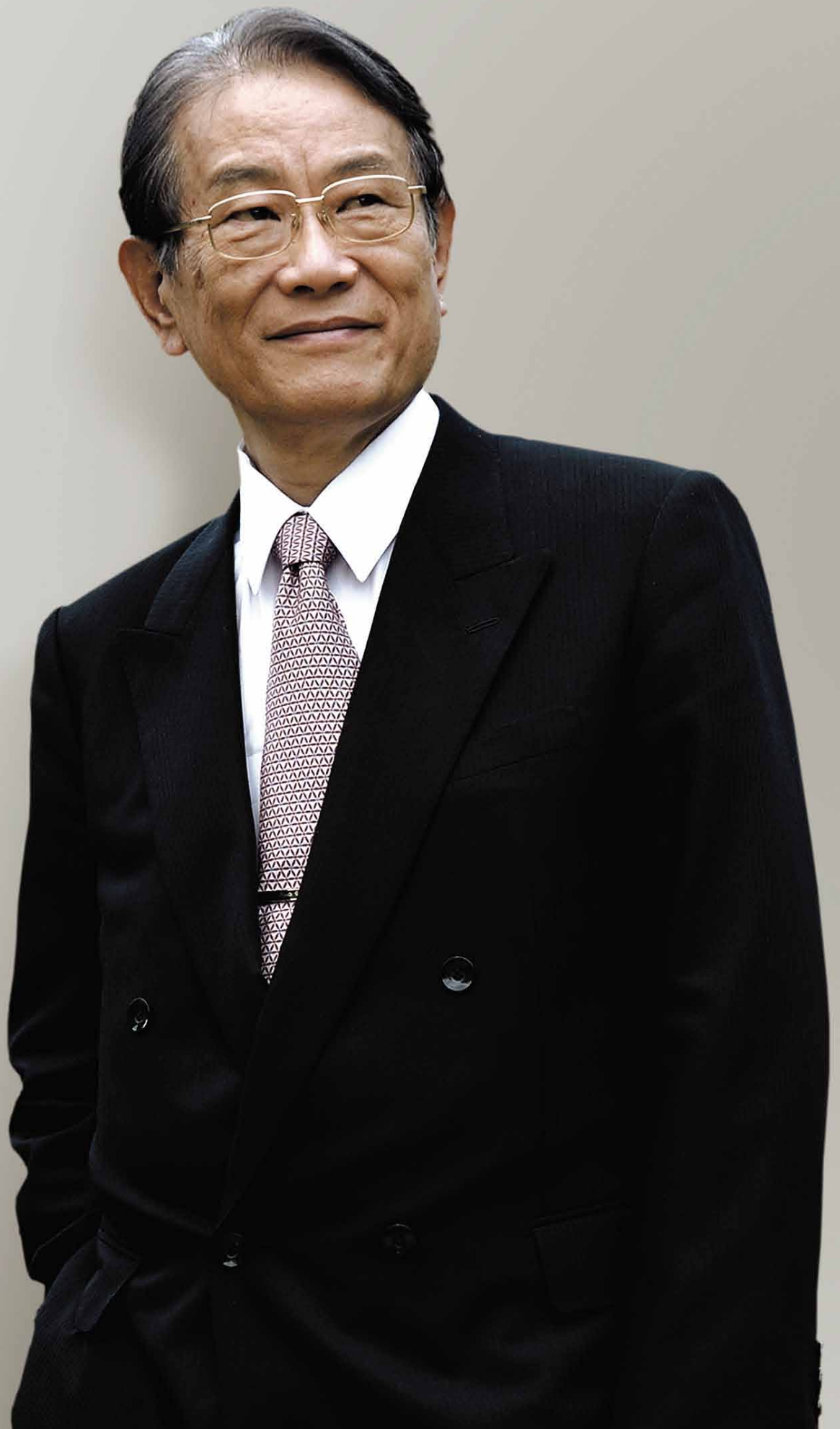
国や社会の求める改革がすべて正しいとは限りませんが、京都大学を含め日本の大学がこうした情勢の変化に十分に対応できていなかったことは事実だったと思います。そして多くの大学がこのことに気づき、改革に舵を切りつつありました。京都大学もこのままなにもしなければ国際的な評価はもちろん、日本を代表する大学としての地位をも失うかもしれない。そして京都大学の凋落は日本全体にとっても大きな損失であり、絶対に避けなければならない。そういった危機感を持って「魅力・活力・実力」の京都大学とすべく6年間総長として仕事をしてきました。

幸いなことに私の考えに賛同し、力を貸して頂ける学内外の方々に恵まれ、考えていたことの多くは在任中に実現できました。教養教育の在り方を大きく変えることになる「国際高等教育院」の設置、優秀な若手研究者が存分に力を伸ばせるようにするための「白眉プロジェクト」、学位を有するグローバルリーダーを育成するための「思修館」の設置、高大接続の在り方を抜本的に見直すこととなる「特色入試」の導入など、挙げればきりがありません。どれも簡単な改革ではありませんでしたが、執行部・事務本部の努力と学内の理解、学外からの支援によって実現することができ、各方面からも先進的な取組として注目を集めるとともに、この6年間で京都大学は「大学改革で後れを取っていた大学」から、「大学改革をリードする大学」に大きく生まれ変わったとの評価を頂きました。関係された皆さんにはこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

私がこれらの改革を成し遂げられたのは、長年の京大生活で染み着いた「自由の学風」すなわち既成概念から自由になり、根本に立ち戻って物事を考えることを実践できたからだと思います。組織というのは本質的に変化を嫌います。それは京都大学も例外ではありません。しかし何でもかんでも守るのではなく、守らなければならないものと変えるべきものを、既成概念にとらわれることなく峻別し、柔軟に変化していくことこそ京都大学が世界に冠たる大学であり続けるために必要なことだと今でも信じています。これからも山極新総長の下で、京都大学が「自由の学風」を守り、日本、そして世界で存在感を示す大学であり続けて欲しいと願っています。

Hiroshi Matsumoto

松本 紘



革新と創造 の軌跡

— 挑戦 平成20年10月～平成26年9月 —

▶ CHALLENGE 2008-2014

Topics-1

国際高等教育院

広い視野と深い教養を備え、 国際的に活躍できる学生を養成

国際高等教育院は、幅広い視野と深い教養、優れた創造力をもって国際的にも活躍できる学生を輩出するため、本学の教養・共通教育の企画及び実施について責任を負う組織です。「個々の学問領域を超えた幅広い分野に共通する基礎的な知識及び方法を教授するとともに、学生が高度な学術文化に触れることを通して豊かな人間性を育むための教育」を目指します。

本学の教養・共通教育に関して、従来

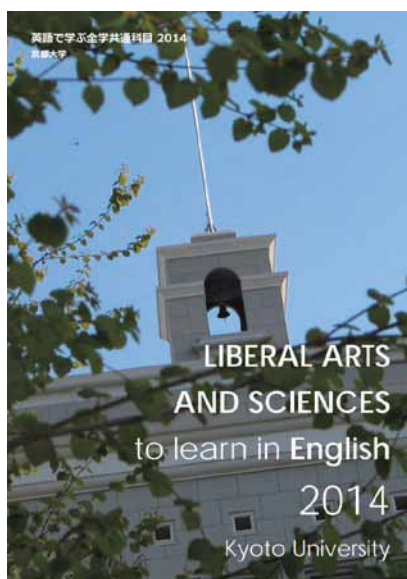
の高等教育研究開発推進機構の下での全学共通教育の企画と実施が、個別的、分散的、短期的なものになりがちで、実施責任部局と実施協力部局という二元的構成のために両者の意思疎通や協力関係が十分ではなかったため、平成25年4月に全学共通教育の企画、調整及び実施等を一元的に所掌する国際高等教育院を設置し、各部局が教養・共通教育の企画及び実施に協力する全学的な体制を構築しました。

国際高等教育院発足後は、カリキュラムについては科目群の再編を行うとともに、提供科目の見直しを行い、多数の科目から学生が自由に選択するという方式から、科目名の大括り化と階層化を行って、年次進行や各自の興味、予備知識に応じて、より適切な科目選択ができる方式とし、時間割についても、学部や学部群ごとに時間割上の各コマの授業のタイプを揃えるという「色分け」をすることで、履修指導と学生の履修登録が容易となるプランを作成しています。従来から評価も高く、教育効果も認められてきた少人数教育(ポケット・ゼミ)は再編拡大されることとなり、また、

新しいタイプの科目として「統合科学系科目」を開設して、環境、エネルギー、気候変動、災害対策など現代社会が直面している困難な課題について、多様な視点と解決へのアプローチを知るとともに、議論を通して自ら考える機会を与え、正解のない課題を探究する姿勢を養います。これらの新たなカリキュラムと時間割は平成28年度から実施されることとなりました。

平成25年度から採択された大学改革強化推進事業では、外国籍教員を5年間で100名採用する予定で、従来の「英語を学ぶ」ことに加えて、「英語で学ぶ」機会を確保して日常の学生生活での体験を通して英語の運用力を身につけさせ、教育の国際化に大きく寄与します。平成26年4月には、語学に関する自習環境やサポート体制の整備と教材開発を行うため、国際高等教育院に附属国際学術言語教育センター(i-ARRC)を設置し、平成27年度末にはi-ARRC棟が完成する予定です。

今後は、更に教養・共通教育の改革を進め、大学全体の教育改革と国際化の起点となることが期待されます。



『英語で学ぶ全学共通科目2014』

Topics-2

博士課程教育リーディングプログラム、大学院総合生存学館(思修館)

グローバルリーダーを育成する 学位プログラムを展開

博士課程教育リーディングプログラムは、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え、広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する、文部科学省の補助事業です。

平成23～25年度にわたり、全国で62件のプログラムが実施され、本学では、平成23年度にオールラウンド型「京都大学大学院思修館」及び複合領域型(安全安心)「グローバル生存学大学院連携プログラム」が、平成24年度に複合領域型(生命健康)「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム」及び複合領域型(情報)「デザイン学大学院連携プログラム」が、平成25年度にオンライン型「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」が採択され、学位プログラムを実施しています。事業実施に係る学内体制としては、博士課程教育リーディングプログラム運営会議(議長:総長)及び同運営委員会(議長:教育担当理事)等を設けて、総長のマネジメントの下で全

学的な運営体制を構築しています。

本学では、平成25年4月にグローバルリーダー人材の育成を目指すまったく新しい大学院として「大学院総合生存学館(思修館)」を設置しました。補助事業によるプログラムは期間が限定された財政支援ですが、大学として永続的な人材育成を行うために大学院を新設したところです。

新しい大学院は5年一貫の大学院博士課程で、地球社会が抱える複雑多岐にわたる課題解決に向け、幅広い知識と深い専門性、文理融合能力や俯瞰力、強い意志と実行力を併せ持つ次世代型リーダーの育成を目的としています。

大学院総合生存学館(思修館)は、グローバルリーダーとして活躍し得る各学生の専門性に即して体系的・多面的に育成することを目指しており、その教育課程においては、学生個々の目標やキャリアパスに対応したテラーメイド型教育、大学院としては画期的な合宿型研修施設、メンター・複数指導教員体制が特徴です。1～3年次では学位論文研究を

中心に専門科目と共通基盤科目を習得。2年次までは国内外インターンシップと「熟議」を実施。「熟議」は、産業界や官界などの現役リーダーを特任教員とし、リーダーとしての考え方や問題解決のための体験的な方法論を学びます。3年次が中心の共通基盤科目「八思」では、八分野にわたる高度な知識と語学力を獲得します。4年次はフィールドワーク(海外武者修行)として国際実践教育を行い、5年次はプロジェクトベースリサーチ(発展型PBL)として学生自らが企画立案したプロジェクトを実施。これらを踏まえて、将来構想や方法論、仮説の検証などを行い、学位論文を完成させます。

また、合宿型研修施設「廣志房」「船哲房」では、異文化・異分野出身の仲間との切磋琢磨やメンターによる日常的なサポートにより、次世代リーダーとしての人間性を磨くことのできる環境を整備しています。



思修館 海外インターンシップ報告会-海外武者修行審査会

幅広い知識と深い専門性を持つ 世界のリーダーを育成する大学院

Topics-3

国際戦略「2x by 2020」、ジョン万プログラム

大学の「真の国際化」に向けて

国際戦略「2x by 2020」は、今日の社会における急速なグローバル化を背景に、世界に卓越した知の創造を行う本学の発展と、世界トップレベル大学—WPU(World Premier University)—としての地位確立を目標に、平成25年に、本学の新たな挑戦として策定しました。

戦略の推進にあたって、3つの基本目標として「研究・教育・国際貢献」を掲げ、その実現に向けた具体的な取り組みや当面の重点施策の達成すべき目標を、主に数値で具体的に示したところに特徴があります。「2x by 2020」

は、「国際化の指標となる数値を2020年までに2倍にする」という意味からスローガンとして名づけられました。

本学は、この戦略により、これまで取り組んできた「国際交流の推進」から、確固たる数値に裏付けられた「真の国際化」の実現を目指しています。

中でも、特筆すべき事業として「京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム」があります。国際戦略「2x by 2020」に掲げる本学の国際化を目指して、次世代を担う若手人材（研究者、学生、職員）を対象に海外経験等の機会を支援し、次世代のグローバル人材を積極的に養成する本学独自の全学的プログラムです。

「研究者派遣事業」は、海外で中長期にわたり研究活動を行う本学若手研究者を支援する「研究者派遣プログラム」と、当該若手研究者の所属する研究室等への支援を行う「研究者派遣元支援プログラム」で構成されています。平成24年度の開始以降、56件の派遣と33件の派遣元支援を採択し、派遣者と派遣先機関の双方にとって貴重な国際共同研究の機会と

なっています。

「学生派遣事業」は、平成25年度より開始されました。海外の世界トップ大学に学生を派遣することによって、グローバルに活躍することができる若手リーダーの育成を目指しています。平成26年9月末までに、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学、プリンストン大学へ約140名の学生を派遣し、今後はハーバード大学も含めた世界トップ大学へ規模を拡大し、更に多くの学生に海外派遣への機会を提供する予定です。

「職員派遣事業」は、同じく平成25年度に、国際業務のリーダーを養成する人材育成プログラムとしてスタートしました。主に若手職員を対象に、海外の大学や国際機関等で国際業務に従事し、語学のスキルアップやグローバルマインドの涵養を目指します。事務職員のほか、図書系職員、附属病院看護師を対象としたプログラムもあり、米国・ワシントンD.C.に所在するUSJI(日米研究インスティテュート)への1年間の長期派遣、本学海外事務所への2ヶ月から3ヶ月程度の短期派遣等を実施しています。



国際戦略「2x by 2020」

Topics-4

次世代研究者育成支援事業—白眉プロジェクト—

白眉プロジェクトは、世界のトップレベルの研究者として次代を担う優秀な若手研究者を支援するために本学が構想したもので、優秀な若手研究者が自由な環境のもとで研究に専念し、次世代を担う先見的なリーダーとして育てていくための支援事業としてスタートしました。

本プロジェクトでは、毎年、基礎から応用にわたる、人文学、社会科学、自然科学の全ての分野を対象に若手研究者を国際公募します。外国人を含めて、博士の学位を有する方、あるいは博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する方であれば、誰でも応募可能です。

採用にあたっては、応募者の専門分野に応じた専門委員会による書類審査(第一次審査)に続いて、学内外の有識者により構成される伯楽会議が面接(第二次審査)を行い、研究面のみならず次世代のリーダーとしての資質等を総合的に判断して採用候補者を選考します。伯楽会議の結果を受けた白眉センターの運営会議において最終決定し、本学の特定教員として採用されることとなります。毎年、20名を上限に、5年任期で採用しています。

白眉プロジェクトの毎年の応募者はほぼ600人で、これは募集定員の30倍という激しい競争です。この5年間で総勢92人の研究者が本学の教員として、

この事業で採用されました。平成27年の春には19名が加わります。

この事業の提唱者創設者である松本総長の「個々の専門分野を切り開く鋭い研究能力だけでなく、幅広い分野の研究者との交流を通じて互いに越境し合い、影響し合えるような豊かな知性と高い志を持った研究者が本学から巣立って欲しい。」との期待に応えるかのように、すでに白眉研究者25人が本学も含む各地の教育研究機関の研究者として栄転しています。

白眉研究者の特徴は、平均年齢(採用時)33.4歳、男女比75対17、内外国比70対22、文系理系比37対55というデータからうかがえるように、多様な研究者が採用されている点にあります。医学・生命科学や理工学の理系諸分野だけでなく、哲学や宗教学、言語学、法学、経済学、人類学といった文系諸分野の研究者も多数採用されています。

次世代のリーダーとなる
先見的な
若手研究者を支援



白眉シンポジウム

Topics-5

特色入試

大学は社会の各界から、「国際展開を担えるグローバル人材」の養成を要望されています。そのためには、幅広い豊かな教養力・俯瞰力、外国語運用力、優れた専門力を大学において三位一体的に育成する必要があります。その意味で、高等学校と大学との接続・連携を緊密なものとする「高大接続」型の入学者選抜は大変重要です。これは、大学における教養教育、外国語教育並びに専門教育が高校教育の積み上げを前提としていることから明らかであり、研究型大学である本学が重視している「自ら課題を発見し、チャレンジする」という自発的・能動的な学びという点からも重要です。

本学では、平成22年度より受験機会の複数化やAO入試の実施なども視野に入れて、新たな入試制度について検討を開始、平成25年3月26日、平成28年度入試から全学部で特色入試を導入することを公表しました。

また、特色入試導入を含む本学における入試改革の一層の推進のため、平成24年11月に「入試改革検討本部」を設置、専門的知識を有した人材を採用し、入試改革に資する入試データの調査・分析並びに各地の教育委員会との連携協定締結や積極的な入試広報事業を展開してきました。平成25年度には、入学試験委員会のもとに設置した「特色入試実施準備委員会」において、特色入試の詳細な選抜方法等について検討、その結果を踏まえ、平成26年3月26日、「平成28年度京都大学特色入試選抜要項《概要》」を公表したところです。

この「高大接続型特色入試」は、高大接続と個々の学部の教育を受ける基礎学力を重視し、①高等学校での学修における行動と成果の判定、②個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定、を行い、①と②を併せて高等学校段階までに育成されている学ぶ力及び個々の学部の教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価して選抜するものです。

一方、国における大学改革実行プラン、教育再生実行会議、中央教育審議会高大接続部会などにおける検討では、「能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する入学者選抜への転換」が挙げられており、本特色入試はまさにその方向性に沿うものとなっています。

この特色入試の実施により、これまでの知識のみを問う学力試験では測ることのできない能力・意欲・適性を持った学生の入学が見込まれ、一般入試で入学した学生と刺激し合うことによる教育の相乗効果が期待されます。本学は、特色入試を通じて、総合的な判断力と優れた専門力を有し、社会の各界で積極的に活動できるグローバルリーダーの育成に努めていきます。

とのできない能力・意欲・適性を持った学生の入学が見込まれ、一般入試で入学した学生と刺激し合うことによる教育の相乗効果が期待されます。本学は、特色入試を通じて、総合的な判断力と優れた専門力を有し、社会の各界で積極的に活動できるグローバルリーダーの育成に努めていきます。

能力・意欲・適性
幅広い学びや志を評価する
新たな入試制度を導入



特色入試選抜要項「概要」記者発表

京都大学の持続的発展を支える組織改革の骨子

既存の組織の枠を越えた 教育研究実施体制を目指す

昨今の学問諸分野の発展は従来にも増して加速し、異分野との統合発展の可能性がますます拡大しています。一方、学問が発展することで各分野の細分化も進み、大学の教育研究組織は硬直化を引き起こしつつあります。

国立大学法人化以降、大学を支える運営費交付金は毎年定率で削減が続いており、国立大学の持続的発展にとっては好ましくない状況が続いています。また、国内の18歳人口が減少する中で学生獲得をめぐる国際的な大学間競争の進展、大学教育に対するニーズの変化など、教育面において対応を迫られる問題も増加しており、今後も継

続する見通しとなっています。本学では、こうした環境変化に対応し、課題を適切に解決しうる組織体制の構築を検討した結果、平成26年3月、「京都大学の持続的発展を支える組織改革の骨子」を策定、「学域・学系制(教育研究組織と教員組織の分離)」の導入を決定しました。

この学域・学系制は、教育研究組織の枠を越えた兼担等を柔軟に安心して行えるようにするための制度で、導入することで、①広い視野と全学的視点で優れた教員を確保できる体制の構築(教員人事の透明性の確保)、②教員の定員削減への対応、③教育研究の全学実施体制の構築、④社会

ニーズ等に対応した教育研究プログラムや学際・新学術分野の創出と組織再編等の実現、といった効果が期待できるとともに、既存の教育研究組織の枠を超えて教員同士が相互に交流することで、将来教育研究を支える組織のあるべき姿に関する活発な議論がなされ、結果的に本学の教育研究機能が更に強化されることが期待できます。

今後は平成28年4月に学域・学系制を導入することを目標に、具体的な制度設計を行うワーキング・グループにおいて、学域・学系制の具体的な制度設計を進め、新体制への移行準備を進めます。

Topics-7

さまざまな取り組み

教育

京都大学ジャパングートウェイ構想 (スーパーグローバル大学創成支援)

徹底した「大学改革」と「国際化」を断行し、世界的に魅力的なトップレベルの教育研究を行う大学や我が国社会の国際化を牽引する大学を重点支援するスーパーグローバル大学等事業(スーパーグローバル大学創成支援)に「京都大学ジャパングートウェイ構想」が採択されました。

本構想は、京都大学インターナショナルカレッジ運営機構(International College of Kyoto University, i-CoKU)

を設置し、理学研究科数学・数理解析専攻、工学研究科化学系6専攻、医学研究科医学専攻・医科学専攻、経済学研究科・文学研究科・農学研究科のアジア・社会科学系分野等を中心に、世界トップレベル大学と大学間協定を締結して、共同実施科目をコアカリキュラムとする国際共同教育プログラム「スーパーグローバルコース」、国際共同学位プログラム「ジョイント/ダブルディグリープログラム」を実施するものです。

国際共同教育・学位プログラムを通じて、世界トップレベル大学の研究者の招へいや留学生の受入・本学教員や学生の派遣等大学間交流を活性化し、「ワールドプレミアム高等教育ネットワーク」を構築することで、本学の研究・教育力の更なる強化を図り、世界で活躍する次世代のトップレベル研究者を輩出します。



京都大学ジャパングートウェイ構想概念図

学生支援

学生の生活と様々な活動への支援

松本総長就任以降、本学の学生の学生生活を充実させるため、ハード面、ソフト面の双方から様々な支援事業を行いました。

学生支援のための組織として、カウンセリングセンター、障害学生支援室、キャリアサポートセンターを統合するとともに、健康科学センターなどとの連携をよりいっそう緊密にし、強化するため、平成25年8月に学生総合支援センターを設置しました。

経済的支援としては、国から措置される授業料免除枠に加え、本学独自の支援事業として1億円の免除枠の拡大と東日本大震災による被災学生に対する特別枠を設けました。

福利厚生施設では、中央食堂、西部食堂、北部食堂について耐震改修ならびに食堂ホールの拡大など食堂機能の充実を図るこ

とで学生へのサービスを向上させました。

加えて、学生寮の整備として、現在、吉田寮新寮の建設工事を行っており、約半世紀ぶりに新しい学生寮が設置される予定です。

また、学生が自主・自立的に行う課外活動に対する支援も積極的に行いました。

長年の懸案事項であった課外活動棟(5棟)を西部構内に整備するとともに、音楽・ダンス系クラブが使用している学生集会所の建て替えに着手しました。北部グラウンド内では、人工芝化をはじめ、部室棟の建て替え、観戦用スタンドの設置などのほか、女子トイレ・シャワー棟の全面改修を行いました。体育館では、熱中症対策として送風ファン等を設置、附設プールの観戦用スタンドの耐震改修も行いました。更に、吉田南グ

ラウンドに夜間練習用の照明設備を設置したほか、薬学部構内にあるテニスオムニコートへの張り替えや弓道場への照明設備の設置など総合的に練習環境の改善が図られました。

また、体育系・文化系を問わず数多くの課外活動団体に対して、設備の更新や不足する物品等に対する要望を調査し、幅広い支援を継続的・計画的に行いました。



北部グラウンド「今出川ボウル」開会式

教育研究支援

学際融合教育研究推進センター

学際融合教育研究推進センターは、本学における複数の学問領域を横断する学際的な教育研究を機動的かつ柔軟に推進する実施体制の整備、及び学際融合教育研究活動の支援を行うことを目的に、平成22年3月9日に設置されました。まだ設置後数年程度の新しい組織ですが、大学をめぐる状況が激変する時代において新たな学問の芽を見つけ、育み、広く知ってもらおう活動を積極的に推進しています。設置当初11

だったユニット等の数も平成26年9月末現在では33にまで増加し、着実に本学の部局横断型プロジェクトの推進に必要な場として認知されるとともに重要な機能の一端を担っているといえます。

また、ユニットの運営業務だけでなく、「学際研究着想コンテスト」や「融合度合いの学内調査」、「ワークショップ支援事業」、更には企業との包括協定に基づいた「学内100人ワールドカフェ」等の数々のワークショップ開催など、学

外に対しても本学の革新的な取り組みの一つとして、多数の新聞やメディアに取り上げられています。



ミニカフェ(ダイキシー京大イノベーションプログラム)

研究

iPS細胞研究所(CiRA)

本学は、物質-細胞統合システム拠点(iCeMS:アイセムス)内に設置(平成20年1月22日)したiPS細胞研究センターを改組し、平成22年4月1日、本学の14番目の附置研究所として「iPS細胞研究所(CiRA:サイラ)」を設立しました。山中伸弥教授が所長に就任し、本邦発の技術であるiPS細胞技術の再生医療応用の推進や創薬応用の更なる拡大を目指して、基礎研究から前臨床研究、臨床研究へシームレスに研究を推進しています。

CiRAは、その開所に当り、iPS細胞技術を一日も早く難病と闘う患者さんの元へ届けるために、以下の10年間の目標を掲げました。すなわち、(1)iPS細胞の基盤技術を確立し、知的財産を確保すること、(2)再生医療用iPS細胞ストックを構築すること、(3)前臨床試験を行い、臨床試験を目指すこと、及び(4)患者さん由来のiPS細胞による治療薬の開発に貢献することです。

以来、所員が一丸となり着実に研究

を推進し、目標の確実な達成に励んでいます。平成24年10月には山中所長がノーベル生理学・医学賞を受賞し、研究所は大きな喜びに包まれました。



iPS細胞研究所(CiRA)オープンラボ

Topics-7

さまざまな取り組み

研究

リサーチ・アドミニストレーターの体制整備 — 京都大学URAネットワーク及び学術研究支援室(KURA) —

学術研究支援室(KURA)は、高度な専門知識を有したリサーチ・アドミニストレーター(URA)が中心となり、教育・研究活動に携わる教員・研究者とこれらの運営に関わる事務職員をつなぎ、大学の学術研究を推進しています。

聞きなれない職種ですが、URAは大学の研究推進に欠かせない、情報の収集と提供、研究費獲得支援、プロジェクト運営、研究の国際化、研究活動の広報など、教員組織・事務組織と連携しつつ様々な支援活動を展開しています。大学の研究力を高めるための「縁の下の力持ち」といった役割を担っています。そのため、URAには、大学の教育・研究の現状と教員・研究者

の情報を的確に把握・分析する能力が必要です。また、自ら教育・研究に携わらなくても、よりよい教育・研究環境を提案できる能力も必要となります。

こうした能力を持ったURAが専門業務職員として本学で採用されるようになったのは平成23年度のことでした。URAを全国の大学に定着させようとする文部科学省事業の採択校となったことがきっかけです。本学は、文部科学省の補助金と大学の独自財源を使って、学術研究支援室(KURA)と部局URA室に計50名規模のURAを配置した「京都大学URAネットワーク」をつくり、大学の研究力強化に努めています。



京都大学アカデミックデイ



URAリトリート

大学間連携 学術研究懇談会(RU11)

学術研究懇談会(RU11)は、研究及びこれを通じた高度な人材の育成に重点を置く大学(Research University)による国立私立の設置形態を超えたコンソーシアムです。平成21年11月に北海道大学、東北大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の9大学で発足し、平成22年8月に筑波大学、東京工業大学が加入し、11大学で構成されています。

日本が最先端の知を基盤として激しい国際競争を勝ち抜くとともに、豊かな学術・文化を通じて世界から尊敬を集める国として発展していくためには、世界に冠たる研究大学群を持つことが不

可欠です。また、トップレベルの研究大学群の発展を図ることは、人材供給や教育研究交流等を通じ、他の大学の振興にも資するものであり、高等教育全体、ひいては国力全体の底上げに繋がるものです。

RU11はこれまで、各大学の総長・学長・塾長の強いリーダーシップの下、概算要求・予算編成、事業仕分け等に際し政策提言を行い、予算の確保や、科学研究費補助金の基金化等の規制緩和を実現しました。また、RU11主催の共同記者会見やシンポジウム、論説委員等との懇談等を通じ、国の成長発展の鍵を握る研究大学の充実強化策について議論し、学術の重要性等につい

て理解を促進してきました。これらの努力により、RU11は学術政策等に係る国内外の多様な関係者の中で広く認知され、存在感を高めています。

今後もこうした活動を積極的に推進していきます。



RU11シンポジウム

Topics-7

さまざまな取り組み

国際 海外拠点

国際戦略の重点施策の一つとして、教育研究活動の支援、広報・社会連携・ネットワーク形成、本学教職員・学生の派遣及び国際貢献等に関する事業展開を4つのミッションとして掲げ、全学的な海外拠点の設置・整備を開始しています。

平成26年5月には、ドイツ・ハイデルベルク大学内に欧州拠点ハイデルベルクオフィス、同年6月には、タイ・バンコク市内にASEAN拠点を開設、また、

既存の産官学連携欧州事務所を、欧州拠点ロンドンオフィスに移行しました。これらの海外拠点は、それぞれの地域におけるハブ拠点としての機能を持ち、学内外の関係機関・部署を有機的につなぐとともに、相互協力体制を強化しています。

各拠点には、所長のほか、職員3名（リサーチ・アドミニストレーター、事務職員、現地職員）を配置し、研究プロジェクト・研究活動の運営支援、留学情

報の提供、同窓会活動等を通して、積極的な情報発信ならびに連携強化に関する活動を進めています。



ASEAN拠点開所式

国際 海外の大学等との連携

本学は海外の教育・研究機関等と積極的な研究・学生交流を図るため、大学間学術交流協定を43ヶ国・地域の124大学4大学群4機関、大学間学生交流協定を25ヶ国・地域の77大学2大学群と締結しています（平成26年9月末現在）。

また、国際戦略に基づき、国際的な共同研究を促進することを目的として、海外の大学との共催による国際シンポジウムを実施しています。平成25年度は、英国・ブリストル大学、国立台湾大学、スイス3大学（スイス連邦工科大学

チューリッヒ校・チューリッヒ大学・スイス連邦工科大学ローザンヌ校）、米国・ハーバード大学、トルコ・コッチ大学とシンポジウムを開催しました。

更に、大学間の相互理解を深め、共通する重要な諸問題について教育・研究の分野から協力・貢献をするために、様々な国際大学連合が結成されています。本学もAPRU（環太平洋大学協会：環太平洋地域の16ヶ国（地域）45大学）、AEARU（東アジア研究型大学協会：東アジア地域4ヶ国（地域）17大学）

のほか、平成22年にHeKKSaGOn（日独6大学学長会議コンソーシアム）、平成24年にはRENKEI（日英産学連携プログラム）に参画して、多様な共同事業を展開しています。



APRU第16回年次学長会議

情報発信・支援者との連携

京都大学同窓会

本学同窓会は、会員相互の交流と親睦、そして本学の発展に貢献することを目的として、平成18年11月に設立され、当初、学部・研究科等同窓会42組織、地域同窓会9組織(国内7組織、海外2組織)の51組織で発足しました。平成20年10月に就任以来、卒業生との連携を重視し、特に第二期中期目標・中期計画期間においては全学同窓会支援・卒業生連携事業を重点事業として位置付け、国内外の地域同

窓会の設立支援、開催支援を通じて同窓会活動を活性化させるとともに、ホームカミングデイを開催するなど、卒業生と大学、卒業生相互の交流を促進し、緊密な相互連携協力を図ってきました。その結果、発足時の組織数と比較し、ほぼ2倍の101組織(平成26年9月現在)で構成されるに至り、飛躍的な拡がりを見せました。

今後、同窓生の愛校心を醸成し大学への支援に繋げるために地域同窓会の

設立や活性化を支援し連携の強化を図り、ネットワークの拡大を目指します。



ホームカミングデイ・音楽会

情報発信・支援者との連携

京都大学鼎会

「京都大学鼎会(かなえかい)」は、京都大学総長のリーダーシップを支えるために、本学出身の企業社長、会長、副会長らが結集して平成24年2月に設立されました。発起人25名にてスタートしましたが、その後、全国各地の様々な業種で活躍されている卒業生の賛同を得て、平成26年9月末時点で約170名の方が参加されています。

京都大学鼎会は、総長のアドバイザーボードとして大学の外部からの

視点で総長に対して提言や助言を行うほか、京都大学基金内の「総長リーダーシップ基金」への寄付等を通じて、物心両面から総長のリーダーシップを支援しています。

総長リーダーシップ基金は主として総長独自のアイデアによる事業に活用されており、これまでには、異分野融合の研究を促進するための「学際研究着想コンテスト」(平成25年度、26年度に実施)、学生がいわゆる古典と呼ばれる書物に親しむ機会を増

やすこと目的とした「松本総長が選ぶグレートボックス・ライブラリー」(吉田南総合図書館等に設置)等を実施しました。



鼎会平成26年総会

Topics-7

さまざまな取り組み

情報発信・支援者との連携

京都大学基金

京都大学基金は、大学の自主的で安定的な財源となることを目標に、平成19年度に設立されました。

在任期間中は基金の拡充に努め、将来にわたって継続的・安定的に基金活動を行っていくための基盤を構築することができました。特に、平成23年4月には渉外部を充足させ、基金専任の職員を配置し、活動を精力的に推進しました。具体的には、新入生保護者向けのキャンペーンなどの募集活動を積極的に展開したほか、顕彰制度の整備も進めました。更に、平成25年には外部人材を採用し、本格的な渉外活動を推

進する体制を整えました。

また、基金の拡充のため、精力的な“トップ外交”を展開し、企業や有力な卒業生を多数訪問したほか、高額寄付者を大学に招待して開催した「感謝の集い」では、100名を超える参加者と交流を深め、本学への引き続きのご支援を呼びかけました。

その結果、平成20年10月の就任以来、成長に向けて大きく舵を切ることができ、就任時は約1,350万円でしたが、退任時にはおよそ110倍の15億円まで大きく成長しました。

京都大学基金の活動は、8年後の平

成34年に迎える京都大学創立125周年に向けて、更に活性化させていく必要があります。

今後も積極的に寄付募集活動を行い、京都大学基金の更なる充実を目指します。



京都大学基金「感謝の集い」

情報発信・支援者との連携

東京オフィス

平成13年度から、東京地区の拠点として「京都大学東京連絡事務所」を開設・運用してきましたが、本学の将来にわたる発展に資する新たな事業展開を視野に入れ、東京地区における、情報の収集及び発信の拠点として、平成21年9月に「京都大学東京オフィス」を品川駅港南口の品川インターシティA棟27階に新たに開設しました。オフィス内には、教職員・学生・卒業生が使用できるラウンジ、ワークスペース、会議室等を設け、開設以来、各種研究会やシンポジウム、他機関研究者等との打合せ、そして東京地

区での同窓会などに幅広く利用されてきました。就職活動中の学生の利用も多く、また、「東京で学ぶ京大の知」をはじめとする一般向けのセミナーや入試説明会等を多数開催し、情報発信に努めてきました。利用者数は毎年伸び続け、平成25年度には2万人を超えました。今後も、本学の構成員、関係者が東京地区で活発に活動するための拠点として利便性の向上に努め、また、一層の情報収集・発信はもとより社会との連携、同窓生との交流などを通じ本学の首都圏でのプレゼンス向上を図っていきます。



東京オフィス(ラウンジ)



東京オフィスのある品川インターシティA棟

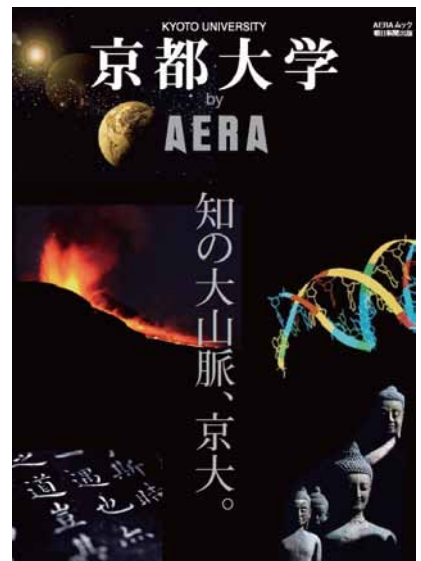
『京都大学 by AERA 知の大山脈、京大。』の刊行

今までの大学広報にはなかった斬新なアプローチで卒業生・受験生をはじめとした幅広い層に本学の魅力を伝えるため、ムック本『京都大学 by AERA 知の大山脈、京大。』を平成24年9月に刊行しました。

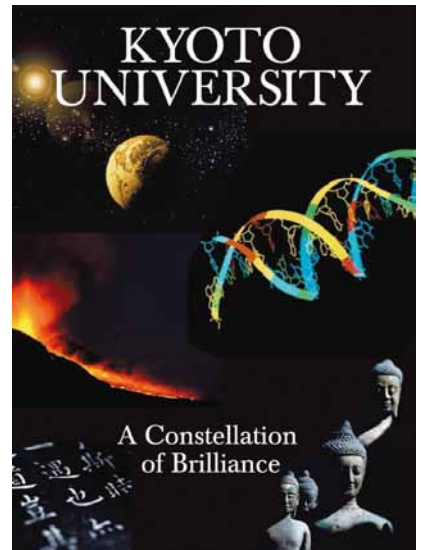
世界をリードする本学の代表的な研究、人気の授業やキャンパスの最新事情等を紹介し、豊富なビジュアルと人物に焦点を当てた読み応えのあるインタビュー等の取材記事により構成され、「京都大学の今」を広く知ることができる内容となっています。このムック本は、関西地区のみならず全国の書店にて販売され、これまで京都大学に関心の薄かった層にも本学につ

いて知ってもらう契機となりました。

また、ムック本が好評を博したことから、同年11月には山中伸弥教授のノーベル生理学・医学賞受賞を記念して、英語版『Kyoto University -A Constellation of Brilliance-』を作成しました。Constellationとは星座という意味で、タイトルには卓越した知の輝きたちという意が込められています。この英語版は、ムック本の記事から研究者紹介記事を中心に抜粋・再編集したもので、大学の広報媒体として広く国内外に向けて本学の卓越した研究活動をアピールするために活用されています。



『京都大学 by AERA 知の大山脈、京大。』



『Kyoto University -A Constellation of Brilliance-』

Topics-7

さまざまな取り組み

社会連携

京都の未来を考える懇話会 『京都ビジョン2040 —30年後の京都の姿』

「京都の未来を考える懇話会」は、京都の行政・産業・文化芸術・メディア・大学のメンバーが集まり、未来の京都の「ありたい姿」を語り合い、京都の人々が一緒に目指したいと思える未来像の提案を目的に、平成22年4月に立ち上げられました。3年間で計12回にわたった議論は、平成25年5月、『京都ビジョン2040 —30年後の京都の姿』として取りまとめられ、公表されました。

この提言書では、「世界交流首都・京都へ」をメインテーマに、「世界の文化首都・京都」、「大学のまち・京都」、「価値創造都市・京都」、「交流の好循環を

支える地域基盤」の4つのテーマについて目標が掲げられています。

このうち、「大学のまち・京都」では、「京都全体がキャンパス化し、世界中から集う学生・研究者・芸術家や地域住民など、あらゆる人々が活発に交流し、社会課題を解決するとともに、新たな知見を生み出す大学のまち」が未来像として提言されています。

本学は、地(知)の拠点整備事業「KYOTO未来創造拠点整備事業」、博士課程教育リーディングプログラム、「国際高等教育院」、国際戦略「2x by 2020」、COI STREAM「活力ある生涯

のためのLast 5Xイノベーション」、「京都大学・稲盛財団合同京都賞シンポジウム」などの実施を通じて、「大学のまち・京都」のみならず全てのテーマにおいて、その実現に繋がる活動を積極的に展開しています。



京都ビジョン2040(概要)

社会連携

地(知)の拠点整備事業「COC:センター・オブ・コミュニティ」

本事業は、大学が自治体を中心とした地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めるもので、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての機能を強化することを目的とした、文部科学省の補助事業です。

本学からは平成25年度に「KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成(COCOLO域)」が採択されました。これは「世界交流首都・京都」の実現をねらいとし、社会変革期を担う「グローバルトッパーリーダー人材」の育成の

ために、教員・学生と地域が協働しつつ地域課題の解決を目指し、協働の成果を学生の教育に還元する取り組みです。

本事業では、京都の現実の課題に関する講義を行う「まなびよし」、フィールドで実際の問題と向き合う「いきよし」として、科目を提供する教員を学内公募し、平成26年度には全24科目を提供しています。なお、一定単位数を取得し、基準を満たした学生には履修証明書「グローバルトッパーリーダー人材」が授与されます。

また、地域のワンストップ窓口や地域連携事業を担う「つなぎよし」として、

本事業ウェブサイトやFacebook、Twitter等を活用した情報発信や情報収集の成果を生かし、各関係団体と協力してイベント等の各種取り組みを行っています。



京都学インターンシップ・プログラム

社会連携

京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウム

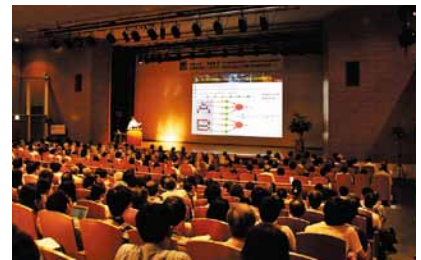
京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウムは、公益財団法人稲盛財団が主催する、日本が世界に誇る国際賞である京都賞の分野を対象に、最先端または現在注目される研究者や芸術家を迎えて開催するものです。講演などを通じて、様々な出会いが生まれ、各分野の新たな発展へと繋がる場を提供するとともに、次世代の研究者の育成や、最先端の学術・芸術の動向や魅力を広く社会に発信することを目的としています。

本シンポジウムは、当該分野の専門家はもちろんのこと、研究者の卵である大学院生や一般の方にも参加いただけ

ることが重要であると考えています。また、京都賞は芸術も対象としており、分野が多岐にわたるところが特徴であることから、本シンポジウムも京都賞が対象とする様々な分野の専門家が出会い、お互いにこれまで知ることのなかった異分野の先端的な取り組みに触れることでそれぞれが刺激し合い、更にはここから新たな革新的発展が起こる切っ掛けとなることを期待するものです。

平成26年7月に開催した第1回は、情報科学、生命科学、思想・倫理の3分野を対象に、約700名の参加者を得て開催しました。第2回以降は、平成27年に

エレクトロニクス、生物科学、音楽、平成28年にバイオテクノロジー及びメディカルテクノロジー、数理科学、美術、平成29年に材料科学、地球科学・宇宙科学、映画・演劇を対象として順次開催していく予定です。



第1回京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウム

Topics-7

さまざまな取り組み

医療・臨床研究 臨床研究中核病院 臨床研究総合センター

平成24年6月、医学部附属病院は厚生労働省より基礎研究、開発段階の臨床研究から市販後の臨床研究までの一連の流れと、そこから新たな基礎研究に繋がるというイノベーションの循環の中で、医薬品、医療機器等の研究開発を推進し、医療の質の向上に繋げていくための拠点、「臨床研究中核病院」として選定されました。

この選定と、難病治療、医療産業の発展、研究分野における競争力強化などの社会的要請を背景に、治験を含む臨床研究が効率的かつ円滑に進む

ように、平成25年4月、既存の探索医療センターと治験管理センター、EBM研究センター、医療開発管理部を統合し、臨床研究総合センターを創設しました。

臨床研究中核病院整備事業は平成28年度までの5年間の事業であり、3年目となる平成26年度は、プロジェクトマネジメント体制、臨床研究受入・相談体制、データマネジメント体制等、各種体制整備を推進中です。

なお、平成26年3月26日には臨床研究中核病院整備事業の一環で、

全国の病院に先駆けて、国際規格のISO15189 2012(臨床検査室—品質と能力に関する特定要求事項)の認定を取得しました。



京都大学における臨床研究中核病院概念図

医療・臨床研究 iPS細胞臨床開発部

平成19年、本学山中伸弥教授らにより、ヒトiPS細胞が樹立され、以来、iPS細胞研究は大きく展開し、医療・医学への応用に対する期待が高まっており、これを受け、医学部附属病院では、iPS細胞研究所(CiRA)と共同し、疾患特異的iPS細胞研究を円滑に実施し、将来のiPS細胞を用いた再生医療を実現するための基盤整備を行うた

めに、iPS細胞臨床開発部を平成23年12月1日に開設しました。

iPS細胞臨床開発部は、1)疾患iPS細胞研究の円滑な遂行、2)将来のiPS細胞等を使った再生医療を立ち上げるための基盤整備を目的とし、iPS細胞研究への協力者への説明・同意取得や組織採取等の場となる「iPS細胞外来」と、iPS細胞の樹立・検査技術の確

立とその実施を行う「品質管理技術開発室」の2部門から構成されています。

現在、iPS細胞作製のための手順書などの改正を行うなど、社会に還元できる再生医学、再生医療の実現に向けての基盤整備を行っており、平成27年度にはiPS細胞研究所と共同iPS細胞を用いた臨床研究の開始を目指しています。

積貞棟 —がんの集学的診療体制の充実—

積貞棟は、当時、医学部附属病院において病棟の老朽化や診療科の分散配置の問題を解消すべく新病棟構想を検討していたところ、任天堂株式会社山内溥相談役から「最先端の医療を行うのにふさわしい病棟を建ててほしい。」と多大なご寄付を賜ることとなり建設を進めることとなりました。

建設にあたっては設計段階から幾度も京都市と協議を重ね、景観審査会から高さ制限の特例許可を得て、平成22年3月に地下1階、地上8階建て、病床数294床の新病棟が完成しました。

積貞棟整備の基本方針の中心は、

がんの克服に向けて複数の診療科・部門から多数の医療スタッフが参画し、有機的に連携する部門横断的な「がんの集学的診療の推進」です。主にがん治療を目的とした診療科を中心に配置し、内科・外科・放射線科が合同したユニット外来も実施しています。更に、外来化学療法も充実しており、様々ながんに対して手術によらない化学療法が可能となっています。

また食事面では、がん治療などで抵抗力の低下した患者さんにも有用となる高度な衛生管理と美味しさの両立を可能とする「ニュー・クックチルシス

テム」を国立大学病院で初めて導入しました。安全かつ衛生的、適時・適温で治療食が提供できるようになり、使用食材やメニューの幅も充実、特別食も用意するなど、患者さんには好評を得ています。



積貞棟

Topics-7

さまざまな取り組み

大学運営 共通事務部

業務の多様化、高度化、複雑化が進む一方で、外部資金や競争的資金の増加などによる事務量の増加へ対応するため、事務の効率化・集約化の推進を基礎にした業務処理と事務組織の見直しについて、平成24年度から具体的に検討を進め、平成25年4月に本部構内(文系)、本部構内(理系)、吉田南構内、医学・病院構内、南西地区、北部構

内、宇治地区、桂地区の8つの共通事務部を設置し、集約的に業務を行う効率的・効果的な組織体制を整備しました。その後、各共通事務部において事務処理体制の整備や事務室の移転・改修に係る調整等を進めるとともに、関係部局の教職員・学生等に対して、具体的な事務処理体制・移行時期について周知・説明を行ったうえで、7月から

共通事務部・部局事務部・事務本部で本格的に事務処理を行う体制を整えました。以降は、共通事務部の安定的運営による効率性・専門性の向上等の集約化効果の創出に向けて、組織体制や業務フローを更に精査するとともに、各共通事務部のホームページを立ち上げ事務手続を体系的に整理するなど、取り組みを強化しています。

大学運営 運営組織の改革

法人化以降、国立大学にも「経営」の視点が求められるようになったことに対応するため、本学でも様々な運営組織改革に取り組みました。

本学は理事を7名置いています。本学のような大きく多様な組織においてはそれぞれの職責が非常に重いものとなります。このため、理事を適切に補佐する体制整備として理事補の職を新設しました(平成20年11月)。同様に、総長を補佐するための組織として総長室を新設しました(平

成20年10月)。

また、執行部の役割が大きくなるにつれて、執行部内での情報共有・意見交換を密にする必要が高まりました。このため、法定されている役員会に加え、副学長や機構長等も加えた役員戦略会議、更に理事補や本部事務部長を加えた拡大役員懇談会を設けました。

事務組織の見直しとしては、社会との連携を強力に推進し、本学の更なるプレゼンスの向上と大学支援者の

拡大を図るため、平成23年4月に渉外部を新設しました。その主な活動には、「京都大学らしさ」をより鮮明にアピールするための戦略的な情報発信、ホームカミングデイをはじめ様々なイベントを通しての卒業生との緊密な交流、国内外の同窓会設立支援と京都大学同窓会への入会促進、京都大学基金募集の活性化、大学広報活動の充実、各種公開講座等の企画・実施などがあります。

「重点事業アクションプラン2006～2009」(第一期)、 「第二期重点事業実施計画」

本学には、我が国の人材養成の中核を担い、地域の教育・文化・産業の基盤を支えるなど、国民の様々な期待に適切に応えていくことが強く求められています。

こうしたなか、中・長期的及び全学的な視点から大学を運営するため、本学が戦略的・重点的に実施すべき事業について毎年度役員間で検討を重ね、実

施してまいりました。松本総長は、第一期では財務担当理事として「京都大学重点事業アクションプラン2006～2009」、第二期では総長として「京都大学第二期重点事業実施計画」において、それぞれリーダーシップを遺憾なく発揮し、策定までに至りました。

主な取り組みとして、第一期では、附属図書館の一部を24時間利用可能と

するための整備や、宇治キャンパスの更なる発展のため「京都大学宇治おうばくプラザ」の整備等を実施しました。第二期では、次世代を担う先見的な研究者育成のための「白眉プロジェクト」や、グローバル化に向けて若手研究者・職員・学生を海外に派遣する「ジョン万プログラム」等を実施しました。

京都大学第二期重点事業実施計画 【平成22～25年度着手決定事業】

教育 推進事業	オープンコースウェア(OCW)支援事業 教育環境改善事業 小中高大連携推進事業 ～サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト～ キャリア支援充実化事業 経済的・身体的学生支援強化事業 身体障害学生支援強化事業 吉田南構内再生整備事業 ～学生寄宿舎の整備～ 東日本大震災に伴う被災学生に対する経済的支援事業 新大学院「思修館」施設整備事業 ～博士課程教育リーディングプログラム～ 学生寄宿舎整備事業(熊野寮)	広報・社会 連携事業	全学同窓会支援・卒業生連携事業 京都大学のプレゼンス向上のための戦略的情報発信の充実 戦略的広報事業(ホームページによる情報発信の拡充事業) 戦略的情報発信の拡大・展開事業 名勝清風荘庭園の保存・活用整備事業 京都大学基金の広報・活動支援事業	
	研究 推進事業		研究推進戦略活性化事業 若手研究者支援事業 女性研究者養成事業 シニア・コア研究者フォローアップ事業 京都大学次世代研究者育成支援事業 ～白眉プロジェクト～ 世界トップレベル研究拠点融合研究加速支援事業 研究支援体制強化プロジェクト	基盤 整備事業等
	国際化 推進事業	教育国際化推進事業 留学生受入拠点整備事業 国際化戦略推進事業 戦略的国際学術研究推進プログラム(ジョン万プログラム) 学生の国際交流推進事業 国際交流環境整備推進事業 外国人留学生・研究者のためのワンストップサービス実施事業 海外全学拠点設置事業		

Topics-7

さまざまな取り組み

施設整備 戦略的な施設の整備

この6年間、施設整備に関しても学内外からの様々なニーズに対して多様な資金を活用しながら戦略的に進めてきました。

例えば、「物質－細胞統合システム拠点」は、文部科学省施設整備費補助事業により、平成21年3月に本館、平成22年10月に研究棟が整備されました。世界から第一線の研究者が集まる、優れた研究環境と高い研究水準を誇る「目に見える拠点」の形成を目指す「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム(WPIプログラム)」の施設として、共同研究スペース以外に大型セミナー室や研究者の交流が可能なラウンジ等を有するとともに、学際融合研究を推進するための開放的なオープンオフィスを備えています。

「iPS細胞研究所研究棟」は、iPS細胞研究の世界的拠点として、文部科学省施設整備費補助事業により平成

22年2月に建設されました。生体内での細胞の働きや効果を検証する動物実験施設や、品質保証された細胞を作製、培養するための細胞調製施設等が設けられています。また仕切りのないオープンラボの採用により、研究に関する情報や成果の共有、意見交換が行いやすく、効率的に研究を進めることができます。

「北部総合教育研究棟」は、最先端教育と基礎科学教育のシームレスな融合センターを目指し、全学共用スペースとして、文部科学省施設整備補助事業により平成23年3月に建設されました。益川敏英名誉教授のノーベル物理学賞受賞を記念した益川ホールを有するほか、利用形態の変化にフレキシブルに対応できる機能も有しています。また、外断熱など環境負荷に配慮した取り組みも行っています。

「国際科学イノベーション棟」は、

文部科学省が進める「革新的イノベーション創出プログラム」の拠点の1つで、平成27年3月の完成予定です。この施設には、最先端研究を行うラボとともに、他大学や企業との連携、起業家による研究開発成果の事業化を推進するオフィスが入居、学内外の関係者が集い、交流するイノベーション創出拠点を構築する予定です。また、一般の学生も集える交流の場を提供します。環境面においては、太陽光発電や雨水の便所洗浄水利用などの取り組みを行っています。

「宇治おうばくプラザ」は「京都大学重点事業アクションプラン2006～2009」における学生支援事業として平成21年8月に建設されました。大学院学生・留学生等が集い、また国際会議等を常時開催できる施設として、300人収容の「きはだホール」のほか交流スペースやレストラン、コンビニエンスストアなども備えていま

す。宇治市の協力も得て、宇治キャンパスとして地域住民や社会との活発な交流が可能な、親しみやすい開放的な環境が実現しました。

本学のシンボルである百周年時計台記念館周辺を、安全かつ本学のシンボリックなスペースにふさわしい明るくオープンな憩いの場とするため、「第二期重点事業実施計画」事業として平成22年11月から平成23年5月にかけて環境整備を行いました。LED外灯などの照明設備については環境省「省エネ・照明デザインアワード2012」優秀事例を受賞しました。

本学では学外からの温かい支援による施設整備も進めています。例えば、「稲盛財団記念館」は、「京都大学が我が国を代表する学問の府として、地域社会はもとより国際社会に対し21世紀の更なる学術・文化の発展に貢献していくこと」を共通の理念として、財団法人稲盛財団（稲盛和夫理

事長）の寄付により平成20年10月に建設されました。「杉浦地域医療研究センター」は、地域医療の教育及び研究の発展に寄与するようにと、杉浦広一氏、杉浦昭子氏の寄付により平成21年6月に建設されました。「積貞棟」は、当時の任天堂株式会社相談役山内溥氏の寄付により、患者アメンティを重視した高度先進医療・最先端医療を実践するための環境を提供し、地域社会に貢献する病棟として平成22年3月に建設されました。「先端医療機器開発・臨床研究センター」は、医療機器開発のボトルネックである臨床研究に重点的に取り組む産学連携拠点として、経済産業省の補助金とキヤノン株式会社からの寄付金により平成23年3月に建設されました。思修館・合宿型研修施設（Ⅱ期）「船哲房（せんてつぼう）」は、教育研究環境の充実に寄与するようにと船井電機株式会社取締役会長船井哲良氏の

寄付により平成26年6月に建設されました。



物質-細胞統合システム拠点研究棟



百周年時計台記念館周辺環境整備

京都大学における大学改革 主な取り組み

1.教育

1-1. 学士課程教育の改革

(1) 初年次教育の充実

- ①入学式に引き続き総長の講演
- ②新入生ガイダンス時の履修指導等の充実
- ③学習意欲の向上並びに大学生活への適応をサポートするため新入生特別セミナーを実施

(2) 全学共通教育の改革

- ①高等教育研究開発推進機構における一連の共通教育改革
 - ・科目の整理と科目群の見直し
 - ・非常勤講師の段階的削減
 - ・ポケット・ゼミの後期開講による受講者増加
 - ・言語教育の改革:プレゼンテーション科目の設置、初修外国語科目のCALL授業
 - ・京都大学英語学術語彙データベースの開発ならびに「京大・学術語彙データベース基本英単語1110」の刊行
- ②高等教育研究開発推進機構から国際高等教育院へ(平成25年度)
 - ・教養・共通教育に関して、これまでの構造を改め、企画と実施の両面に対して責任を負う組織を設置
 - ・外国人教員の増員
 - ・国際高等教育院に国際学術言語教育センター(i-ARRC)設置(平成26年度)
 - ・TOEFL ITPの受験を義務化

(3) 入学定員の改訂

- ・医学部(平成21・22年度)

(4) キャンパス・ミーティングの活用

- ・全学共通教育をはじめとする教育改革に係る全学(教員・学生)の意見を聴取し、以降の検討に反映

(5) 英語による授業の実施

- ①KU, Profile英語による授業コースの設定:工学部地球工学科
- ②KUINEP科目の充実

(6) 学事暦の整備

1-2. 大学院教育の改革

(1) 入学定員の改訂

- ①博士後期課程から修士課程へ定員振替増
 - ・エネルギー科学研究科
 - ・情報学研究科
 - ・地球環境学舎
- ②修士課程(専門職学位課程含む)の定員増
 - ・医学研究科(社会健康医学系専攻、人間健康科学系専攻)
 - ・工学研究科
 - ・経営管理教育部
- ③博士後期課程の定員増
 - ・医学研究科(人間健康医学系専攻)
 - ・薬学研究科
 - ・アジア・アフリカ地域研究研究科
- ④修士課程・博士後期課程の定員減
 - ・文学研究科
 - ・法学研究科(法曹養成専攻)
 - ・理学研究科
 - ・薬学研究科

(2) 博士課程教育リーディングプログラムの実施

- ①平成23~25年度:オールラウンド型1件、複合領域型3件、オンリーワン型1件の採択
- ②博士課程教育リーディングプログラム運営会議及び運営委員会を整備(学位規程等の改正)
- ③旧京都市左京区役所跡地を取得し、教育研修施設「京都大学東一条館」を着工
- ④「総合生存学館・思修館」
 - ・オールラウンド型
 - ・グローバルリーダー人材育成を目的とする新しいタイプの大学院
 - ・平成24年度設置申請、平成25年度設置
 - ・合宿型研修施設の整備
- ⑤「グローバル生存学大学院連携プログラム」
- ⑥「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム」
- ⑦「デザイン学大学院連携プログラム」
- ⑧「豊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」

(3) 研究科横断型教育プログラムの実施

- ①異分野との遭遇によるブレイクスルー、平成21年度からスタート

- ②Aタイプ:研究科開講型(修了単位への編入可)

- Bタイプ:特別開講型(修了単位への編入不可)

- (4)ダブルディグリー・ジョイントディグリープログラムの検討開始
- (5)特別研究学生交流協定を新たに国内12大学と締結
- (6)単位互換協定を新たに国内2大学と締結
- (7)「京都大学大学院案内」発刊

1-3. 教育における国際化

- (1)国際化拠点整備事業(グローバル30)を推進
- (2)スーパーグローバル大学創成支援タイプA(トップ型)に「京都大学ジャパングートウェイ構想」が採択
- (3)米国オーリン工科大学等との連携
- (4)留学先で取得した単位の認定に関する通則改正や運用の申し合わせ
- (5)海外サマープログラムへの参加や中長期の留学を可能とする学事暦の検討
- (6)大学の世界展開力強化事業(平成23年度1件、平成24年度2件)
- (7)外国人教員・研究者の増員【再掲】
- (8)全学共通教育における言語教育改革【再掲】
- (9)英語授業の充実【再掲】
- (10)博士課程教育リーディングプログラムの実施【再掲】
- (11)ダブルディグリー・ジョイントディグリープログラムの検討開始【再掲】
- (12)「Asian Future Leaders Scholarship Program」実施協定締結
- (13)全学共通教育国際学生シンポジウム開催

1-4. 学習支援環境の充実

(1) 図書館の利便性拡大

- ①「学習室24」整備による自習室終日利用
- ②全館改修工事により閲覧スペース大幅拡大
- ③ラーニング・コモンズ整備
- ④サイレントエリア整備

1-5. 学生生活支援の充実

(1) 学寮の改修

- ①吉田新寮の建設着工
- ②熊野寮の耐震改修及び電気設備機器改修

(2) 経済支援の拡充

- ①Asian Future Leaders Scholarship Program等による奨学金の整備
- ②授業料免除の独自枠の設定
- ③東日本大震災被災者への独自支援策

(3) 学生総合支援センターの整備

- ・カウンセリングセンター、キャリアサポートセンター、障害学生支援室の統合による一体的運営でサービスを充実

(4) 課外活動支援

- ①学生集会所着工
- ②西部課外活動施設整備
- ③北白川スポーツ会館改修
- ④体育館改修
- ⑤北部グラウンド整備(人工芝化)
- ⑥北部クラブボックス整備
- ⑦北部トイレ・シャワー棟女子更衣室改修
- ⑧吉田南グラウンド整備
- ⑨志賀高原ヒュッテ移管受入
- ⑩ボート部合宿所整備
- ⑪アーチェリー練習場建替
- ⑫ブルスタンド、脱衣室等改修
- ⑬テニスオムニコート張替え
- ⑭体育系団体、文化系団体の活動に必要な物品等支援

(5) 福利厚生

- ①京大大学生生活協同組合との相互協力関係に関する協定書締結
- ②中央食堂、西部食堂、北部食堂(北部学生支援センター)の全面改修(耐震改修含む)、南部食堂の一部改修
- ③吉田南構内共北ショップ(生協)設置
- ④カフェ(タリーズ)設置
- ⑤駐輪場の整備と自転車シェアサービスの導入

1-6. 入試改革

(1) 入試改革検討本部設置

(2) 特色入試の導入(平成28年度入試から)

- ・入試検討タスクフォースの検討(平成24年度)を踏まえ、入学試験委員会等で継続的に検討
- ・平成26年3月に記者発表

※ 以下には、一部、松本総長が総長就任以前に研究・財務担当理事として実施した項目が含まれています。

1-7. 高大連携事業、オープンキャンパスの充実

- (1) 高大連携事業の実施
 - ① 主要都道府県及び関係市の教育委員会との連携協定締結
 - ② 学びコーディネーターによる出前授業・オープン授業
 - ③ 東京都教育委員会と共催で「京都大学高校生フォーラム in Tokyo」開催
- (2) オープンキャンパス、ジュニアキャンパスの充実
- (3) 「京都大学サマースクール2014」、「京都賞高校フォーラム」などの開催

1-8. その他

- (1) 教育制度委員会の復活
 - ・実質的な審議を平成20年度後半から再開し、教育改革を推進する上で重要な役割を担う。
- (2) 3つのポリシー
 - ・アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3つのポリシーを確立
- (3) 新任教員教育セミナーの実施
- (4) 大規模公開オンライン講座edXコンソーシアムに日本から初めて参加し、平成26年4月より授業配信開始

2. 研究**2-1. 外部資金の拡充**

- (1) 年間628億円に増加(平成25年度)
 - ・科学研究費補助金等137億円
 - ・受託研究・補助金等436億円
 - ・寄附金55億円
- (2) 主な外部資金
 - ① グローバルCOEプログラム(平成20年度6件、平成21年度1件)
 - ② 科学技術システム改革事業(旧科学技術振興調整費等平成20年度5件、平成21年度4件、平成22年度4件、平成23年度1件)
 - ③ 最先端研究開発支援プログラム・FIRST(平成22年度2件)
 - ④ 最先端研究基盤事業(平成22年度4件)
 - ⑤ 臨床研究中核病院整備事業(平成24年度)
 - ⑥ 元素戦略プロジェクト(平成24年度2件)
 - ⑦ 再生医療実現拠点ネットワークプログラム(iPS細胞研究中核拠点)(平成25年度)
 - ⑧ 研究大学強化促進事業(平成25年度)
- (3) 京都大学外部資金公募情報サイト「銚」開設

2-2. 世界をリードする研究体制の構築

- (1) 物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)設置
- (2) iPS細胞研究所(CiRA)設置
- (3) 白眉プロジェクトの実施ならびに白眉センターの設置
- (4) 学際融合教育研究推進センター設置(現在、31ユニット・1拠点・1システムを支援 29頁参照)
- (5) グローバルCOEプログラム【再掲】
- (6) 元素戦略プロジェクト【再掲】
- (7) 研究大学強化促進事業【再掲】

2-3. 研究支援体制、キャリアパス支援の充実

- (1) URA(リサーチ・アドミニストレーター)の採用、学術研究支援室(URA室)を設置
- (2) 名誉教授中心にシニアアカデミーを設立
- (3) 京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)創設
- (4) 京都大学若手研究者スタートアップ研究費創設
- (5) 京都大学若手研究者ステップアップ研究費創設
- (6) 京都大学コアステージバックアップ研究費創設
- (7) 京都大学若手研究者キャリアパス多様化促進事業の実施
- (8) 学術情報リポジトリ「KURENAI」が世界リポジトリランキング(2011年7月版)において、世界第8位、国内第1位となる。

2-4. 研究における国際化

- (1) 「ジョン万プログラム」による若手研究者、職員、学生の海外留学促進
- (2) 外国人教員・研究者の増員【再掲】
- (3) 世界をリードする研究体制の構築【再掲】
- (4) 国際大学連合(AEARU、APRU、IAU)との連携
- (5) 海外の大学と連携した国際シンポジウムの実施
- (6) 早稲田大学他7大学が連携して米国NPO「日米研究インスティテュート」設立

2-5. 産官学連携の充実

- (1) 共同研究件数が増加、民間企業からの共同研究受入額が全国1位(平成24、25年度)
- (2) 特許移転による収入が増加(平成23、24年度全国1位、平成25年度全国2位)
- (3) 産官学連携本部と産官学連携センターの統合
- (4) 共同研究講座・共同研究部門制度導入
- (5) 学術指導制度導入

(6) 国策による共同研究への取り組み

- ① 文部科学省「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」拠点として「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」採択
 - ※ COI: Center Of Innovation
- ② 経済産業省「中長期研究人材交流システム構築事業」による企業との共同研究型長期インターンシップの全国組織「産学協働イノベーション人材育成協議会」の牽引

(7) 大規模な共同研究の推進

- ① AKプロジェクト(アステラス製薬株式会社)
- ② CKプロジェクト(キャンソン株式会社)
- ③ DKプロジェクト(ダイキン工業株式会社)
- ④ 革新型蓄電池先端科学基礎研究事業(12大学、4研究機関、13企業)
- ⑤ 知的クラスター創成事業「京都ナノテククラスター」
- ⑥ 先端医療開発特区(スーパー特区)採択
- ⑦ メディカルイノベーションセンター(TK、DSK、TMK、SK各プロジェクト)
- ⑧ 包括的連携契約
 - ・シャープ株式会社
 - ・株式会社国際電気通信基礎技術研究所
 - ・大阪ガス株式会社
 - ・船井電機株式会社
 - ・株式会社カネカ
 - ・サノフィ・アベンティス株式会社
 - ・住友ベークライト株式会社

(8) 地域と連携した研究の推進

- ① 「京都大学大学院農学研究科附属農場の移転等に係る基本協定書」締結
 - ② 関西イノベーション国際戦略総合特区参画
 - ③ けいはんなオープンイノベーション拠点(旧・私のしごと館)整備協働パネル参画
- (9) 産学共同の研究開発による実用化促進(大学に対する出資事業)「京都大学イノベーションキャピタル」設立計画認定
 - (10) 学外にベンチャーファンドを設立(1号、2号)
 - (11) iPSアカデミアジャパン株式会社設立
 - (12) 関西ティール・エル・オー株式会社と業務委託契約を提携ならびに株式取得
 - (13) 産業競争力懇談会(COCON)入会
 - (14) 独立行政法人や大学共同利用機関法人等(産業総合技術研究所、高エネルギー加速器研究機構、総合地球環境学研究所)との連携協力の推進に関する協定締結
 - (15) 関西経済連合会入会

2-6. 研究者情報の発信力強化

- (1) 「京都大学研究者総覧データベース」、「京都大学教育研究活動データベース」開設
- (2) 「Kyoto University Research Activities」発行
- (3) 「LAUREATES Award-Winning Scholars at Kyoto University」発行

2-7. 公的研究費の適正管理、安全保障輸出管理

- (1) 京都大学競争的資金等不正防止計画策定
- (2) e-Learning研修「研究費等の適正な使用について」実施
- (3) 研究費使用ハンドブック(日本語版、英語版)刊行
- (4) 構内検収所の設置と機能強化
- (5) 安全保障輸出管理体制整備

2-8. その他

- (1) ノーベル賞授賞式出席
 - ・平成20年益川敏英名誉教授
 - ・平成24年山中伸弥iPS細胞研究所長・教授
- (2) 全学寄附研究部門の新設

3. 社会貢献・社会連携・情報発信**3-1. 戦略的情報発信の強化・充実**

- (1) 京都大学東京オフィスの新設(利用者数は7万名超)
- (2) 東京オフィスでの連続講演会「東京で学ぶ京大の知」実施
- (3) 「東京フォーラム」を平成22年度からリニューアル開催
- (4) 本学卒業生の財界トップによって総長応援団「京都大学鼎会」が設立され、総長のリーダーシップを物心両面で支援
- (5) 京都大学の未来を語り合う「総長と新社長との懇談会」を京都と東京で毎年開催
- (6) 「京都大学 by AERA ～知の大山脈、京大。」を刊行し、全国の書店等で20,300部販売
- (7) 京大生がつくるキャンパスマップ「Welcome! 京大」を刊行
- (8) 「京都大学ファンブック」を刊行
- (9) 朝日新聞「大学力」、リクルート「大学の約束」の出版に協力
- (10) エフエム京都「Kyoto University Academic Talk」を放送開始

京都大学における大学改革 主な取り組み

3-2. 基金獲得に係る募集活動

- (1) 京都大学基金の募集活動を多様に展開(平成26年9月末現在13,904件、15.0億円)
- (2) 基金運営委員会の設置
- (3) 「本de基金」の開始
- (4) 「京都大学カード」の発行
- (5) 「京都大学基金寄付者銘板」の設置
- (6) 寄付者に対する「感謝の集い」の開催
- (7) 京都大学基金戦略の策定
- (8) ファンドレイザーを雇用し、積極的な寄付募集活動を展開

3-3. 大学支援者との連携

- (1) 「京都大学同窓会」の充実 101組織(学部・研究科等同窓会47、国内地域同窓会27(連絡会1を含む)、海外地域同窓会23、クラブ・サークル系同窓会4)
- (2) 「京都大学アラムナイ・ネットワークシステム」の開設
- (3) 「京都大学同窓会(京大アラムナイ) Facebook」運用開始
- (4) 「京都大学ホームカミングデイ」の開催

3-4. 広報活動の充実

- (1) 総長と京都大学記者クラブとの懇談会、総長と東京における報道関係者との懇談会の開催
- (2) 京都大学広報戦略の策定
- (3) 京都大学公式Facebookの運用開始
- (4) 京都大学ホームページのリニューアル
- (5) タッチパネル式及び3Dセンサーを用いたモーショントラッキング映像コンテンツによる広報発信の構築(百周年時計台記念館・学生会館・東京オフィス)

3-5. 医療体制、臨床研究体制の充実

- (1) 探索医療センターとEBM研究センター、治験管理センター、医療開発管理部の発展的統合により「臨床研究総合センター」を設置。厚生労働省より「臨床研究中核病院」として指定【再掲】。
- (2) 厚生労働省より、「がん診療拠点病院」、「小児がん拠点病院」として指定
- (3) 寄付による病棟「積貞棟」整備
- (4) 東日本大震災に関して、DMAT隊員、こころのケアチームを派遣
- (5) 病院内に「iPS細胞臨床開発部」設置
- (6) 先端医療機器開発・臨床研究センター設置
- (7) プータンへの医療団の派遣
- (8) 総合高度先端医療病棟着工
- (9) 次世代ハイブリッド手術室の整備・稼働
- (10) 生活習慣病予防研究センターハイメディック棟寄付決定

3-6. 地域連携、社会連携

- (1) 京都の未来を考える懇話会「京都ビジョン2040」発表
- (2) 地(知)の拠点整備事業(大学COC(センター・オブ・コミュニティ)事業)「KYOTO 未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成」採択
- (3) 隔地施設と地域を繋ぐ「京大ウィークス」開始
- (4) 「東日本大震災」被災地の復興支援に係る京都府との包括連携協定締結

3-7. その他

- (1) 京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウム開催
- (2) 京都賞高校フォーラム開催【再掲】
- (3) 名誉フェロー称号を制定、これまで4人に称号を授与
・平成25年度アウン・サン・スー・チャー氏、稲盛和夫氏、山内溥氏
・平成26年度船井哲良氏
- (4) 大学評価シンポジウム実施
- (5) 京都大学シンポジウム シリーズ「大震災後を考える」開催
- (6) 科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)参加

4. 大学運営

4-1. マネジメント体制の充実

- (1) 拡大役員懇談会および役員戦略会議の実施
- (2) 理事補制度創設
- (3) 総長室設置
- (4) 渉外部設置

4-2. 機能強化に向けた検討

- (1) 部局執行部との意見交換
・平成22~23年度にかけて、部局執行部と大学運営について意見交換を行い、今後の経営戦略立案の参考とした。
- (2) 未来戦略検討チームによる提言
 - ① 京都大学の国際化
 - ② リベラルアーツ・教養教育
 - ③ 大学入試制度の将来像

- ④ キャンパスの将来像
- ⑤ 研究者・職員の人材育成
- ⑥ 外部戦略

(3) 「機能強化プラン(2011-2014)」策定

- ① 基礎的学問の強化と新たな課題に対応した柔軟な教育研究体制の構築
- ② 教員の教育研究環境の改善
- ③ 若手研究者の育成強化
- ④ 人材の育成体制の強化
- ⑤ 留学生・外国人研究者の受け入れと日本人学生・研究者の留学の促進
- ⑥ 組織・経営基盤の強化

4-3. 教育研究の充実に向けた全学的体制整備

- (1) 学際融合教育研究推進センターの設立とユニットの集約【再掲】
- (2) 「10年後の京都大学の発展を支える教育研究組織改革に向けて」策定
- (3) 「京都大学の持続的発展を支える組織改革の骨子」策定

4-4. 国際化に向けた取り組み

- (1) 国際交流センターを国際交流推進機構に統合
- (2) 外国人教員の増員【再掲】
- (3) 総長主催「外国人研究者との交歓会」開催
- (4) 国際戦略「2x by 2020」策定・実施
- (5) 海外事務所の設置
 - ① 産官学連携欧州事務所(英国・ロンドン)
 - ② 京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィス(ドイツ)
 - ③ 京都大学ASEAN拠点(タイ・バンコク)
 - ④ 今後、米国西海岸、米国東海岸にも順次開所の予定
- (6) 連携事業の実施等
 - ① 第1回英国プリストル大学-京都大学シンポジウムの開催(英国・プリストル)
 - ② 第1回スイス-京都シンポジウムをスイス連邦工科大学との共催で開催(スイス・チューリッヒ)
 - ③ 第1回国立台湾大学-京都大学シンポジウムの開催(台湾・台北)
 - ④ 第1回回国ホルダー大学-京都大学シンポジウムの開催(仏国・ボルドー)
 - ⑤ AUTM Asia 2013 Kyoto開催(AUTM: Association of University Technology Managers)(京都)
 - ⑥ APRU(Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協会)理事就任
 - ⑦ 第9回AEARU Web Technology and Computer Science Workshopを開催(AEARU: The Association of East Asian Research Universities東アジア研究型大学協会)(京都)
 - ⑧ 第16回京都大学国際シンポジウムをトルコ・コッチ大学との共催で開催(トルコ・イスタンブール)
 - ⑨ 第17回京都大学国際シンポジウムをAEARUとの共催で開催(京都)
 - ⑩ 第18回京都大学国際シンポジウムをタイ・チュラロンコン大学及びAUN(ASEAN University Network)の協力により開催(タイ・バンコク)
 - ⑪ 第19回京都大学国際シンポジウムを米国ハーバード大学との共催で開催(京都)
 - ⑫ 第20回京都大学国際シンポジウムを米国ハーバード大学との共催で開催(米国・ボストン)
 - ⑬ ユネスコとのインターンシップ協定締結式及びユネスコ事務局長講演会開催(京都)
 - ⑭ 第1回京都大学・サウジアラビア共催ワークショップを開催(京都)
 - ⑮ 第2回京都大学-台湾大学シンポジウムを開催(京都)
 - ⑯ 第21回京都大学国際シンポジウムをインドネシア・ボゴール農科大学と共催で開催
 - ⑰ スウェーデン-京都シンポジウムを開催(スウェーデン・ストックホルム)
- (7) 大学間学術交流協定数がほぼ倍増、60機関と締結
- (8) Times Higher Education-World Reputation Rankings 2013年23位→2014年19位

4-5. 人件費・定員管理、雇用制度

- (1) 第一期・第二期中期目標期間における人件費・定員管理の在り方に関する基本方針に基づく人員管理
- (2) 流用定員の解消、「重点施策定員」の整理・統合による「戦略定員」創設
- (3) 物件費や外部資金を財源とする特定有期雇用教員等制度創設
- (4) 「再配置定員」創設
- (5) 教員の定年延長
- (6) 総合専門業務室(専門業務職員)設置
- (7) 年俸制教員制度の導入に向けた基本方針策定
- (8) 人件費削減、運営費交付金削減への対応と機能強化に向けた取組の方策策定

4-6. 中期目標・中期計画の達成に向けた取り組み

- (1) 「京大中期目標・中期計画ハンドブック」刊行

4-7. 情報環境の強化とICTの活用

- (1) IC職員証、IC学生証によるセキュリティ強化と利便性の向上
- (2) IT戦略委員会の設置とICT基本戦略の策定

※ 以下には、一部、松本総長が総長就任以前に研究・財務担当理事として実施した項目が含まれています。

- (3) 情報環境機構にIT企画室、情報環境支援センター設置
- (4) 全学メール教職員用「KUMail」、学生用「KUMOI」運用開始
- (5) 情報セキュリティ強化のための脆弱性診断システム運用開始
- (6) 学習支援システム「PandA」運用開始
- (7) 大規模公開オンライン講座edXに日本で初めて参加し、授業配信開始【再掲】
- (8) 無線LANネットワークの全学展開

4-8. 事務組織の改革

- (1) 共通事務部体制を根幹とする事務改革に着手

4-9. 国への貢献度ならびに発信力の向上に向けた新たな取組

- (1) 中央府省庁との人事交流
 - ・総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省
- (2) 中央府省庁との意見交換会の実施
 - ・総務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省

4-10. 財務マネジメント

- (1) 資金運用の拡充
- (2) 「ファイナンシャルレポート」の充実
- (3) 「重点事業アクションプラン2006～2009」(第一期)、「第二期重点事業実施計画」の策定・実施
- (4) 戦略的経費としての「全学経費」の確保、「部局運営活性化経費」の新設
- (5) 新たな予算配分制度の構築(所要額による人件費予算の確保など)
- (6) 第1期の法人評価を反映した運営費交付金の獲得(プラス配当)
- (7) 経費削減情報Naviの策定
- (8) 京都工芸繊維大学との共同調達の実施

4-11. 男女共同参画への取り組み

- (1) 担当副学長創設
- (2) 男女共同参画推進本部の設置(男女共同参画推進室と女性研究者支援センターの統合)
- (3) 男女共同参画アクション・プラン、男女共同参画推進重点プラン策定

4-12. 大学間連携

- (1) 学術研究懇談会(RU11)の立ち上げならびに共同声明、提言等の発信
- (2) 大阪大学、神戸大学、京都大学3大学連携の取り組み
 - ① 関西経済連合会と3大学学長懇談会実施
 - ② 相互の協力に関する協定締結
 - ③ 3大学学長シンポジウム開催(大阪、中国・蘇州、ベトナム・ハノイ)
- (3) 国立大学協会会長就任
- (4) 大規模災害等発生時における近畿地区国立大学法人間の連携・協力に関する協定締結

4-13. ハラスメント対策、リスクマネジメント等

- (1) 京都大学におけるハラスメントの防止と対応についての冊子刊行(外国人向け英文冊子同時刊行)
- (2) ハラスメント相談員マニュアル作成
- (3) リスクマネジメントおよびコンプライアンス専門の部署の設置
- (4) コンプライアンスの手引リーフレット刊行(英文版同時刊行)

4-14. 京都大学発展のための表彰制度

- (1) 京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)創設【再掲】
- (2) 京都大学孜孜賞創設

5. 施設整備、環境対策

5-1. 安全性の向上

- (1) 東日本大震災を受けた本学施設耐震化の取り組みの取りまとめ
- (2) 学内施設の耐震化率の向上(平成25年度末93%)
- (3) 本部構内に入構カーゲートを設置・運用開始

5-2. 重点施策と連動した施設の整備

- (1) 物質・細胞統合システム拠点施設整備(中央)【再掲】
- (2) iPS細胞研究所研究棟整備(南部)
- (3) 国際科学イノベーション棟着工(中央)
- (4) i-ARRC:国際人材総合教育棟(国際高等教育院棟)着工(中央)

5-3. 寄付事業による建物整備

- (1) 稲盛財団記念館整備(南部)
- (2) 病院・積貞棟整備(南部)【再掲】
- (3) 医学・杉浦地域医療研究センター整備(南部)
- (4) 病院・先端医療機器開発・臨床研究センター整備(南部)(国からの補助金と寄付金により建設)【再掲】
- (5) 思修館・合宿型研修施設(II期)「船哲房」整備(南部)
- (6) 病院・生活習慣病予防研究センターハイメディック棟寄付決定【再掲】

5-4. 各種施設の整備

- (1) おうばくプラザ整備(宇治)

- (2) 楽友会館改修(南部)
- (3) 益川ホール(北部総合教育研究棟)整備(北部)
- (4) 時計台周辺環境整備(中央)
 - ・百周年時計台周辺整備における照明設備が環境省「省エネ・照明デザインアワード2012」「優秀事例」受賞
- (5) 留学生・外国人研究者のための教育研究融合拠点(吉田国際交流会館)整備(中央)
- (6) 看護師宿舎(白眉寮)整備(南部)
- (7) 高度マイクロ波エネルギー伝送実験棟整備(宇治)
- (8) 宇治地区先端イノベーション拠点施設整備(宇治)
- (9) 総合研究6号館(次世代低炭素ナノデバイス創製ハブ拠点施設)整備(中央)
- (10) 工学研究科物理系総合研究棟(C3棟)整備(桂)
- (11) 思修館合宿型研究施設(I期)「廣志房」整備(南部)
- (12) メディカルイノベーションセンター棟整備(南部)
- (13) 防災研究所流域災害研究センター本館整備(横大路)
- (14) 総合高度先端医療病棟着工(南部)【再掲】
- (15) 医薬系総合研究棟着手決定(南部)
- (16) 農学研究科附属農場移転・整備着工(木津川)
- (17) 教育研究施設「京都大学東一条館」着工(中阿達・京都市左京区役所跡地を購入)
- (18) 隔地施設の改修等

5-5. 環境への配慮

- (1) 「環境報告書」の充実
- (2) サステイナブルキャンパス推進室設置
- (3) 「サステイナブルキャンパス構築」国際シンポジウム開催

5-6. 施設整備に向けた新たな仕組み

- (1) 全学的なスペースチャージ制度「施設修繕計画」決定

5-7. 歴史的建物の保全等

- (1) 理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター本館が登録有形文化財に登録
- (2) 清風荘が重要文化財(建造物)に指定

(資料)

学際融合教育研究推進センターが支援しているユニット等

- (1) 先端理工学研究ユニット
- (2) 生命科学系キャリアパス形成ユニット
- (3) 極端気象適応社会教育ユニット
- (4) 統合複雑系科学国際研究ユニット
- (5) 計算科学ユニット
- (6) グリーン・イノベーションマネジメント教育ユニット
- (7) ナノテクノロジーハブ拠点
- (8) 日本-エジプト連携教育研究ユニット
- (9) 心の先端研究ユニット
- (10) 地域連携教育研究推進ユニット
- (11) 生理化学研究ユニット
- (12) 生存基盤科学研究ユニット
- (13) レジリエンス研究ユニット
- (14) 政策のための科学ユニット
- (15) 総合地域研究ユニット
- (16) グローバル生存学大学院連携ユニット
- (17) 森里海連環学教育ユニット
- (18) 触媒・電池元素戦略研究拠点ユニット
- (19) 構造材料元素戦略研究拠点ユニット
- (20) アジア研究教育ユニット
- (21) 人間の安全保障開発連携教育ユニット
- (22) 健康長寿社会の総合医療開発ユニット
- (23) デザイン学ユニット
- (24) 宇宙総合学教育ユニット
- (25) 高度情報教育基盤ユニット
- (26) 霊長類学・ワイルドライフサイエンスユニット
- (27) スーパーグローバルコース実施準備ユニット
- (28) 社会科学統合研究教育ユニット
- (29) 高大接続科学教育ユニット
- (30) グローバルヘルス学際融合ユニット
- (31) 活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーションユニット
- (32) インフラシステムマネジメント研究拠点ユニット
- (33) 学際人材育成システム

松本 総長

V
O
I
C
E



総長就任挨拶 伝統を基礎とし革新と 創造の魅力・活力・実力 ある京都大学を目指して

平成20年10月2日

平成20年10月1日をもって第25代京都大学総長に任命されました。その重責を果たすべく、意義ある大きな仕事に挑戦し、京都大学のために身を捧げるつもりでいます。

本日は、就任にあたって、日頃考えていることをもとに、これからの京都大学の進むべき方向について私の基本的な考えを皆さんにお示ししたいと思います。

京都大学は創立以来、自由の学風のもとと闊達な対話を重視し、京都の地において自主独立の精神を涵養し、高等教育と先端的学術研究を推進し、111年が過ぎました。京都大学は平成16年4月1日から国立大学法人京都大学が設置され、その法人が京都大学を設置するという形態に変わりました。法人化後は、中期目標設定および評価基準の導入など、国立大学時代とは異なる新たな制度・環境変化への対応が求められています。

激動の変革期といえる現在、京都大学には、自由の学風を継承発展させつつ多面的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献することが期待されています。

教育基本法第七条に「大学は、学術の中心として、高い教養と専門知識を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、その成果を広く社会に提供することによって、社会の発展に寄与するものと

する」と明記されています。この基本法の精神において、第一の使命である教育は「知の伝承」を通して広く人材を育成すること、第二の使命である研究は、最先端の研究活動を行い「知の創造」、「知的体系の構築」のため深く真理を探究するということです。また、大学における創造的な研究活動には、その過程に学生たちを積極的に参加させ、次世代を担う優秀な人材を育成するという重要な機能があります。このように、大学における教育と研究は車の両輪をなすものであり、不即不離でなければなりません。第三の使命である社会貢献にはいろいろな形態があり、知の社会発信、産官学連携、政策提言、附属病院の高度医療など多様な展開が可能です。

このような多様性を特徴とする大学の使命を果たすべく、時流に流されることなく、凛とした気概を持ち、学術の府としてその存在を国内外に示し、同時に京都という誇りと文化に満ちた環境下で、教養人、国際人、世界的研究者を輩出し続けることができるよう、京都大学を確固たる戦略のもとで運営していくことが求められています。

大学こそが知の源泉であり、衍沃(えんよく)な大地のごとく、我が国および人類の将来にとって人材と研究成果を生み出す欠くべからざる存在と考えます。

言うまでもなく、大学の根本は教育と研究です。それらをさらに充実するためには、教員、職員が誇りを持って仕事に取り組むことができ、その中で優れた学生が育成され、その学術環境が持続可能であることが必要です。人材こそが大学の最も大きな資産であります。それを活かすためには、教職員を今以上に大切にすべく、士気を醸成することが肝要です。すなわち、教員が教育や研究に専念できる抜本的な体制作りが喫緊の課題です。また、教育・

研究・医療を支える職員が誇りと向上心を持てる体制を確立することも重要です。そのため、教育支援、学生支援に加えて、確固とした財務基盤、研究支援、国際交流支援、環境施設整備を強化する大学全体としての戦略がなければなりません。

大学には語るべき多くの項目がありますが、今回は以下の、教育、研究、人材活用、国際化、アウトリーチ、基盤整備について考えを述べてみたいと思います。

1) 教育について

教育は大学の根幹をなす活動です。国際社会においてリーダーとなりうる優れた人材を輩出する教育システムとその実績がますます重要な大学の評価基準となります。とくに、国際舞台では、高度な専門性を基盤とする発言力、研究成果の発信力、コミュニケーション能力などが必須とされます。さらに、世界のリーダーに広く見られるように、深い教養と高い識見も求められます。私は「学問は真理をめぐる人間関係」と考えており、この資質を大学において涵養することは大変重要と考えます。そのためには、理系、文系を分かつず主として学部1、2回生の時期に、全人教育が十分行えるシステムが必要です。そこでは、専門基礎は最小限にとどめ、リベラルアーツの科目を中心にして人間力涵養をはかることが重要と思います。若い時代に多くの人に出会い、異分野にまたがる友人ネットワークを築くことは生涯の宝となります。

学部・大学院時代の専門教育は、学生に対して専門家としての基盤を築かせる重要な大学の活動です。大学全体の教育理念や教育制度のあり方についても十分な議論を尽くすとともに、教育の理想と時代の要請に応えることができるよう、必要であれば改革についても積極的な取り組み

みを進めてゆきたいと考えています。

ただし、全人教育や全学的な専門教育の制度改革は短期間にはできるものではありません。10年先の京都大学の教育目標を定めて、全部局が協力して教員配置・役割分担も含めてじっくりと議論する必要があります。また、教育環境整備も計画的に全学で推進すべき課題です。諸外国の大学環境に比し、現在の京都大学の教育環境整備にはさらに改善すべき余地があります。

対話を根幹とした自学自習・自得自発という理念を実現する上でも、履修支援、進路指導、キャリアサポート等を全学的に検討し、学生支援をさらに充実してゆく必要があります。

2) 研究について

研究は教育とともに重要な大学の使命です。研究大学として京都大学はこれまで多くの実績を上げてきました。本学は、世界をリードする自然科学、人文学、社会科学の基礎から応用までの幅広い研究分野において大きな足跡を残し、伝統を築いてきました。しかし、国内外の大学のグローバル戦略が進行する中、安閑としていられる状況にはありません。総合大学の長所を生かすためには、競争的資金になじまない基礎分野、長期の研究期間を必要とする研究分野などをしっかりと支援する財政的仕組みを構築する必要があります。

これまでに基礎学術分野を学内的に支援する全学協力経費に競争的資金等の間接経費と寄附金の一部を充当してきました。このような学内制度を効果的に機能させることで、競争的資金を獲得できる研究分野の推進のみならず、大学全体の学術研究の健全な発展を支えることが可能となります。

世界レベルの研究競争を勝ち抜くため

には、学会、国内・国際共同研究、産官学共同研究などに対して開かれた研究体制のもとで、教員個人が切磋琢磨することが求められます。そのためには、教員が可能な限り研究に専念できるように、全学的な支援体制を考えねばなりません。さらに、“白眉”と呼びうる優秀な若手研究者を確保し、次世代研究者として育成することが、今後の研究大学、高等教育機関としての最優先事項です。

グローバルCOEプログラム、科学振興調整費、受託研究等の申請段階からの支援に加えて、これらが採択された場合の各種支援を全学で組織的に行うことも今後は必要不可欠です。また山中伸弥教授のiPS細胞研究など、傑出した研究成果を出した研究グループへの積極的な全学支援ができる体制作りも、今後の画期的な成果を目指す教員にとって大きな励みになると思います。すなわち、申請書作成、報告書作成、経理処理、科学コミュニケーション等の全学的な人的・物的支援は、個別支援よりも、より効果的と考えられるからです。

また、社会や学術の情勢変化に柔軟に対応できるよう、全学の部局組織を超えた人事交流や研究グループ形成を円滑に進めることができる制度を構築する必要があります。

3) 人材の活用

中間職種の創設と多様な人材(女性・外国人等)の活用は本学にとって重要な課題です。

国立大学時代には、教員・職員間の意思疎通が十分とは言えない部分もありました。法人化後は教員と職員とが協力して問題解決にあたらなければならない難問が山積し、教職協働の意識と行動が一層重要になってきています。従来委

員会の陪席だけでは職員は十分に自らの意見を述べるができなかったのが、私が所掌する委員会などでは職員も委員として参画するように進めてきました。今後は全学的に教員と職員が共に議論し、新しいことにチャレンジできる体制作りを進めていきます。その中でルーティンワークだけでなく、専門的な業務のできる職員を中間職(アカデミックスタッフ)として位置づける制度を創設し、積極的に学内に配置していきたいと思えます。専門化した中間職種の職員を増やして、教員が本来の教育・研究に専念できる環境の構築を目指します。

京都大学における女性研究者、女性職員の数はまだまだ男女共同参画からほど遠い状態にあると考えます。これを改善するためには、キャリア・パスの各段階で女性が不利になる条件を一つ一つ取り除いていく必要があります。また、教育や研究の現場を外国人に開かれた環境にすることも京都大学の国際的プレゼンスの向上、グローバルスタンダードへの大学の対応の道筋と考えます。もちろん無理な数値目標を定め、教員・職員の質を犠牲にはできません。言語・生活環境の地道な整備によって状況を改善していく必要があります。

4) 国際化について

世界中の主要大学は国際連携を積極的に進めています。京都大学にも海外から多くの連携の打診があります。京都大学はアジア、特に東南アジアで活発なフィールド研究活動を展開しており、強固なネットワークを構築しています。東アジア、アフリカにも研究教育拠点、連携拠点の展開が進んでいます。しかし、先進欧米諸国の大学との学術連携は個々の研究者間、あ

るいは部局間にとどまっており、大学全体としての本格的な連携や協力関係のための拠点作りは遅れています。すなわち、南北だけでなく、東西(欧米)にも拠点ネットワークを構築し、京都大学の国際的プレゼンスを高め、優秀な留学生、研究者の確保を図ることが急務です。その実現のためには、欧州での拠点設置、米国でのネットワーク活用などの措置を迅速に講じる必要があります。

また、さらに国際化を進めるためには、留学生寮、外国人研究者の生活環境整備などを計画的に推進するとともに、外国人教員の増員も必要です。

5) アウトリーチについて

大学のアウトリーチ活動は多様化し、すでにかんがりの実績を京都大学は挙げてきました。広報、産官学連携、共同研究、地域連携等とおして京都大学の現状と将来構想、教育・研究の考え方などを社会に発信していますが、今後その機能をさらに強化する必要があります。同時に、国際社会に対して学術誌、マスメディアなどを通じた発信のみならず、教職員が積極的に国際舞台で活躍することが必要であると思います。

アウトリーチ活動の一環として、博士学位取得者を、キャリアサポートセンターや教育研究現場での十分な研修の後に、企業、官庁、地方公共団体などに派遣する制度なども、広い知識を身につけさせる機会として有効であると思います。

6) 基盤整備について

国立大学時代には、大学のキャンパス整備、施設整備、大型研究設備整備等の各種インフラ整備は文部科学省など国の所掌事項でした。しかし、法人化後は、

これらの整備は基本的には各大学法人が進めるべき事項となりました。このインフラ整備財源確保は今後の大学運営にとって難問ですが、目的積立金や寄附金、基金利益などの活用によって計画的に進める必要があります。とくに早急に行わなければならない対象は、遅れている桂キャンパスの整備の他、学生寮、職員宿舎、学生課外活動拠点、図書館、駐輪場などの整備です。施設整備のみならず、キャンパス間交通網、環境安全リスク管理システム、共通情報システムの構築、研究者総覧データベースの充実など多くのインフラ整備が必要であり、これらの課題に積極的に取り組んでいきたいと思えます。

私は人こそ大学の礎と考えています。すなわち、教員・職員ともに能力を発揮することができる職場として大学の制度・仕組・意識などを改革し、魅力・活力・実力ある大学にしてゆきたいと思えます。

総長就任に際し、長尾真元総長から「楽天知命」と揮毫された書をいただきました。これは、易学からとられたもので、「天を楽しみて命を知る」と読み、天命を受け入れて、自分の使命を全うせよ、とも解釈できるようです。大学を取り巻く社会状況はますます厳しくなっておりますが、なによりも学術の府として、京都大学の伝統である対話を重ね、構成員全員が誇りを持って京都大学の明るい未来に向けて前進し、社会の期待に応えていかねばなりません。そのために粉骨砕身努力する所存です。皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。

平成21年度学部 入学式 式辞

平成21年4月7日

大きな可能性に瞳を輝かせ、この場に臨まれた3,006名の皆さん、京都大学にご入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長とともに、今日の佳き日をお祝いしたいと思います。京都大学に入学するまでに、皆さんは、さまざまな長く厳しい受験の道を辿ってこられたことと思います。敬意を表したいと思います。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任いたしました。皆さんは、私が総長となって初めてお迎えする学部入学生です。今年は、入学式会場を、これまでの吉田キャンパス内の総合体育館から、ここ平安神宮前の「みやこめっせ」に移して、今回がここでの初めての入学式となります。

さて、入学された皆さんに第一に申し上げたいことは、本学の教育と研究の理念です。本学を受験されるにあたり、大学が定めている理念をすでに読まれていると思いますが、本学の理念は、次のようになっています。

「京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基

礎に、ここに基本理念を定める。」とあります。この理念の根底にあるものの一つは、「自主自立」の精神であり、それは、本学の学生諸君には、一人の成人として、自らに責任を持ち、自ら主体的に勉強と研究を行ってほしいということです。本学は、「自由の学風を持つ」と社会から言われることが多いのですが、そのきっかけの一つは木下廣次初代総長の言葉にあります。

今から遡ること112年前の1897年9月13日、本学初の入学式にあたる、入学宣誓式において、木下先生は、「諸君は既に後見を脱したる者として吾人は諸君を遇する也。因て平素の事は細大注入の主義に依らず自得自発を誘導することを務めんと欲す」との教育方針を示されました。

京都大学では学生を独立した一人前の大人として扱い、学生諸君は自主的に責任を持ち、自ら発し、主体的に学習や研究を行ってほしいと希望したのです。やがて、この自由尊重の精神が京都大学の伝統となりました。

言うまでもないことかもしれませんが、皆さんにはくれぐれもこの「自由」を誤解しないようにしてほしいと思います。自由は、勝手気ままで無責任な態度や行動を意味するものではありません。私の理解する自由というのは、自分自身がいろいろな発想をして、自分で自分を大切に、個人が光るということです。

また個人が組織に縛られずに自由な発想で行動しつつも、常に社会や周辺の人々を思いやり、責任ある態度を貫くことです。

京都大学の特色は、そうした諸先輩が数多くいて、それらの諸先輩が、学術界・経済界・政界・文化界など多方面で活躍し、独創的で大きな仕事や業績を残されてきたことにほかなりません。京都大学に

いるすべての人に個性があって、自己を確立していて、すばらしい人たちの集団にいてという自覚をすること、このことはとても大事なことです。己の中にある自らに恃むことができるよう、自らを鍛えるという「自鍛自恃」という基本的な考え方も身につけてほしいと思います。

これから、大学での学びが始まりますが、それは高校までのものとは大きく異なり、それに戸惑うこともあるかと思います。これまでの学びには、常に答えがありました。しかし、大学で学ぶ学問には、答えは1つではありません。答えがわからないことが多く、それをどのように解いてゆくか、その方法論を学ぶことが必要です。そのためには、受け身の姿勢のままでは、京都大学での学問は成り立たないことをまず申し上げなければなりません。皆さんは、いずれ日本社会のみならず世界のリーダーとして様々な分野で活躍してゆくことになると思います。そのためには、自らが専攻する学問分野の基礎と応用知識や技術を身につけるだけでなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識をどん欲に獲得し、それをもとに多面的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。

チャレンジする対象をどのようにとらえ、定式化し、解いてゆくかという、真の思考が求められるのです。手がかりとしては、さまざまな学問分野で編み出されてきた方法論を学ぶことが有効な手段となります。

京都大学における学びの機会、真理探求の道を自らすすむ者には、あまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。

決してあきらめず、闊達な対話と相手を尊重し、自らを重んじるよう心がけてく

ださい。

教授陣をはじめとする教員は未知のものを学ぼうとする者に対して、同じ道を歩む先達として真剣に向き合い、必要なそして多様なカリキュラムを用意しています。

これこそが京都大学の伝統的な教育と研究のやり方です。その成果として、1949年、日本で初めてのノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生や朝永振一郎先生を初め、昨年物理学賞を受賞された益川敏英先生・小林誠先生や、一昨年iPS細胞を世界に先駆け作り出した山中伸弥先生の研究などが結実することになったのです。

これらのよく知られた研究成果以外にも、とても数え切れないほど多数存在する本学の世界最高水準の研究は、既成概念にとらわれない自由活達な議論、そして真摯な学問追求の姿勢から生まれました。本学は10の学部、質の高い17の大学院研究科と専門職大学院、加えて全国でも最も数と多様性を誇る13の研究所も擁する日本最大級の総合大学であり、自ら望めば他分野の知識獲得を容易に行いうる環境にあります。

さらに、全学共通教育では1回生を対象としたポケットゼミナール(通称ポケゼミ)と呼ばれるユニークな少人数クラスなどを通じて、これら世界の最先端を走る研究者に直接に接する機会にも恵まれています。

最近の社会問題には、グローバルな金融危機に端を発する経済不況、資本主義の在り方、所得格差などが顕著化しています。人権の保護や多様な視点による共同参画社会の実現なども最重要課題として取り組んでいく必要があります。また、地球環境問題では、生命の起源の探求、安全な医学的应用、新物質や材料の探査、新エネルギー開発、地球環境の機能保全から宇宙開発まで、難問、課題が山積しています。

平成21年度学部 卒業式 式辞

平成22年3月24日

本日、学生の学位を授与される2,752名のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、井村裕夫元総長、名誉教授、列席の副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、みなさんのご卒業を心からお祝いたします。あわせてご家族、ご友人、関係者の皆様にもお慶び申し上げます。

京都大学の113年の軌跡において、みなさんを含めて本学の卒業生の累計は、18万5,365名となりました。みなさんの前には18万人を超える先輩が存在することになります。

みなさんは今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、人類全体の生存基盤がおびやかされつつあるこの困難な時代に、世界を舞台に未来を切り拓く使命を果たさねばなりません。その使命を果たすためには、これまで習得した知識だけでは十分でないことはみなさんも重々承知されていることと思います。知識はネットワーク化され、一つの体系をなさないで臨機応変に使えるものとはいえません。また、ネットワークをなすのは個別の知識にとどまらず、その周辺にある人間関係も自然にその構成要素となります。人間関係のネットワークは融通無碍なものです。同世代のネットワークに加えて、先輩後輩友人や教師とのネットワーク、更に書物などを通じ時間軸や国境を

名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は将来きっと皆さんの人生を彩り深いものにするでしょう。

勉強や研究で出会う人のみならず、クラブ活動やその他の出会いを大切に、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日も臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆さんには、何よりも自らの健康を大切に、体とこころを鍛え、学業に励んでいただきたいと思えます。そして、新たな友人と出会い、語らい、課外活動やボランティア活動等様々な可能性に目を向け、力一杯活躍されんことを願いたいと思えます。

「初め有らざるなし、よく終わり有る鮮し(すくなし)」という言葉があります。

皆さんが入学に際し、それぞれの思いで志を新たにしておられると思いますが、どうかそのフレッシュな意気込みを忘れることなく、ぜひ有終の美を飾ってください。を祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学へのご入学、おめでとうございます。



今、まさに人類にとって地球が有限に見える段階になり、人間自身の生存が問われる時代に皆さんは直面することになります。まさに学際的かつ俯瞰的に物事を考える「生存学」が問われはじめています。私は国際会議などで、海外の研究者と長年交流してきましたが、世界的な研究成果をあげている研究者の多くが、自らの研究とは全く異なる分野の学識も豊かで、人間としても魅力的なことに驚かされてきました。

理系の人でも哲学や法学や文学、歴史と言った文系分野にも明るく、文系の人でも、工学や医学や理学・農学と言った理系の学問に強い興味を持っています。

皆さんにも、そういう国際的知識人としての教養を身につけると同時に、専門家としての知識にのみとらわれず、一段高い視点から今後の世界を見る能力を得てほしいと思います。そのためにも、皆さんが経験するこれからの大学生活では、読書にも多くの時間を捧げることを総長として希望します。それも多読によって、視野を広げ、精読によって深く思索し、自らを磨き、複雑で多面的な問題に対処できるようになってほしいのです。インターネットで安易に情報にアクセスするのではなく、理系文系にとられることなく、読書によって頭を耕し、時空を超えてほしいと思います。読書によって、いにしえの賢者に相まみえ、世界中の先達を友としてください。そのためには、語学もまた大事であり、この機会には是非さまざまな外国語の習得にも努力してほしいと思います。真の国際人にはどうしても国際語は必要とされます。若いときにチャレンジした外国語はたとえ忘れることがあっても、再度必要なときにその語学の勉強を再開する上では非常に役立ちます。

現在、大学にはおよそ3,000名の教員とおよそ2,500名の職員、およそ22,000

越えたネットワーク、例えば、過去の巨星もあなたのネットワークの一員になっているかもしれません。「学問とは真実を巡る人間関係である」と私が信ずる所以であります。大学生活を通じて築かれた、時空を超えた知識のネットワークがみなさんの重器です。今後はますますネットワークを広げ、世界が直面する多元的な課題の解決に挑戦していただきたいと思います。

かつて本学の教授を務めた哲学者・和辻哲郎先生は「成長を欲するものは、まず根を確かにおろさなくてはならない。上に伸びる事をのみを欲するな。まず下に食い入ることを努めよ。」という言葉を残されています。ネットワークはこの根に通じます。根を伸ばし、根を大きく張り、様々のよきものを自らの栄養として貪欲に吸い上げ、常に120%の目標を持ち続け自らを大樹となしてほしいと思います。

みなさんはこれから社会において多くの試練に直面することになると思いますが、苦難の時にこそ、大学を思い出してください。大学というものは、学生の自学自習を鼓舞し、広い視野と深い教養を身につけるにふさわしい肥沃な土壌です。学生にとって大学は、それぞれが社会で自立できるよう自らを鍛え、強い気迫と意志、人の気持ちがわかる情の豊かさ、深く広い知識、即ち、知、情、意の充実をはかり、体力を強化し、人間力を磨き上げる場所でなければならず私は考えています。みなさんは大学を卒業して初めて、いかに才能にあふれ、素晴らしい人々に囲まれていたかがわかることでしょう。社会人として旅立つにせよ、進学するにせよ、この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つみなさんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業するみなさんがときには母校を訪ね、語ら

い、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。

これからも世界は大きく変貌していくことでしょう。その激動の原動力と対応力はすべて人にかかっています。このことを受け、世界の先進国は人づくりの最終段階ともいべき高等教育に力を入れて、更なる発展の道を高等教育が生み出す技術革新にかけようとしています。一方、我が国の高等教育に対する財政支出の水準はOECD加盟国中最下位であり、最近5年間の高等教育費の伸びはOECD加盟国で唯一マイナスになっています。その結果、不況にあえぐ家計が高等教育を支えつづけなければならないという現実があります。ご家族の厚い支援に大学として御礼申し上げるとともに、卒業生のみなさんには、これまでのご家族の負担や支援に対し、今日の良き日にぜひ感謝の気持ちを伝えてください。

本日、みなさんの卒業の記念に風呂敷を用意しました。風呂敷は「包む」、「結ぶ」、「広げる」といった使い方から、「幸せを包む」、「人を結ぶ」、「つきあいや見識を広げる」という意味に通じるといわれています。京都大学を卒業されるみなさんが、人との結びつきを大切に、更に見識を広げ、それぞれの幸せに包みこまれますように願って、本記念品を贈ります。

最後になりましたが卒業して、社会で活躍されるみなさんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍しつつ、みなさんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もお願いします。また、約6割を占めるみなさんは、修士課程に進学され、大学院で学び、研究を続けることとなりますが、

私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、ところを磨き、体と心のバランスを大切に、ご活躍されることを願い、学士の学位を授与されたみなさんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。



平成23年度学部 入学式 式辞

平成23年4月7日

本日、疎水の水面に桜映ゆるこの「みやこめっせ」にご参集の3,031名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。ご来賓の尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの長く厳しい勉学が事実に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

さて、みなさんは今国難ともいべき巨大地震、大津波、それに続く原子力発電所事故の渦中でこの入学式に臨んでいます。この空前絶後ともいえる巨大地震と大津波で多くのかげがえのない命が失われました。この東日本大震災とそれに伴って起こった原子力発電所事故により被害にあわれている方々および被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられる方々、ならびに被災各県出身の入学生のみなさんに心からお見舞い申し上げます。

国を挙げて救援、復旧活動が進められ、復興も検討され始めたこの時期に大学に入学するという事は、生涯忘れることのない記憶として残ることでしょう。そして、今被災地を中心に日本人が互いに助け合い、整然と秩序ある行動をとり続け、日常を取り戻そうと努力している姿は、日本人が尊重してきた「和」の精神を世界に向けて示すものとなっています。そこで示される自助と共助は日本人の誇りです。被災地から離れた京都においても、被災地の苦難を分かちあい、長く心を寄せ、復旧と復興に積極的に支援していきたいものです。

東日本大震災において、現代の先端科学技術の粋を集めた各種施設が大自然の威力の前でもろくも崩れ去り、大きな被害につながりました。これを短絡的に科学の限界ととらえ、みなさんは虚無主義に捉われてはなりません。今回の大震災に関していえば、科学者は地震や大津波について科学的知見をこれまで蓄積してきました。そのうえで、その知見をもとに、行政や各種事業者がリスクやハザードをどこまで経済的に許容するかという水準を想定し、社会は運営されてきたのです。そのような枠組みで本当に良かったのか、今後の社会のあり方をみなさんにもぜひ真剣に考えていただきたいと思います。

今回の東日本大震災を契機にすこし視野を広げて考えてみたいと思います。一見安定しているように見える大地は、実は変動を続けており、本質的に不安定であり、その上に私たちは営々と文明を築いてきました。さらに限られた資源を無限であるかのように錯覚し、経済成長を通じて生活の安楽さと利便性のみを追求していると次世代にとられかねない日々を送っています。地球が人類文明を支えきれなくなりつつあることを様々な徴候が示していることに鑑みると、我々はそろそろ文明のあり方を再考する時期に来ているのではないかとも思います。そのためにみなさんは歴史から過去を学び、それに現代の知識を組み合わせることによって、将来の長期的なビジョンやあるべき姿というものを構想できる人間にならなければなりません。

今の日本には、地球社会のリーダーに必要とされる、将来をはるかに見通す力をもつ人間はそう多くないように思います。例えば、みなさんの多くはこれからまだ50年以上生きていくことになるでしょうが、その半世紀先まで見通せる人間というのはそう多くありません。京都大学に入学のみなさんには、遠い将来を見通し、未来を創造できる人間をぜひ目指してほしいと思います。将来を見通すためには学術が積み重ねてきたデータの蓄積を咀嚼する能力が必要です。その上に立って、何をすれば、自分が理想とする、あるいは世界が理想とする社会を維持発展させることができるかということを考えることができます。その際に、あるべき未来の姿を構想するためには、確固たる世界観や哲学が必要です。さらに、現代社会は高度に分業化された専門家社会です。大学の一つの機能はその専門家を養成することにあります。専門分野に深く切り込んで、既存の知識に何

らかの新しいものを付加するという貢献、それが研究の営みです。やがて小さな貢献が集まり、壮麗な学術体系が構築されるわけです。換言すると、これこそが学術を形作ってきたのです。みなさんもその歴史的な営みに、学士課程の仕上げとなる卒業研究等で、ささやかながらも参加していくことになるでしょう。ただし、専門家は専門に専心するあまり、部分に埋没し、全体像を見失う危険があります。その弊に陥らないためにも、自らが専攻する学問分野の基礎と応用にかかる知識や技術を身につけるだけでなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を教養として貪欲に吸収し、それをもとに多角的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。そして、過去に縛られることなく、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を作り、それに肉付けし、4年後には今の自分と違う自分をそこに見いだしてほしいと思います。

京都大学における学びの機会、真理探究の道を自ら進む者にあまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。決してあきらめず、「活達な対話」と相手の立場、考え方も尊重することを忘れず、あわせて自らも重んじるようところがけてください。この自らを重んじるという「自重自敬」の考えは明治30年の本学の第1回入学宣誓式に由来します。その心得を説かれた木下廣次初代総長は書としてその言葉を本学に残してくださいました。その書は現在総長応接室を飾っています。また、木下総長は「自重自敬」の心得に続けて、「故に諸君は、既に後見を脱したる者として吾人は、諸君を遇するなり」と述べて、「自立独立」を学生に勧めておられます。ご家族や関係者の皆様には大学

生活のために一定の扶助をお願いすることにはなりますが、私たち教職員同様、入学生を独立した個人として処遇されることをお願い致します。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっとみなさんの人生を豊饒なものにすることでしょう。学業において出会う人のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己、友人を得、多くの人々と考えを交換し、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後に、みなさんに江戸時代に高い精度をもつ「大日本沿海輿地全図」と呼ばれる実測地図を作製した、伊能忠敬の心意気とその言葉を紹介したいと思います。伊能忠敬は50歳で隠居し、心機一転し、19歳も年下の高橋至時(よしとき)の門下に入り、西洋天文学、数学、西洋暦学を学び、正確な測量技術を確認し、55歳の1800年から71歳の1816年まで17年間全国各地を測量し、日本国の実測地図のデータを集めました。そして、目にした書物によると伊能忠敬は「精神の注ぎ候のところより自然と妙境に入り、至密の上の至密をも尽くし候」という言葉を残したそうです。その大意は、一点に精神を集中すれば、勉強や仕事に自然と興味が湧き、最上の結果に至ることができるということです。みなさんも自らの集中すべき一点を見つけ出し、そこで刻苦精励される

ことを願います。そして、健康に留意し、様々な自分の可能性に目を向け、力一杯活躍され、誇りある京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。



平成23年度学部 卒業式 式辞

平成24年3月27日

本日、ご来賓の尾池和夫前総長、列席の理事・副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,818名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深く敬意を表するとともにお慶びを申し上げます。京都大学の115年の歩みの中で、皆さんを含めて本学の卒業生の累計は、191,105名となり、皆さんの前に約19万人もの先輩が歩んでいることになります。

併せて、ご家族ならびに関係者の皆様よりいただいた、今日の卒業式を迎えるま

での数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。そして、卒業生の皆さんには、これまでのご家族の負担や支援を肝に銘じ、この機会に感謝の気持ちをご家族に率直に伝えるよう希望します。

我が国は、昨年3月11日に未曾有の東日本大震災に見舞われ、復興への力強い槌音(つちおと)は聞かれるものの、まだ道は半ばという状況にあります。この厳しい時代に皆さんは一市民として、また今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、持てる力を発揮し、世界を舞台に我が国と人類社会の未来を切り拓いてほしいと思います。

そのために、大学院進学の皆さんは、専門ごとに分かれてこれからさらに学術に磨きをかけることに力を注いでください。一方、社会に羽ばたく皆さんは、職場では社会の様々な問題とこれから日々格闘していかねばなりません。いずれの道にすすむにせよ、これから歩む長い人生において、大学生活において身につけた知識や体験ではまだまだ十分とはいえ、途方に暮れるような試練に直面することでしょう。その際には、大学での学びを基礎に常に柔軟かつ強靱に思いをめぐらせ、道を切り拓いてほしいと思います。

芸術の世界においては、芸が観客の心に染み入るには、作りごとと実際のどちらともいいがたいような微妙な兼ね合いが大切であるといわれています。虚のみならず、実のみならず、その境界である皮膜にこそ芸の妙があるとする、この虚実皮膜論は江戸時代の劇作家近松門左衛門が語ったものとされています。

私は、この虚実皮膜論は芸のみならず、人生そのものにも通じると思います。我々は日々の思考において、「虚」と「実」の双方をめぐらしています。「虚」には、「実」で

ないこととして、今現実のものとはなっていないけれど、「こうしたい、こうありたい」という内容を含めることができます。これは当然まだできておらず、実現していないものです。例えば、理想や夢といったものを「虚」に数えてもいいでしょう。一方で、「実」、すなわち現実是我々の周りに確かに存在します。現実から離れすぎると何も具体化することはできません。我々は、この「虚」と「実」を行き来しながら、そのどちらかに埋没するのではなく、その虚実の皮膚で起こるせめぎあいを通じて、心にある意志をこの世の中で実現させていく存在なのではないでしょうか。

学問の世界にも虚実があるとされます。学問の虚実とは虚学と実学で代表されます。実学は平たくいえば、実際に役に立つ学問であり、虚学はそうではない学問、すなわち直接または今すぐ何かの役には立たない学問です。皆さんの学んできた学問分野がどちらに分類されるかを議論してもあまり意味はありません。その境界はかなりあいまいだからです。

それよりむしろ学問における「虚」と「実」の役割を考えることの方が重要です。そもそも研究は、理性の力で「実」を見ながら「虚」を追求するという形ですすめられます。いいかえると、研究者の研ぎ澄まされた感性で実の根源を探りながら、頭の中で「虚」の世界を構築し、「実」の根源を解明していこうとします。このように、学問は、実体をもとに、実体から離れた抽象論を積み重ね、作り上げられていくものなのです。事実を集積するだけでは学問とはいえず、それらを抽象化して、原理原則を打ち立てることに学問の真骨頂があり、それがひいては幅広い「実」につながっていくものなのです。その意味で、学問もその本質はこの虚実のせめぎあい、それが行われる虚

実皮膚にありといえるのかもしれませんが。

この虚実皮膚で抽象化されていることは一種の理念と現実の格闘とみなしてもいいかもしれませんが。志によってデザインされたこの虚実皮膚にこそ人生の醍醐味と真実があります。そして、虚実皮膚の厚みや豊かさを決めるのが、皆さんのこれまで培ってき、今後ますます蓄積しなければならぬ、教養なのです。これからも教養を深めることを怠ってはならない所以です。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らい、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。



卒業して、社会で活躍される皆さんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍されることと思いますが、一方で皆さんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、身

体を鍛え、ところを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じ取れるよう、バランス感覚を大切に、知勇兼備の人としてご活躍されることを願い、「虚実」の間を良く考え生きて行かれることを期待し、学士の学位を授与された皆さんへの私の饒（はなむけ）の言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

平成24年度大学院入学式 式辞

平成24年4月6日

本日、京都大学大学院に進学される修士課程2,234名、専門職学位課程329名、博士後期課程884名のみなさん、おめでとうございます。ご来賓の長尾真元総長、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長、および教職員とともにみなさんの進学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

我が国は、昨年3月11日に東日本大震災に見舞われ、この国難からの復旧や復興のさなかにあります。国を挙げての復旧や復興が道半ばにも至っていないこの時期に進学することをみなさんは片時も忘れてはなりません。そして、我々は被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、復興に協力する決意をここに新たにすべきです。

震災を契機に、今後被災地にどのよう

な手助けをしようか、どういう貢献が大学院生としてできるだろうか、さらには安寧の世界をつくるにはどうしたらいいか、専門を極めることだけでいいのだろうか等、様々に悩み、考え始めていることと思います。災害からの復興にはあらゆる専門知識が必要とされます。すなわち、非常時、復旧時、復興時といった異なる段階において、日本や世界といった異なる場所において、それぞれ緊急性の高い活動を機動的に成し遂げるための広範囲に及ぶ専門知識が必要です。しかし、みなさんは不幸な大災害の全体構造を常に心に置きながらも、まず自分の専門分野を通じた貢献を考えてください。さらに、みなさんが生き抜いていかねばならない今後50年のあるべき姿を見通し、地球社会のリーダーのひとりとして活躍できるような研鑽も積んでください。みなさんの多くは自分自身の素材としての価値を十分には認識できていません。私も大学院修士課程に進学したほぼ45年前にはあまり自信が持てず、人生についてはっきりした見通しを持ってはいませんでした。周りの人々も同様であったと思います。しかし、現在多くの友人は日本あるいは世界のリーダーとして活躍をしています。みなさんは確実に社会のリーダーとなる人材です。社会において中心的役割を担い始める十年先をひとまずの目処にリーダーに必要な知識体系を準備しておいてください。さらに、リーダーとして世界で活躍するには語学力、説得力、企画力、発信力、感化力などの人間力も併せ涵養されている必要があります。

さて、みなさんが進学する修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養の蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家として独り立

ちできるような体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、みなさんは専門分野において世界の最先端に躍り出ることを目指してください。その努力は遠くならず実を結ぶものと私は確信しています。

これから大学院において、みなさんは研究の真の面白さを体験することになるでしょう。私の体験をお話すると、研究室に入ることがその始まりでした。多くのおみなさんは、体育会やクラブを除けば、少人数での共同作業、共同生活をあまり経験してこなかったと思います。大学院で研究室に入ると、否が応でも共同生活を送ることになります。身近にライバルがいて、日々指導教員と密なやりとりができ、これまでとは違った生活を送ることになります。そのうえで、所属する研究室や研究グループが取り組んでいるテーマについてその舞台裏を垣間見ることになります。また、京都大学は物事の根源を尋ねること、すなわち「務本」を志向する大学であり、本質は何であり、それは何故かということが常に議論されます。その探求過程において、知識獲得のために漠然と勉強していた時には気がつかなかったこと、とりわけ自分はいかにわかっていないかということ、一方で自分のみならず、世の中にはこんなにかわかっていないことが多いのかということがわかってきます。論語に「これを知るをこ

れを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり」という言葉があります。要するに、わかったことの認識のみではまだ足りず、わからないことをわからないと正しく認識することによって、真の理解に到達するということです。無知の知ならぬ、不知の知といえましょう。ここまでくれば後は簡単です。「よし、私が、誰も気がついていないこれをやってみよう」とか、「まあ他人がやっているかもしれないけれど、私もそのことについてわかりたい」と独創への船出が自然に行われます。このように研究室における共同生活を通じて、はじめはおぼつかない足取りだったものが、研究を続けるうちに、「あれ、誰よりも私のほうが良く知っている」ということに気がつき、それが自信に繋がって、研究に邁進する原動力となります。これは私の体験にすぎませんが、みなさんにはみなさんの機会が用意されています。これからの大学院での時間を生かし、みなさんのみずみずしい感性で研究の真の面白さを味わい尽くされることを期待しています。

本学には大学院を中心にして1,800名を越える留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学生交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会を提供しています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に広げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。それは何事にも代え難い有意義なものとなるでしょう。私も初めて海外に出た若い時代の心の高揚を今でも忘れることはありません。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要として

います。我が国あるいは人類の未来は我々自らの手で拓かねばなりません。みなさんが、京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれず、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自鍛自恃の精神で自らの心身を磨いていかれることを願い、私のお祝いのごことばといたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進学、おめでとうございます。

平成25年度学部 入学式 式辞

平成25年4月5日

本日、例年よりも優しい薄緑の柳の新芽が風にそよぎ、桜舞うこの「みやこめっせ」に参集の3,025名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。都大路にはすでに躑躅の花もところどころ見受けられ、厳しく長い冬を経て、雪解け後に様々な草花が一斉に開花を迎える北国の花畑を髣髴とさせる状況に、身のまわりの気象の変化を強く感じました。自然現象と同じく、人間社会も疾風怒濤のごとく変化しています。

ご来賓の長尾真 元総長、尾池和夫 前総長、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの日々の研鑽が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

2011年3月11日に起こった東日本大震災による国難は今なお続いています。国を挙げての復旧や復興はまだ途上にあるといわざるを得ません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。今、大学に入学するみなさんはこのことを肝に銘じ、自ら行いうる貢献を主体的に行ってください。

さて、みなさんは、入学後の様々な可能性に心躍らせ、今日を迎えていることでしょうか。これまで十分にできなかったスポーツや趣味、社会活動の機会や新しい友との出会いがみなさんを待っています。選択肢は無限です。みなさんはもしかすると、いわゆる「楽勝科目」で単位をそろえ、残りの時間は学生時代にしか出来ないことをやろうと考えてはいませんか。確かに大学生活で勉強以外のことに時間を費やすことは一つの選択です。しかし、勉強はそれにもまして重要なことです。「淮南子」に「時は得難くして、失い易し」とあります。世界で活躍している本学の卒業生と話をすると、みなが異口同音に言うことがあります。「大学でもっと勉強しておけばよかった」。勉強なんていつでもできると今のみなさんは思っているかもしれません。先輩方もそう思ったのでしょう。現代社会においては一生学び続けなければ、冒頭でふれた疾風怒濤のように流れる社会の動きについていくことはできません。大学で学ぶことは将来を通じて学ぶ基礎となるものです。例えるならば、人間の歩みとともに蓄積されてきた知識の宝庫を開く鍵を手に入れることが、これまで受けてきた教育以上に、大学での学び、とりわけみなさんの直ちに受ける教養教育によって可能となるのです。そして、そのような基礎作

業は頭が柔軟なうちが効果的で、その果実は時間をかけて徐々に熟成していくものなのです。みなさんの人生の基礎を築く時間は、今を除いては、実はそんなにありません。京都大学としては、この4月から国際高等教育院を設置し、教養教育の改善に着手します。試行錯誤しながら、最善の教育をめざし、大学はこれからも変わっていきます。その過渡期に入学したみなさんは、易きに流れずに、しっかりと勉学に勤しんでほしいと思います。

大学生になって、今日からみなさんは新たな経験を様々にしていくことでしょうか。しかし、クラブ活動であれ、授業であれ、書物を通じた経験であれ、経験というのはいくら積んでも、そのままではその人を変えるものではありません。経験を自分で咀嚼し、消化し、同化する能力をつけないと自分のものとはならないのです。同じことを経験しても、ある人はそれを糧に伸びる場合もありますし、全然変わらないこともあります。知らず知らずのうちに半可通になって、むしろ退歩する人さえいます。やはりそこには、自分を向上させたいと思い、自分を鍛え、他人に頼ることなく、自分自身に恃む、自鍛自恃の気概がないと経験はものがものにはならないと思います。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学で出会い、そこで育まれる人間関係は、きっとみなさんのこれからの人生を豊かなものにするでしょう。学業のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己を得、多くの人々と自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。人間は己が考えるほどには、一人では何もできないものです。取り巻く周りの環境によって大きく左右されるのです。それゆえ、親友に巡り合

う、あるいは良い書物に巡り合うための努力を積極的にする必要があります。また、ひとりで努力しても解決できないことはたくさんあります。運、不運もあります。人から間違った方向に感化されてしまうことさえあるかもしれません。そのようなとき、常に人間関係も含め、自分の置かれている環境や自らを省みることが重要です。そして、その中から自分で確信の持てるものだけを選び抜き、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を形づくり、それに肉付けし、今と違う自分を確立してほしいと思います。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」。後輩もすぐあなた方につづきます。時の移ろいはみなさんが考える以上に早いものです。

また、知識は危ないということを忘れないでください。今の社会を生きるためには知識は確かに必要ですが、知識をそのまま金科玉条の如く信じてしまうことは危険です。特に私はインターネット時代の今それを強く感じています。レポートを課すと、インターネット上の情報などをいわゆる「コピペ」をして、全部同じレポートが出て来るといった笑えない状況が日本各地で起こっているそうです。そして、考えない。知識や情報が増えれば増えるほど、人間は考えないようになってきているのではないかと思います。それゆえ、溢れ出る情報を取捨選択する力、これをつけるのが大学において最初に学ぶべき事柄ではないかと思います。選択のうえ、自分の頭で常に考えてほしいと思います。

併せて、みなさんは時代が要請する国際性を養う必要があります。それは単に外国語ができるということではなく、歴史に学び、自国の文化をしっかり背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発信能力、自分の意見

を恥ずかしがらずにいえる積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備のもと、海外留学を経験してほしいと思います。大学として体制を整備し、みなさんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

Adversity makes a man wise.

多くの方々はこの英語のことわざをご存知かと思います。日本語では、「艱難汝を玉にす」と訳されて人口に膾炙しています。私は、みなさんがこれまで十分に艱難を経験する機会に恵まれなかったのではないかと真面目に心配しています。「これまで困難な目に遭わなくて幸せで、それに遭う機会に恵まれぬ」と聞いて、不思議なことをいうものだと首をかしげている人もいるかもしれません。みなさんの同級生にも失恋したり、勉強がついていけないと思って、やめたり、挫けたりした人もいたと思います。親の経済的困窮で進学を断念した人だっていたはずで、世の中は自分が引き起こした艱難ばかりではなく、不可抗力的に被らざるを得ない艱難に満ち溢れています。艱難はあらゆる場所で口を開けて人を待ち構えているものなのです。艱難を乗り越える力は、過去に艱難を乗り越えた経験によってのみ鍛えられます。多分ここにいるほとんどのみなさんは、大きな艱難にこれまで遭遇できなかったことでしょう。艱難に遭遇し、乗り越えた人は強くなります。イギリスの詩人オリバー・ゴールドスミスは「私の最大の光栄は、失敗しないことではなく、失敗するたびに起きあがることである」といっています。確かに多くの人は起きあがりません。再挑戦できないのです。乗り越え、何度でも再起する粘り強さをみなさんに持って欲しいと思います。「堅き樞の木より、しなやかな柳のごと

くあれ。」という言葉を贈ります。



最後に、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、今後大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者のみなさまには、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。入学生のみなさんは、大学における様々な機会を生かし、澁刺と輝く京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

平成25年度学部 卒業式 式辞

平成26年3月25日

本日、ご来賓の沢田敏男元総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,831名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深

く敬意を表するとともに、篤くお慶びを申し上げます。併せて、今日の卒業式を迎えるまでご家族および関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。117年にわたる京都大学の歴史において、皆さんを含めた本学の卒業生の累計は196,900名となりました。

さて、皆さんが入学された時にはひとりひとりが夢を抱いていたことと思います。その夢は人に抛って、大願成就を目指す極めて野心的なものから、具体的現実的なものまでさまざまであったかと思えます。それを胸に本学の門をくぐり1年、2年経つにつれ、やがてその夢が段々と霞んだり、変形してきたこともあったでしょう。そしてそれぞれの夢は、新たな装いをまったり、新しく生まれたりして、入学時とは大きく変わっていることでしょう。私は皆さんの夢の変容に対して、苦言を呈するつもりはありません。むしろそれこそが皆さんの成長そのものであり、その成長を大いに言祝ぐものです。それと同時に、入学時の皆さんの夢というものをここでもう一度思い返して、己を見直し、自分自身で今の夢に向けてcommence、すなわち始動する日が、今日の卒業式commencementであるということを心してほしいと思います。

皆さんは京都大学において一定の学業を修められ、今日の卒業式に臨んでいます。高浜虚子に

「一を知って二を知らぬなり 卒業す」という俳句があります。皆さんには「一を知りて二を知らず」ということを脱し、さらに無知の知に目覚め、これからも止むことなく学び続けてほしいと思います。そのためには多彩なジャンルの本を読み、自分の専門分野のみならず、広い分

野の知識を貪欲に吸収するように心がけてください。

さて、現在、我々はインターネットに容易にアクセスできる環境にどっぷりつかっています。そこでは単純な問題については、答え探しが、大きな努力も必要とされず、検索という形で容易にできます。いかえると我々は安易な答え探しが可能な世の中に生きているといえます。一方、答え探しが容易にできない問題に直面する場合も多々あります。さてどうすればいいのでしょうか。本当に我々を悩ます問いは本来そのようなものです。その時には私たちは自分の頭で考えるしかありません。考えるとは一体どういうことでしょうか。私は、考えるということは、様々な事柄の可能性やつながりを新たに組み直し自分の頭の中で整理するというのではないかと思っています。すなわち、問題を前に、頭の中にこれまで蓄積してきた知識や経験を組み替えることこそが、考えることの本質ではないかと思えます。このプロセスは一種パラレルな処理です。一方、インターネットから入手できる情報は順に発見できるシリアルなものです。この違いが、いくらインターネットに向かっても、考えていることにならない最大の理由ではないでしょうか。インターネットのようにシリアルにひとつずつ情報が出てき、それが片付いたら、次、そして次という形式は物事を調べる時には非常に役立ちます。ある特定の事柄についての知識を得たいときにはとりわけそうです。一つずつ知識を積み上げていくということはそれ自身大変重要ですが、何か全く新しいことを考えようとする、本来ばらばらに分類されていた異なる分野の知識を組み合わせるパラレルな処理が必要

で、脳の中ではそのパラレル処理がニューロンとニューロンの繋がりということで行われています。それゆえ、色々なことを体験し、経験し、知識を蓄え、それを柔軟に組み合わせ、組み替え新しいものを創造する訓練を積む必要があるわけです。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、考える習慣をつけ新しい夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんには、ときには母校を訪ね、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として、京都大学を人生の基軸としてこれからも積極的に活用していただけるように願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんは、機会を与えられた様々な場所で、本学で身につけた自学自習の精神を活かし、活躍されることと思いますが、一方で母校の京都大学で更なる教育を受け、探究を続ける友人の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、京都大学は、優秀な人材を活かし、グローバルに評価される大学でありつづけるように必要となる環境改善に尽力してまいりますので、一心不乱に研究に打ち込んでくださるようお願いいたします。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、学業を積み、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じとり、闊達な対話を大切にし、ご活躍されることを願います。学士の学位を授与された皆さんへの私の饞として、自らを十分に鍛え、自ら責任を持って、自身の中にあるものに頼るという「自鍛自恃」という言葉をおくります。

本日は誠におめでとうございます。

平成26年度博士 学位授与式 式辞

平成26年9月24日

本日、博士の学位を授与される229名の皆さん、おめでとうございます。その中には65名の女性と70名の留学生が含まれています。京都大学の博士号取得者は累計41,145名になりました。列席の副学長、研究科長、教育部長をはじめとする教職員一同、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、秋の蒼空(そうくう)のようなすがすがしい気持ちでこの学位授与式にご臨席いただいているものと存じます。学位を授かる皆さんが今日を迎えられたのは長年にわたって支えてくださった皆様のおかげです。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方のさまざまなお苦勞やご支援に対して篤く御礼を申し上げ、今日の喜びをともに分かち合わせていただきます。

学位を授与される皆さんは、日々の研鑽を通じ鍛え上げてきた自らを信じ、幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を京都大学博士の学位の授与という形で世に認められることとなりました。皆さんのうちでもとりわけ留学生の諸君は、言語や習慣の異なる異国で最先端の学を修めるということは並大抵の努力でできることではなかったでしょう。私は皆さんの長年にわたる研鑽を大いに称え

たいと思います。

ただし、誤解しないでください。称えられるべきは学位論文そのものだけではありません。学位論文の成果は月日と共に陳腐化していくかもしれませんが、それは悔やむべきことではありません。重要なことはここに至る過程です。つまり、課題を見つけ、目標を定めて、研究を遂行し、その目標まで到達したその道程こそが、かけがえない経験だったのです。まさにフロンティアの開拓に皆さんは第一歩を踏み出したといえるでしょう。敷かれたレールの上を走るのではなく、レールなき知のフロンティアを開拓しながら進む過程、持てる才能をフルに発揮し、皆さんは見事経てきたのです。さて、これからどうすべきでしょうか。自らが敷きえたレールをそのまま延長するにとどまらず、その過程で身に付けた開拓力こそが学位の本当の意味するものです。新しいことにぶつかって、悪戦苦闘しながら、障害を次々と乗り越え、成果を得る、その能力を対象を限定せずにこれからの人生で広く応用していただきたいと思います。それは、これから研究職に就く人も研究職を離れて社会のリーダーとして活躍しようと思っている人についても同じです。あなた方が得た学位はそのフロンティア開拓の過程を見事にやり遂げた才能と努力の証となるものです。

皆さんに今日ぜひ心に留めておいてほしい言葉があります。唐宋八大家の一人、蘇洵(そじゅん)の「管仲論」に出てくる言葉です。

「夫(そ)れ功の成るは、成るの日に成るに非ず。蓋(けだ)し必ず由(よ)って起こる所有り。」

つまり、成功は、その日一日で成し遂げられたわけではなく、それまでの積み重ねがあってこそはじめて実現します。さらに

続けて。

「禍の作(お)こるは、作(お)こるの日に作(お)こらず。亦(また)必ず由(よ)って兆す所有り。」

一方、禍も突然起こるのではなく、注意していればその兆しがみえるものだというのです。

蘇洵の言葉からは、他人の成功を羨まず、成功者がそれまで積み上げてきた努力に敬意を払い、ともに祝う余裕を持つべしということが読み取れます。また、我が身においては、自分の志を高く持ち、目標を定めて、必ずやるという信念で進み、成功に向けての傾注が必要であることを教えられます。一方、これからの長い人生、うまくいかない時もあります。あるいは世の中がうまくいっていないことを痛切に感じる時もあるでしょう。その時、禍が突然降りかかったと嘆いたり、起こってしまったから後知恵で批評するのではなく、必ず兆しがどこかにあったはずなのに見つけれなかったと反省することが重要です。さらに、社会にとっての大きな禍の兆しを敏感に見つけることこそが、これからのリーダーの備えるべき資質の一つであろうかとも思います。

今後、世界はますます小さくなります。皆さんのなかには、日本が窮屈に感じる人もいるでしょう。狭い日本に閉じ籠もらないで、世界に雄飛してほしいと思います。その際に注意しておくべきことがあります。文明や文化の熟度に応じ、人々の交際は洗練され、他人への配慮も細やかなものとなり、洋の東西を問わず、間接表現は豊かになっていきます。例えば、日本語では、嫉妬の感情は、恨み、辛み、妬(ねた)み、やっかみ、嫌味、嫉み、焼きもちなど多数表現し分けることが可能です。英語にも、jealousy、envy、covetousness、

resentment, discontent, spite, grudge, green-eyedなどさまざまな表現があります。一方、インターネットの世界では、「いいね!」があらゆる場所を跋扈(ばっこ)し、単純を旨とする割り切りが大いに力を得ている状況にも出会います。このような両極端にも見える状況においてもみなさんは、しなる木のように柔軟に人と接し、他人の気持ちを汲んで、花を咲かせるすべを身に付けてほしいと願います。この一種のデリカシーもこれからのリーダーの要件です。

皆さんと京都大学との縁(えにし)は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸となるべきであると私は考えてきました。一方で、皆さんも母校を温かく見守り、さまざまなご支援をお願いします。とりわけ、留学生の皆さんには、母国に帰られ、海外に23ある地域同窓会組織を通じて、京都大学や日本と母国を結ぶ「人の架け橋」として活躍されている先輩の後に続いてください。そして、京都大学、ひいては日本との絆を一層太くかつ強くしてくださることを大いに期待しています。



最後に、今日は私の総長としての最後の学位授与式になります。6年間にわたり一心不乱に職務に打ち込んできたつもりです。その間、多くの方々にお会いし、楽し

く仕事ことができました。とりわけ高い志を胸に社会に飛び出す皆さんに今日のように賤(はなむけ)の言葉を贈れることは私の最も喜びとするところでした。京都大学は素晴らしい大学であったと誇らしく思っています。諸君の今後の健闘を祈ります。

本日は誠にありがとうございます。

第16回京都大学全学教育 シンポジウム

「これからの共通・教養教育」

総長基調講演:

「京都大学の考える
教養教育の方向」

平成24年9月12日

皆さん、おはようございます。昨年に引き続き、桂キャンパスで全学教育シンポジウムを開催いたします。以前は淡路島で行ったこともあり、関係者のご努力で第16回を迎えることになりました。昨年、毎年出されるレポートの内容を実行に移して、全学共通教育あるいは学士課程の教育を改善する方向に踏み出しましょうと申し上げました。それを受けて、関係各位に大変な努力をしていただき、かなり前に進んだと感じております。

今日は、「京都大学の教養教育」という題で皆さんにお話をしたいと思っております。ふだん先生方は教育の現場で、学生と対峙しながら、どうやって人を育てようかということに心を砕いておられると思います。そういったことは十分承知しておりますが、私は今、少し離れた立場におりますので、その観点から考えていることをご紹介したいと思います。

まず、こちらをご覧ください。これはよく使われるスライドで、左下にアップルの創

始者のスティーブ・ジョブズ氏が写っています。最近亡くなられましたけれども、彼はテクノロジーとリベラルアーツの交差点で仕事をしてきたと言っていました。技術的には最高のものでも、現代文明や社会のニーズを直感的に考えなければ、マーケットに受け入れられない、そのためにはリベラルアーツの知識が必要で、単に技術屋だけではいい製品はつくりえないのだということを言っていました。日本の技術者も最近、ようやくその端緒を示すようになったと思っておりますが、そのために我々は教育で、こういった観点を学生諸君に伝えなければならぬと思うところです。

社会情勢の変化につきましては、皆さんひしひしと感じておられると思いますが、日本社会だけではなく、世界中が非常に大きく変動しております。当然ながらこれからの若者は少なくとも30年、長い人で60年生きなければなりません。また、生き抜かなければなりません。つまり生存していかななくてはなりません。その間さまざまなことが起こるでしょう。私も70年近く何とか生きながらえてここまでやってまいりましたが、その間、社会情勢は大きく変化したと思っています。これからの変化率はもっと激しいと思います。複雑な課題が次々と浮かび上がっており、その課題解決がそう簡単に一人一人の研究者あるいは技術者だけではできないという状況になっております。

日本学術会議が、これからはサイエンス・フォー・ソサエティだということを声高に叫びました。しかし、専門家は、専門分野で競い合うには、それを細分化しなければならぬジレンマがあり、専門化が進めば進むほど、社会の大きな問題に対して答えを出しにくい構造になっている

ことも指摘されておりますし、私もそう感じます。ですから、今世紀を支える若者を育てる立場にある私たちが何を考えればいいか、どう考えればいいのかということを少し考えてみたいと思います。

今お話ししましたような、世の中の変化が激しくなった理由は単純です。それは昔、例えば紀元前1000年、紀元0年、紀元500年のときには、人間は1億人ぐらいいきませんでした。世界中で1億人ですから、今の70分の1です。ですから、物事がゆっくり進み、自然破壊というものほとんどなく、自然からの恵みを使いながら技術を発達させ、本当に緩やかに物事が変化していったのです。ところが、産業革命の後、人間はいろんなものを自分で作り出すということに目覚めました。そのために、人口は指数関数的に伸びております。つまり、物が豊かになって、文明が進むと、ますます変化率が上がっていくということです。21世紀に入って、20世紀よりもはるかに速い変化が起こるということを我々は強く認識しなければなりません。

このような状況の中で、石油は、生産が消費に追いつかず、生産しようと思っても簡単に掘れるところに石油はなくなり、2006年が石油の産出量のピークで、今や生産量は大きく下降線をたどっております。また石油以外の資源についても、100年以内に銀、金、石油、鉛、銅、亜鉛、天然ガス、ウラン、モリブデン、タングステンといったいずれも身近にある生活を支える必要な資源が枯渇すると予想されています。このために代替物質あるいは新しく創り出す技術が必要ですが、その技術開発のスピードと悪化スピードとを比べると、明らかに悪化スピードのほうが速いのが21世紀です。

その中で我々は、どういう人材を送り出

せばいいのかということを常に考えておかなければなりません。端的に言いますと、地球全体で、人類という生き物だけが猛烈に種の中で数を増やしております。現在人口は70億人で、50年後にはおそらく90億人、あるいは100億人になると言われております。

このスライドは私がまだ現役だったころにつくったものですが、この時は先進国が10億人、途上国が50億人だったのが、50年たつとこれが90億人になります。生活水準は、我々先進国が途上国の10倍ぐらい良い生活をしてきたわけですが、今後おそらく彼らの生活水準もよくなってくでしょう。地球全体に必要なマクロなバランスを考えると、消費生活物資の総量が50年たつと、必要量が2.5倍になります。2.5倍という生活物資を、我々は、いろんな問題を克服しながら増していけるでしょうか。そのために専門を究めているわけですから。

ところが、専門家は専門ばかりに目をやりますから、マクロなことは忘れがちで、環境問題や、資源枯渇や、感染、パンデミックに対して発言が部分的にあるだけで、部分オプティマムを図ってやっても全体のオプティマムにはならないという大きな課題があります。

そこで、我々の後を継ぐ若い人たち、30年、40年の時代を生き抜く人たちにどうという教育をすればいいかということが大きな問題になります。日本の人口は減っておりますけれども、先進国でもまだアメリカは移民等を入れて増えておりますし、ヨーロッパも増えている国が多いです。世界全体としては爆発的に増えております。このような状況の中で、資源の枯渇の問題があって、各国が資源の囲い込みをスタートしております。どの国も

経済成長を目指すと言います。つまり、どの国も経済を成長させればいいという単純な豊かさの追求に走っております。そうするとどうということが起こるかということは、普通に考えればすぐにわかります。どうしようもなくなる。どうしようもなくなることをどう解決するかということを考える人材をつくらなければいけない。したがって、リベラルアーツを考えるときには教育、日本、そして地球全体、つまり人類全体の現代文明を取り囲む状況をよく考えて、多様な問題に取り組めるようにすることが必要です。もちろん技量や知識がなければなりません、それだけではやっていけないということです。

学問は、学会に行けばよくおわかりのように、次々と新しいテーマが出てきて、その都度、専門家が現れ、新しい研究室が生まれます。かといって古い研究室はなくなりません。したがって、どんどん細分化が進みます。学問の細分化に関しての高校生の意識は、私は物理をやりたい、私は生物をやりたい、私は歴史をやりたい、という程度の意識しか持っていません。しかし、現実に大学に入りますと、京大は総合大学ですから研究室は非常に多くあって、工学という大枠の中にも非常に多くの分野があって、研究室が山のようにある。それぞれが先端で論文を発表し、新しい知見を積み上げる。これが研究という営み、本質的な部分ではありません。しかし、学生がすべての専門に知識を持つということはできません。学問全体を知の樹に例えると、どこかの専門の枝葉のついでにとまって、新しい知識を掘り出す、つくり出すという作業をおこなながら、全体を俯瞰するものを学ばせるにはどうやって教育するか、これが大変重要な問題になろうかと思えます。

夏目漱石の「素人と黒人」という随筆があります。「黒人」と書いて「くろうと」と読ませています。「白人」とは書いてありません。その中で、あるものを観察する場合に、第一に我が目に入るのはその輪郭であると言っています。仏像なら仏像を見た輪郭です。次にその一部、手なら手、眼なら眼、鼻なら鼻というところに目が行く。さらに鼻を見ますと鼻の穴が気になる。高さが気になってくるのです。漱石はまた、観察や研究の時間が長ければ長いほど、だんだんと細かいことが目に入って来る、ますます小さい点に気がつくと言っています。小鼻の中の穴の数は幾つあるか。なぜ左右が違うか。好奇心はほとんど尽きるところがありません。いわゆる黒人というものは、この道を素人よりも先へ通り越した者である。そればかりやっているわけですから当然です。そして、そこに彼らの自負が潜んでいるらしいと、少し漱石は嫌味を言っています。彼らの素人に対する軽蔑の念もそこから沸いてくるらしい。けれども、プロですね。彼らは彼らの経路を誤解して評価づけた結果にすぎない。自分たちは偉いというのは、それを誤解して自分たちが偉いと思ったにすぎない。彼らの経路は単に大から小に進んだだけである。浅いところから深いところに達しつつあるものでもなければ、上部から内部に突っ込んでいったものでもないというふうに切り捨てています。観察が輪郭に始まって、全体像を見て、一部に移っていくという意味を別の言葉であらわすと、観察が輪郭を離れてしまうということに帰します。つまり全体像が見えなくなる。離れるのは忘れる方向へと一歩近寄るのと同然である。しかも一部に注ぐ熱心が強ければ強いほど輪郭の概念は頭を既に離れてしまう。彼が言っている

のは芸術論なのです。しかし、科学や学問にも当てはまるとは思いません。

だから我々はどうすればいいかということを考える必要があって、そのためにはリベラルアーツ論が重要となってくるのです。これは皆さんが共有している話を私が繰り返しているにすぎないかもしれませんが、ますます複雑化する社会問題、例えば、領土問題一つにしても、原子力エネルギーの問題についても、誰も決定的なことは言えない。さまざまな要因が絡むからです。学問がますます専門化しているので、専門家は例えば原子力発電所の事故であっても、例えば、私は炉工学の専門家ですので反応はわかりません。反応はわかりますが、廃炉についてはわかりません。私は原子核専門を学びましたけれども、核融合をやっていますから原子力発電のことはわかりません。私は理学を研究しているので、工学的観点からいう原子力のことはわかりません。このようになってしまっていて、全体的に原子力の必要性、あるいは問題点を大きく論じることから、ある意味では逃げようとしている姿勢が見えてきませんか。つまり、先ほどの漱石の言葉で言いますと、輪郭を見ようとしなくなるということです。

一方、グローバル化が進んでおり、それこそ複雑系の問題と同じで、ニューヨークで起こった小さな出来事がたちまち日本の経済に影響を及ぼします。北京で蝶が羽ばたくと、ニューヨークで嵐が起こるという比喩があったと思いますが、つまり複雑系の本場にちょっとした事柄が、結果的に、違うカタストロフィにつながることもあるわけです。これはいろんな意味での文化、文明、経済、あるいは人の生き様がグローバル化したといえます。グローバル化というとすぐにビジネスのグローバ

リゼーションのことが頭に浮かびますが、そうではないと思います。

したがって、知識の全領域的地図が必要で、そのためには一般的な知識をいかに集積するか、逆に高度な知識を理解する上で一般的な知識はどう役に立つか、この両方の視点が必要です。一般的知識ばかりで、どの専門にも深く入り込んだことがない人は浅薄と言われてしまうと思います。両方のバランスについてどのように興味を持たせるかということが教育の上で大変重要ではないかと思えます。

また、社会や学問、そして世界における自己の位置づけ、自分をどう確立するかということに、教育という言葉は余り適当ではないかもしれませんが、人を育てるという意味で「育人」という立場から言いますと、自己の位置づけをどのように自覚をしてもらうかということが最も重要ではないでしょうか。そこがグローバル化の原点だろうと思います。知識だけではなく、対話力も当然必要ですし、課題をどう解決するか。これはどのように達成するか、それぞれの先生の思いがすべて違うと思います。私の経験から申しますと、すばらしいアイデアを次々出してこられる方のお話を伺うと、その背景には専門だけではなくて実にさまざまな知識、経験をお持ちです。家の問題、人間関係、あるいは経済的な事情等々、その経験数や様々な場面に遭遇した人ほど創造力は高いように思います。芸術から音楽、体育、職業課程といったものの知識は普通、受験勉強に余り重きを置きませんが、そういうことにも興味を持って勉強してきた子が数学の分野ですばらしい実績を上げた例があります。音楽をやったがゆえに数学でひらめきがあったということと言われる大数学者もおられるようですが、興味を

持っているあらゆる学問の数、経験の数、知識の数というもの創造力に必要な組み合わせを決定するのではないかと思います。n個の組み合わせは全部足し算すると2のn乗(べき乗)になるのです。知識のべき乗で変化しますから、創造力をめざす人はいろんなことにチャレンジしてほしい。チャレンジしておく必要があると思っています。

次の課題ですが、カリキュラムは様々なことを教えずにはならないという一方で、単に教科を増やすだけで身につくかといえばそのようなことはありません。先ほど言ったように全体像が見えるということが大変重要です。これに関して私は「務本の学」という言葉を使っているのですが、ものの本(本質)を務むるの学。これは論語にある、儒教的な発想で使われた言葉ですが、この漢字だけを眺めると、ものの本質を追求する。全体を見てもの本質を追求する。務本の学こそ大変重要なことだろうと私は感じています。

そして、グローバル化といいますと英語です。当然、英語のTOEFLやTOEIC何点以上ということを言いますが、それだけでいいかという、そうではないということは本学の先生方は皆さん強く認識しておられますし、私もそう思います。多言語との並習で哲学の多様性、つまり言語を学ぶということは言語の背景にある多文化を理解することにつながります。だから、たくさんの言語を勉強してみようということは多文化に接しようということにもなりますし、もちろん多文化に接する能力を増やしていくことにもつながります。その意味で、外国語はビジネスのために話せればいい、読めればいい、書ければいい、あるいは研究のために論文が書ければいいという問題ではないことは、言語

を教えてください先生方の背景にあると強く認識しております。

最近、外国へ行かない日本人と言われているように、外国へ行っている日本人は大きく減り、学生をどうやって留学に行かせるかということも問題として言われます。しかし、私も誤解しておりましたが、実はあまり減っていないそうです。西洋から東洋へ関心が移って、アメリカやヨーロッパの大学に行く学生は減りましたが、中国をはじめアジアに向いている学生はかなり増えました。トータルとしてあまり減っていないということを最近本学のあの人から教えていただきました。そういう意味で、学生は留学に行く気はあるのですが、そのような変化について、我々年配の者が少し違う視点でその現象を見ていないかということです。留学に行かせるというのは、単に学問をよその大学で経験するだけではありません。そんなことは京大でできるでしょう。関東圏の高校生に話を聞きますと、関東にはあらゆる種類の大学がありますから、関東から出て、京大へ来る必要はないと多くの学生が感じているように思います。教育担当理事の淡路先生を筆頭に、私も含めて、関東の高校に行き、高校あるいは大学教育というのは関東圏だけで閉じてしまうものではない。外国にいきなり行くのは大変かもしれないが、少なくとも日本には関西もあるし、九州もあれば、北海道もある。いずれ関東に戻るというのは構わないけれども、そういうところで違う文化を学びなさいと言っております。留学についても経験知のレベルを高める必要があります。

魅力ある人間、実力ある人間は、質の高いコミュニティから生まれます。私は胸を張っていいと思いますが、京都大学は質の高いコミュニティだと思っています。

学生が目を見せ、あの先生に会ってよかった、目から鱗が落ちたという人がたくさん、教員の中でも学生時代の経験を語られる方がおられます。教える先生の熱意。例えばこのスライドにはポケゼミの絵が下にかいてありますけれども、ポケゼミというのはその効果が大いにあるだろうと思います。研究の最前線、なぜ先生がその問題に着目し、どう方法でどのように毎日取り組んでいるのかという背中を見せる、あるいは語るということがいかに重要かということがわかります。

教養課程については、今、カリキュラムの見直しを進めていただいております。一方、組織については、現在、全学で一致協力して学部教育をおこなうとなっておりますが、外から見ると非常にわかりにくいところがあります。東大にあるような専門の教養学部ではなくて、全学で学生をしっかり教えるという国際高等教育院をつくらうという取組みを行うことになりました。昨日もその委員会がありました。いづれ私から現在どのようなディスカッションが行われているか、現状について、全学メールで発信をしたいと思っております。

現在、人間・環境学研究所及び理学研究科が教養教育の実施責任部局とする体制になっておりますが、それを改革し、国際高等教育院が企画と実施責任を一元的に負う体制に移行する方向で検討しております。現在は、高等教育研究開発推進機構で機構長のもとに、執行協議会、全学共通教育システム委員会、専門委員会科目部会を構成して、実施責任部局として人間・環境学研究所と理学研究科に教育の多くを行っていただいております。

国際とつけたのは国際化時代に対応できるような幅広い知識、日本文化ももち

ろん、語学も含めて、幅広い国際的な視野を持つ国際教養人を本学から出したという意味でこの名前が提案されています。教育院長のもとに、学部長で構成され、重要事項を決定する教養教育の協議会、それから企画評価委員会、評価専門委員会を設置します。これらは大変重要でして、実施科目やクラス、教育内容、成績評価等を行うのですが、各学部から責任のある人が、しっかりした意識でここに集まってもらわないといけません。高等教育院の組織については現在議論をさせていただいておりますが、教養教育部、基礎教育部、外国語教育部で構成されます。これは名前が最終的にはどう変わるかわかりませんが、基本構想はこのようになっております。それぞれに部会があって、先生方に参加していただく予定です。国際高等教育院には専任教員を構成員として置きます。他部局を兼任する専任教員もいるかと思えます。それで、単に兼任で、ここには専任的のいろいろなことに直接タッチしませんが、教育にタッチするという兼任教員もいる。このようなイメージで恐らく構成されていくと思っております。このような構想を実施できる体制を各部局の教授会で集中的に議論していただくよう、お願いしたところです。繰り返しになりますが、構成員は、関係部局の推薦を受けて配置する専任教員、それから教育院独自の人事で配置する専任教員、それから兼任教員、それから非常勤講師、となっていこうと思っております。

2枚ほどスライドをお示していますが、今、仮に中国の学生と京都大学の学生を比較してみたら、京都大学の学生がずっと勝っていると胸を張って言えるでしょうか。中国の大学は世界ランキング等で日本の上に入ってきてまいりました。あれは

フエイクで、学長などの大学のトップだけだろうと思っていました。つまり、アメリカからたくさん優秀な中国人研究者を中国の大学のヘッドに戻します。そうすると当然アメリカで研究していたわけですから共同研究者はアメリカ人が多くなり、ランキングの上での国際的な配点は高くなります。当然そういった方々は英語をよく話します。語学も当然、英語という意味ではよくできる人たちが戻ってきています。そんなものだろうと思っていましたが、実はそうではないということを感じ痛感するようになりました。私も立場上多くの大学をめぐる。中国の大学にも行ってまいりました。先週、蘇州で中国南部の五つの大学の学長とディスカッションをしてまいりました。各大学はすばらしい取り組みをしています。全球化時代、グローバル化時代に一流の人材をどう育成するか、いろいろな角度からの取り組みを真剣にやっています。特に上海交通大学の学長はすばらしいアイデアの持ち主でした。一度行かれる機会があれば、ぜひ見てきていただきたいと思えますけれども、優秀な学生をちゃんと表彰して、トップ13人に対しては破格の処遇をしています。それに向かって多くの学生は努力をしております。

私は30年ほど前に世界銀行から、武漢大学で何か教えてこいと言われてまして、行ってきたことがあります。その帰りに北京大学へ寄りました。11月ごろだったと思いますが、寒いさなかです。朝の5時半ごろ、目が覚めたので、薄暗かったのですが、私は構内の池の周りの散歩をしました。そうすると、多くの学生が既に歩いているのです。図書館の前へ行きますと、当時30年前ですから電気事情もよくありません。しかし暗い電灯に数人が集まって、本を開けて英語を読んでいるのです。そ

の後ろには、光の輪に入られなくて暗い中でずっと後ろに並んで、ちょっとの光で言葉の勉強をしている人もいたのです。こんな熱心な学生と、しかも優秀な人を集めていると思えますが、京大生を比べたら、これは太刀打ちできないと、そのときですら思いました。日本の学生は外国に比べて勉強する時間が極端に少ないということ指摘されて久しいですが、学生の間はしっかりと勉強して、課外活動も積極的に参加をして、力強い日本を引っ張るリーダーとなっていただきたいと強く願っているところです。これは学問の分野だけではありません。様々な分野でリーダーとなって卒業生を輩出する必要があると思っております。

日本の停滞は20年、30年続くのではないかと揶揄されておりますが、そのためには次の次の議論を今からやり、新しい時代に追いつく必要があります。自分の専門を継ぐ専門家をつくるということも部分的には必要ですが、もっと重要なことは、これまでも社会の中に次の時代を背負う多くの人材を輩出していかねばならないということです。京都大学という伝統ある大学が、今後も世界のリーダーを私たちがつくるのだという強い意志です。会社や官僚のトップの方を見ますと、京都大学の卒業生が減っています。少し寂しい気がします。会社のトップになることがリーダーとは限りません。コミュニティのリーダーも必要です。教員もそうです。研究者もそうです。トップを出すのだという強い意志を私どもは考える必要があるのではないのでしょうか。

以上で私の講演を終わります。どうもありがとうございました。



松本紘京都大学総長御退任に寄せて



文部科学大臣
下村 博文 しもむら はくぶん

松本紘先生が京都大学総長を務められた6年間は、まさに、国立大学法人制度が始動期から定着期へ移行し、さらに改革の加速を通じて、より個性豊かで魅力ある国立大学の実現に向けた発展期へと移行する、国立大学の極めて重要な転換期にも重なります。

この間、松本先生が、常に先頭に立たれ積極的かつ大胆な大学改革を種々進めてこられたことは衆目の一致するところです。

学域・学系制に向けた取組などの全学的組織改革、国際高等教育院、総合生存学館(思修館)の設置や白眉プロジェクトなど国際的に活躍できる優れた人材や研究者を育てるグローバル化戦略の実行、ノーベル生理学・医学

賞受賞の榮譽に輝いたiPS細胞研究の中核研究機関や新学術領域を創出する学際融合教育研究推進センターの設立など卓越した研究体制の構築等々、その御業績はここに尽くすことはできません。松本先生が世界の学術研究をリードする京都大学をさらなる高みへと押し上げるべく、リーダーシップを発揮されたことに深甚なる敬意を表します。

また、松本先生には、国立大学協会会長として、我が国の国立大学全体の発展のためにも並々ならぬ御尽力を賜りました。ここに、心より感謝申し上げます。

松本先生の今後益々の御健勝と御活躍を心よりお祈り申し上げますと

もに、京都大学におかれては、これまでの伝統と実績を礎に、松本先生が進めてこられた諸改革の成果を確かなものとし、さらなる発展を遂げられることを期待いたします。



原点を大切にされた松本総長の時代

衆議院議員(前 衆議院議長)
伊吹 文明 いぶき ぶんめい

松本紘先生の総長時代の思い出は、京都大学の諸々の予算確保についてご一緒に努力したことでしょう。分けでも新しい研究開発を進め、その技術を実際にビジネス化する大学発ベンチャーの基金(官民イノベーションプログラム千億円のうち京都大学二百九十二億円)の獲得でした。

この予算については、当初京都府・市も充分な情報がなく、大学が独自で動いておられたような印象でした。京大の経営協議会委員であられた堀場雅夫さんがこの状況に危機感を抱かれ、何度もご連絡を受け、文部科学省とも話し合い、四大学全体で千億円の出資枠を決めたときの松本総長のお顔を今でも思い出します。

しかし、問題はむしろその具体的執行にあります。学問の研究をどう企業化するのか。その目利きの能力のある人材をどう見つけるのか。松本先生や知事、市長、経済界の方々と朝食会で意見交換し、文部科学省に松本先生は何度も足をはこばれた御苦労は大変なものがあったと思います。

私個人の意見を述べれば、大学はバランスのとれた知識人、矜持ある教養人の供給基地であって欲しいと思います。如何に専門分野のみに秀でていても、大学外の社会システムに対し、フィージビリティの低い人材はなかなか適応が難しいのではないかと思うからです。

松本先生はリベラルアーツの大切さ

を充分理解され、分厚い教養を身につける体制創りにも意をいいられたのには、我が意を強くしたものです。国際化に対応する体制の整備や現実を忘れぬ政府との折衝等、本当にご苦労様でした。

我が母校・京都大学が学問の自由を護りつつ、学問の自由と管理権の自由とを混同することなく、松本先生の育てられた苗を大きく育てて頂くことを願っています。



科学技術イノベーションと宇宙政策の進展に向けて

参議院議員

(元 内閣府特命担当大臣: 科学技術政策担当, 宇宙政策担当)

山本 一太 やまもと いちた

松本前総長は、長年に渡り世界をリードする大学づくりに邁進されました。その偉大な功績に心から敬意を表し、日本国民の一人として心からの感謝を申し上げたいと思います。

前総長には、私が第二次安倍内閣の内閣府特命大臣として科学技術イノベーションや宇宙政策を担当していた約2年間、様々な分野で多大なお力添えをいただきました。

たとえば、科学技術担当大臣として、総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)のもとで、安倍総理の目指す「最もイノベーションに適した国」の実現に取り組んでいた際には、松本前総長から、イノベーションの源となる人材育成、大学改革、CSTIの機能強化等に関して多くのアドバイスをいただきました。最も印象に残っているのは、平成25年3

月、大臣と若い研究者との意見交換の場である「ふるさと車座トーク」を京都で行った時のことです。松本前総長と学術研究の苗木である若手研究者「育成の重要性」について議論を交わす場面がありました。

研究者間の激しい競争と自由な研究環境の双方を盛り込んだ画期的な「白眉プロジェクト」について熱い思いを語っておられた前総長の姿が忘れられません。さらに、CSTIが科学技術政策を俯瞰した「司令塔」機能を発揮するためには、各省の提案に対する調整ではなく、一段高い立場から調査審議を行うべきだという貴重な御示唆もいただきました。前総長は、教育者かつ研究者であると同時に、あらゆるものに挑戦し乗り越えていくイノベーターであると強く感じたものです。

加えて、前総長は、宇宙エネルギー工学、

宇宙電波工学、宇宙プラズマ物理学の権威であり、その広い識見を宇宙政策委員会の議論でも十分に発揮していただきました。資源やエネルギー問題に対する宇宙太陽光発電の利用可能性、宇宙を利用した防災・災害対応など、人類が直面する地球規模課題に対する取組の必要性を繰り返し説かれていました。同時に、人材育成などの国家として長期的に取り組むべき宇宙戦略についても、様々な御指摘をいただきました。宇宙政策委員会の宇宙産業部長として、我が国宇宙産業基盤の維持・強化といった幅広い観点からの意見のとりまとめにも尽力いただきました。今後とも、宇宙政策委員として引き続きその識見を我が国の宇宙政策の企画・立案に生かしていただきたいと思います。



地域に開かれた京都大学

京都府知事

(京都大学経営協議会 委員)

山田 啓二 やまだ けいじ

松本先生が総長に在任された6年間は、時代や環境が大きく変化した激動の時代でありましたが、松本先生は卓越したリーダーシップを発揮され、京都大学を未来指向の大学にすべく、新たな試みに次々と挑戦し、実現されました。

私にとって特に印象深いのは、京都の行政・産業・大学・文化芸術・メディアの代表らで構成する「京都の未来を考える懇話会」において、松本先生とご一緒し、30年後に目指すべき京都の姿を3年間にわたり議論し、「京都ビジョン2040」としてとりまとめたことです。この中で、松本先生は「大学のまち・京都」を重要な柱として提示され、センター・オブ・コミュニティ(COC)と

して地域貢献・地域の課題解決に向き合う大学の使命を明確なビジョンとして提示いただきました。京都大学をはじめとする大学の将来は地域とともにあるという姿勢を打ち出され、「世界交流首都・京都」に向けて大きな一歩を踏み出すことができました。

実際、京都大学と本府との連携も格段に充実いたしました。COI拠点としての先端的な研究開発の推進、けいはんなオープンイノベーション拠点活用に向けた協働パネルの設置、実践的な地域課題解決力を学生が習得するCOCOLO域教育プログラムの展開、大学・本府ら5者による国家戦略特区への提案など、京都において先進的な産学公連携の取組が展開しております。

この他、日本の将来を見据え、「心」の問題やサバイバル技術実習、さらには教養科目のあり方まで、真理の探求を行う学問の府として、次世代をリードする大学のあり方を追究されるなど、ノーベル賞受賞者を輩出されてきた京都大学の新たな挑戦が地域貢献に結び付き、京都の発展にもつながるだけに、地元自治体の長として誇りに感じているところであります。

輝かしい功績を生み出された松本先生に心から感謝申し上げるとともに、今後も京都大学が開かれた大学として、世界や地域との連携を一層深めていただくよう心からお願い申し上げます。



松本紘先生の高い志と改革力に感謝を込めて

京都市長
(京都大学経営協議会 委員)

門川 大作 かどかわ だいさく

松本紘先生、京大総長としての6年間、世界に冠たる京大のビジョンを明確に示し、様々な課題に志高く挑戦されての偉大な御功績に心から敬意を表します。

松本先生の総長就任は、私の京都市長就任と同じ平成20年であり、僭越ながら、立場は違えど、京都の、そして日本の未来を共に切り拓いていく同志のような気持ちで私も挑戦してきました。「京都の未来を考える懇話会」をはじめ、様々な場で御一緒させていただく度に、卓越した識見と高潔なお人柄、信念を貫く姿勢に触れ、深い感銘を受けました。特に、若い頃の御苦労とそこから生まれる人間的な深み、社会的弱者への優しいまなざしに強く心惹かれまし

た。松本先生と言葉を交わす一瞬一瞬が、大いなる学びの機会でありました。

人口減少や国際的な大学間競争の激化、日本の国際的な地位等々、環境が激変する中、松本先生は類稀なるリーダーシップを発揮され、人物本位の入試改革、教養教育の改革、そして社会の先頭に立つ「人財」の育成を目指す大学院改革など、大胆な大学改革を、議論を尽くして断行されました。また、「学問は社会に貢献する、イノベートしていくものでなければならない」との理念に基づき、産学公連携、地学公連携を一層促進され、様々な形で京都の活性化や地域の課題解決に貢献いただきました。京都市成長産業創造センター設立に当たって、経済産業省でのプレゼンテー

ションで、松本先生と私が論陣を張ったことも大変印象深いです。

世界トップ水準の大学でありながら、これまで以上に地域に貢献する大学を目指す。このような松本先生と京大の理念を共有し、未来のためにあらゆる分野で京都市と京大との連携を深め、日本と世界に貢献したいと念じています。

自らを鍛え、自らを恃みとする「自鍛自恃」を日々実践されている松本先生。益々の御活躍を祈念いたしますとともに、世界から京都を俯瞰していただき、引き続きの御指導をお願い申し上げます。



Science 2.0 時代と大学の革新

国立大学法人政策研究大学院大学 教授,
独立行政法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター 副センター長
(前 京都大学経営協議会 委員)

有本 建男 ありもと たてお

2014年10月京都で、日・EU科学技術政策フォーラムが開催された。科学技術政策、大学、研究機関の幹部が集まる刺激的な議論の場となった。テーマは、EUの強い希望で、“Science 2.0 : Science in Transition”であった。この概念はわが国ではまだ聞きなれない。デジタル技術の発達、グローバル化、地球規模問題への対応等を巡って、過去数百年つづいてきた近代科学の方法、大学体制などが、教育研究の上流から下流まで、今大きな変革を迫られているという設定である。この過渡期にどう対応するか。何を残し何を革新するのか。日・EUの双方で知識と経験を共有し、新しい科学のデザイン、将来の共同研究に発展させたいという企画で、議論のポイントは、more sharing, more actors, more data, そしてivory tower, publish

or perish 文化の変革、policy makerの新しい役割であった。

来年公表予定のOECDの新イノベーション戦略では、social innovation, inclusive, people, sustainableなどが柱になりそうである。また、Inter-Academy Councilも近々、大きな反響を呼んだ“Responsible Conduct in the Globalized Scientific Enterprise”の改訂版を出す予定である。世界の科学界は猛烈なスピードで動いている。

わが国は、2011年の東北大震災・津波・福島原発事故を受けて、科学と社会、科学と人間、大学と科学者の役割・責任について、議論が深まる兆しがあったが、残念ながら今やその空間はほとんど閉じてしまった。多くの大学人は、再びivory towerの専門の檻の中に入ってしまったのか。

松本総長はその6年で、京都大学が世界トップクラスの大学としてグローバルな激変に対応するために多くの布石を打たれた。一時代を画したのである。「継承と革新」は組織の基本である。大転換の潮流の中で、京都という独創的な地から世界に向けて、深い思索と歴史観、世界観をもち俯瞰的視座から、世界と時代に切り結び、次の世代のために新しい大学像を形成し実践して行くのは京都大学と大学人の責務であろう。

「京都大学はよほど意識しておかないと、一地方大学になってしまう」。元総長岡本道雄先生の遺言である。京都大学は、日本の大学制度全体の浮沈を担っているのである。松本総長の後継者たちは強い意志と覚悟をもって、次の厳しい時代に対峙して欲しい。



感謝を込めて

独立行政法人日本学術振興会 理事長, 学校法人慶應義塾 学事顧問
(前 京都大学経営協議会 委員, 前 京都大学 総長顧問)

安西 祐一郎 あんざい ゆういちろう

松本紘先生が京都大学総長になられた頃に慶應義塾の塾長をしていた関係もあって、多くの機会にご指導をいただってきた。

将来を見通す合理的な思考と意思決定的確さ、繊細さと気遣い、芯の強さと一貫性、つまり知と情と意のすべてをトップレベルで発揮できる人は稀だが、松本総長はそのごく稀な例にあたる。

だからこそ、歴史ある京大の内部改革を揺らぐことなく断行し、その一方で、岐路に立つ我が国の大学の道筋を示すまとめ役として、八面六臂の活躍を続けることができたのだと思う。

伝統大学の学長ほど割に合わない仕事はない。とくに、国内外の多くの

活動の先頭に立ちながら、組織、教育、人事労務など、最も大切で最も困難な内部改革を進めることは、至難の業である。教職員にとっては、国内屈指と信じて疑わない現在の研究教育環境を変える必要がなぜあるのか、考える動機すらない。学内から抵抗の出にくい範囲で多少の改善や調整をすることが、ふつうの学長の言う「改革」であった。そういう時代が長く続いた。しかし、このやり方では、日々努力を続けている世界最高水準の大学群と真に肩を並べることは不可能である。

こうした困難を乗り越えて、学内による自治を誇りとする京大を率い、学部教育、大学院教育、若手研究人材の養成、入学者選抜、組織再編などの改

革を多くの協力者の方々とともに次々と進めながら、国立大学法人化後の時代の曲がり角を大学改革の先頭に立ってきた松本紘先生に、あらためて感謝の拍手を送りたい。そして、これまでの経験を活かし、我が国の将来のためにさらにご尽力いただくことを念じたい。



「行動する」国立大学協会会長、松本先生

一般社団法人国立大学協会 専務理事

一井 眞比古 いちい まさひこ

松本先生は、会長就任当初から日本の高等教育の最重要部を担っている国立大学の価値を今まで以上に高めなければならぬという強い意志と使命感を私たちに感じさせました。そのひとつは会長就任あいさつです。「行動」、「先導」、「協働」の3つのモットーをかかげられ、多様性豊かな国立大学の教育研究機能強化を宣言され、学長の方々に今までにない前向きな印象を与えました。

国立大学の発信力にも松本先生は大きな関心を持っておられ、国立大学協会の広報誌のひとつであった「JANU」のタイトルの検討を副会長・広報委員長の羽入先生(お茶の水女子大学長)に指示されました。私も学長だった頃、自大学の現状報告資料に添えて

「JANU」を国会議員の方々に持参した折に、その表紙を見て「これ、なに?」と聞かれたことがありました。委員会で検討した結果、広報誌のタイトルは2013年10月から「国立大学」になり、国立大学協会の広報誌であることが一目でわかるようになりました。これは、「行動する」松本先生のひとつの現れですが、文部科学大臣や与党幹部とことあるごとに面会され、国立大学の要望等を直接に伝えられたのは、まさに「行動する松本先生」そのものでした。

松本先生の著書「京都から大学を変える」の中で、武道でよく知られている言葉「守破離(しゅはり)」に触れておられます。師から学び、師の殻を破り、師から自立するまでの段階を説いたもの

です。西欧社会をモデルにしてきた私たちにとって、「離」のむつかしさを実感してかなりの年月を経っていますが、それを乗り越えられるのは、高度の専門知力だけではなく、深い教養と幅広い基礎学力をそなえた人材です。そのような人たちが新しい価値を創造してくれるのです。若いころに武道を楽しんだ私は心地よい共鳴を感じました。

国家にとって人材が最大かつ最強の資源です。高等教育への高い見識と日本社会の将来に大きな期待と展望を持っておられる松本先生は、国立大学関係者にとってかけがえのない人です。「行動する」国立大学が新しい価値の創造と明日の日本の社会を拓くと私も信じています。



松本前総長ご退任にあたって

公益財団法人稲盛財団 理事長
(京都大学 総長顧問, 京都大学 名誉フェロー)

稲盛 和夫 いなもり かずお

松本前総長には、ご在任中、弊財団の運営に大所高所よりご指導いただきましたことに心より御礼申し上げます。

私共が初めて松本先生にご協力いただきましたのは、財団設立20周年の記念フォーラムでした。当日は京都賞歴代受賞者による基調講演に加え、「科学と人類の未来」をテーマに、多様な分野から日本を代表する研究者を迎えてパネル討論を実施いたしました。その際、生存圏研究所長であられた松本先生にもご参加いただき、闊達なご発言と的確なご指摘で討論を盛り上げていただきました。

京都大学総長ご就任後は、弊財団が小・中・高校生対象に実施いたします教育イベントや市民対象のイベント

の開催に、大学の施設を拝借したり後援いただく等、ご協力を頂戴してまいりました。さらには京都賞の認知向上にも配慮いただき、受賞分野を対象に国内外の研究者を招聘して実施する『京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウム』をご提案いただきました。多くの方々が京都賞への期待と関心を高め、世界中の研究者が本賞を目指して精進されるようになれば、人類社会の学術・芸術の振興と地球社会の調和ある共存に更に貢献できるのではないかとのご発想は、私共に対する深いご理解があつてのことと、力強い応援を本当に嬉しく思いました。平成26年7月には第1回目が実施されましたが、その素晴らしい運営と共に、松本先生

にいただいたご縁に感謝し、今後も京都大学様との絆を深めてまいりたいと強く感じた次第でございます。

京都大学の自由の気風を自ら体現し、学内外で積極的に発言・行動されながら、日本を代表する教育・研究機関として大学を大きく発展してこられたご功績に心より敬意を表します。また、私共財団に対して、常に思いやりをもってご意見やご提案をいただきましたことにも、心より感謝と御礼を申し上げます。今後共健康に留意され、益々のご活躍を祈念申し上げますと共に、引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。



明るい未来に向かって進め! 京都大学

西日本電信電話株式会社 取締役相談役
(前 京都大学経営協議会 委員)

大竹 伸一 おおたけ しんいち

京都の街を訪れると、ふと学生時代を思い出す。当時は日本中に大学紛争が起こっており、大学の自治や産学協同研究の是非など良きにつけ悪きにつけ大学のあり方を議論し、また社会に一石を投じようとする活気が学内外に満ちていたように想える。

それから四十数年経ち、経済のグローバル化とともに大学の果たす役割は益々重要になっている。英国教育専門誌の発表では、今年の大学世界ランキングで京都大学は59位だった。教育水準は国力を測る重要な指標である。大学は優秀な学生を集め、グローバルに活躍できる人材の育成が大切になってきている。こうした人材を育成するためには大学の幅広い改革の推進

が必要である。松本総長は総長就任以来、今後の大学の進むべき方向性を明確に打ち出し、実行に移してきた。学生が幅広い教養を身につけるための「国際高等教育院」の設置や優秀な若手研究者を招聘するための「白眉プロジェクト」更には次世代のグローバルリーダー育成のための「総合生存学館(思修館)」の設立を始めとして構造改革を推進し、学内外に一石を投じるその戦略性にはただ脱帽である。

松本総長は大学の現状に危機感を持ち議論を重ねるとともに、議論だけで実践の先送りは大学改革を遅らせるだけとの信念のもと戦略的な構造改革を決断されており、その強いリーダーシップに敬意を表したい。今後これら

の施策が全学一丸となって推進され、一層の成果が得られることを期待している。

松本総長は幾つになっても好奇心、向上心をもっておられ、息抜きにゴルフにお誘いした折でも、時間を見つけて練習してプレイに臨まれる姿勢はなかなか小生には真似の出来ないことである。総長在任中は激務の連続であり、自由な時間をとることもままならなかったと思いますが、今後とも健康に留意され、京都大学の明るい未来のため引き続きご尽力をお願いします。六年間本当にありがとうございました。



松本総長と「鼎会」の創設

株式会社三井住友フィナンシャルグループ 取締役会長
(京都大学 監事(非常勤), 京都大学鼎会 会長)

奥 正之 おくまさゆき

私が松本総長に初めてお目にかかったのは2009年3月、京都大学の銀行取引の主力銀行の頭取として、新総長へのご挨拶に大学本部にお伺いした時であった。力のある眼光と大きな構想力そして鋭い洞察力が印象に残った。

2011年に私が銀行頭取から現職に就き、経団連副会長として対外活動に軸足をシフトするなかで、総長とは東京で産・学関係者が意見を交わす「日本産学フォーラム」或は「産・学・政・官」の各層が集う勉強会等の場でお会いする機会が増えた。

そこでの議論を通じて大学教育の現状と課題の認識を深める中で、ある時総長より、やる気のある学生或は研究員のモチベーションを高めるための

ちょっとした工夫や仕掛けを実現するための物心両面にわたる支援体制が組めないだろうかとの問い掛けを受けた。京大生は群れないことを誇りにしているとの見方もあるが、ここはOBの一人として一肌脱ごうと思い、早速数人の先輩財界人に相談してみた。反応は、松本総長は母校を世界トップクラスの「知」と「学」の Center of excellence とするべくリーダーシップを発揮し革新的なプロジェクトを具体化する等、実に良くやっておられるとの評で一致し、是非協力しようということになった。

協議の末、まずは卒業生で現在現役の企業トップ(社長・会長・副会長)をメンバーとして、毎年ポケットマネー程度の金額を京大基金内の「総長リー

ダーシップ支援基金」に個人拠出して頂き、総長の「思い」の実現を側面支援することになった。大学から「鼎会」と命名頂き、難航した名簿作りも人が人を呼んで会員約150名になったところで、2012年1月、初代会長に和田NTT会長(当時)が選出され、晴れてスタートに漕ぎ着けた。

2015年2月より私が会長を引継ぐことになり、松本総長にはご退任後も本会名誉顧問として運営上のアドバイスをお願いしているが、山極新総長にも強いリーダーシップの下、鼎会会員との「対話」とその「浄財」を母校の「継続的な進化」のために役立てて頂くようお願いする。



松本紘総長の功績

学校法人城西大学 理事・大学院センター 所長
(元 文部科学事務次官, 元 京都大学経営協議会 委員)

小野 元之 おのもとゆき

松本紘総長は、第25代京都大学総長として、京都大学の発展に全力で取り組み、また平成25年からは国大協の会長として国立大学改革に尽力された。

総長は工学部出身者でありながら、中国の古典や漢文に詳しい。総長時代の主な功績として、私は2つの画期的な若手育成プログラムをあげたい。その一つが「思修館」であり、もう一つが「白眉プロジェクト」である。いずれも命名は松本総長である。

「思修館」は文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムとして最初のオールラウンド型に選ばれているが、そのねらいはグローバルリーダーの育成である。わが国では、ともしれば細分化した学問領域の中で、教授から指示

された狭い分野の専門的知識や技術しか身につけていない博士が多く、企業や官庁の求めに応じ切れていない。思修館は少数精鋭の全寮制大学院であり、専門分野の深い知識・技術だけでなく、関連する幅広い分野の見識を持ち、さらに幅広い教養を身につけた高い「志」を持つ人材の育成を目指している。私も少しだけ思修館で教える機会を頂いているが、そこではチャレンジ精神豊かな優秀な学生が活発な議論を行っており、とても面白い。

「白眉プロジェクト」は、次世代を担う先験的なリーダーの育成を目指し、優秀な若手研究者が自由な環境のもとで5年間継続的・安定的に研究に専念できるよう支援を行うものだ。審査

委員を「伯楽」と名付けて伯楽会議を発足させ、松本総長自身も全員に最終面接を英語で実施するほどの力の入れようである。研究者は終了後それぞれの能力を生かして、京大だけでなく世界に羽ばたいて行くことが期待されている。

松本総長の3つめの功績は、東大とは違った形で京大の伝統を生かし、ガバナンスを明確にして大学の進むべき方向を示したことだ。学部の自治に守られた消極的な大学運営でなく、全学的な発想のもとに京大の未来を戦略的に考え、京都大学を世界に冠たる教育研究大学にするため、全力で大学改革に努力されてきた。心から敬意を表したい。



松本紘総長の思い出

神戸市立医療センター 中央市民病院長
(前 京都大学経営協議会 委員)

北 徹 きた とおる

尾池総長就任4年目から3年間、理事・副学長として、松本先生とご一緒させていただきました。当時、施設、病院、国際交流を担当させていただいておりましたが、特に大学全体の耐震化の仕組みを作る必要に迫られた際に、ご助言を頂き、当時防災研究所長の河田恵昭教授をご紹介いただき、多くの教授の先生方のご協力を得て「京大式耐震診断、その対応(補強)策」を作成して頂いたのが、思い出の一つであります。この京大の耐震化に対する提案書は、当時の文部科学省に取り上げられ、翌年から予算が付き、全国で耐震化が開始されたわけです。無論、京都大学の耐震化が促進したのは、ご記憶のとおりであります。また、良くお話しさせていただく機会もありまして、特に時代に対応した、国際的に通用する、将来のリーダーとなるべき

人材の発掘、その教育について議論したのを覚えております。その頃から、この方は近い将来京都大学を背負って行かれるに相応しい人物であると確信しておりました。第25代総長にご就任後、経営協議会のメンバーとして6年お手伝いさせて頂きました。時代に合った組織の見直し、将来の人材養成の仕組み作りを、勇気を持ったご英断で次々と成し遂げられる手腕に拍手を送っておりました。白眉プロジェクト、思修館、国際高等教育院、iPS細胞発見時、殊に国際特許取得のための対応、iPS細胞研究所の仕組み作りなど素早く対応され、見事に一つ一つ成し遂げられました。

2年前の11月30日「天皇・皇后両陛下と御所で食事に誘われたので、ぜひ来てほしい」というお電話を頂きました。12月3日19時に御所の応接室で両陛下に

お会いしました。総長が、大学ノートを出され、総長のお母さんが、近所の開業医の応接間にあった「ひよこ物語」の本を借りてこられ、大学ノートに写し、それを総長のご兄弟に読んで聞かせておられたと両陛下に説明されておられました。一字一字間違いが無く、一挙に写されたのではと思いましたが、挿絵も素晴らしかったのを覚えています。さすが、この母にしてと思った次第です。その後食事、さらに食後のお茶と進みましたが、総長のお話が面白く、両陛下のご質問も鋭く、約束の時間を30分過ぎました。最後は玄関までお見送りを頂くという事になりました。何という機会を与えて頂いたかと今でも感謝に堪えません。総長とお仕事をさせて頂いたことを良き思い出にさせて頂きたく思っております。長い間、本当にご苦労様でした。



新たな知のランドマークへ

武田アンド・アソシエイツ 代表、
文部科学省 参与、京都大学 特任教授

武田 修三郎 たけだ しゅうざぶろう

世界のグローバル化は待ったなし。それどころかウォールストリート紙が「過去50年に起こったより今後5年で起こる変革の方がさらに大きい」(2014年8月)と報じる通り、新時代への動きは間違いなく加速される。このためにはそのかじ取りや骨格作りを行える人たちを作る「育人」が必要。幕末や明治にあれば育人先進国であった日本が今回はこれができるどころか、アジアの国々にも遅れをとりだした。なお、前回の育人は松下村塾や適塾が担ったが、今回は大学がこれを担う。事実、世界ではこれらに取り組む大学が続出しだした。彼らは、先端研究体制づくりだけでなく、新時代への育人体制づくりにとりかかった。つまり、過去の

栄光のノーベル賞受賞者づくりでなく、未来を導く多くのイノベーターづくりにかじ取りをきったのである。また、過去の象牙の塔の殻を捨て未来へ導き、変化に戸惑う政府、国民を照らす知のランドマークへの変革を遂げだした。

これら命題に真正面に取り組み、京大だけでなく日本の大学変革の旗振り役を担い、文字どおり粉骨砕身された松本先生には感謝と敬意の念を表す。この難しさをマキアヴェリは「・・変革推進者は変革で損害を受けるものからは非難されるし、一方、利益を得るものからも感謝されない」(Prince)とした。事実、学内では、松本先生は非難され、一方、積極的な支援者はでなかった。しかし、京大は新体制のもと、間違

いなく変革を遂げる、と私は確信している。これについては先のマキアヴェリも「変革というものは、ひとつ起こると、必ずや次の変革を呼ぶようにできている」とした。

松本先生が取り組まれた変革の中、特に私は新大学院「思修館」、そして海外大学との連携に期待している。前者は、混迷の世界を照らす人づくりを真正面に据えた育人大学院。また、後者は大学に不得手なベンチマーキングを可能にさせ、トラストとオープンネスをもたらす場。いずれも京大を確実に世界のトップランナーにする道と考えている。最後に、松本先生には、今後尚一層、日本を照らすランドマークの役を担ってもらうことを希っている。



未来を創造する力強いビジョンと改革

京都商工会議所 会頭, オムロン株式会社 名誉会長
(前 京都大学 総長顧問)

立石 義雄 たていし よしお

京都大学の総長として、強い信念のもとで大学改革にご尽力され、このたび6年間の職責を果たされましたことに、心より敬意を表します。

松本様は、京都大学の国際競争力を高めるためのビジョンを掲げ、グローバルに活躍する人材の育成を目指した教養・共通教育改革や大学院教育改革など数々の改革を遂行されるとともに、京都のまちにも多大な貢献をいただきました。

本所では顧問に就任いただき、さらに京都の各界代表が30年後の京都のありたい姿を議論する「京都の未来を考える懇話会」に、学术界を代表して参画いただきました。共に議論を重ねた結果は、「京都ビジョン2040」としてとりまとめることができました。

「世界交流首都・京都」を目指すこのビジョンをもとに、京都大学をはじめ、行政、経済界等が具体的な施策を推進しております。人口減少によって、地方衰退への危機感が強まっておりますが、人と人、知や精神、文化や産業の大交流を創り出すことによって、活気と創造性あふれる京都を実現できると確信しております。

私は、「高い文化と学術を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こす」と考えておりますが、長い歴史の中で革新を繰り返し、新たな伝統を創造してきた京都は、まさにそういった都市であります。

松本様は、京都における大学の役割について着目され、京都大学の知恵を活かして地域の課題を解決するCOC事

業も推進されました。地域に貢献する大学として、京都大学の存在感は一層大きくなったのではないかと思います。

京都産業の基盤は、伝統・先端産業の高度なものづくり技術と、大学や研究機関の最先端の知恵の集積であり、産学公の連携を円滑にする「知恵インフラ」が強みといえます。その中心を担う京都大学には、これまでの改革を継承し、グローバルとローカルの2つの世界で活躍する人材の育成を推進されるとともに、世界をリードする大学としてさらに発展されることを期待しております。

結びに、松本様におかれましては、今後とも京都の発展にご支援、ご協力いただきますとともに、ますますご健勝にて、一層ご活躍賜りますよう心よりお祈り申し上げます。



「京都学プログラム」成功の立役者、松本総長

あしなが育英会 会長

玉井 義臣 たまい よしおみ

平成26年1月7日、私が「本会の『京都学プログラム』にご協力ください。」とお願いすると、松本総長はご快諾くださいました。驚くくらいの即決でした。

私共「あしなが育英会」は、約50年間、親を亡くした遺児の教育支援を物心両面に渡って続けて参った団体です。平成26年夏、世界のトップ100大学から100人のインターン生を招いて3か月に渡るインターンシップ・プログラムを行い、その一環として「京都学プログラム」を開催しました。

その目的は、昨今ますます格差が広がり厳しくなる一方の遺児を取り巻く環境を根本から変えるために、「弱者を労わる心」と「日本の心」の両方を持った世界のリーダーを育てようとい

うものです。

この「京都学プログラム」を決して単なる観光にせず、真の意味での「日本理解」につなげるため、アドバイスを得ようと京都大学の門をたたいたわけです。松本総長は即座に我々の意図を理解し、名だたる教授陣に呼びかけ、素晴らしいカリキュラムを提供してくれました。

結果は大成功でした。「京都学プログラム」の参加インターン生らが提出したレポートには、こちらが期待していた以上の深い日本理解と感謝と賞賛の言葉があふれています。この中から、十年・二十年後に、世界を良い方向に変えて行くリーダーが生まれることを心から願っています。

松本総長は閉会式にも出席され、学生達に「京都での学習を楽しみ、自信を持ち、必ずやってくる大変なジレンマに打ち勝てるリーダーになってください。」とエールを送りました。京都から世界のリーダーを育てようとする松本総長こそが、志高く、弱者に温かく、しかも日本の心を持った真のリーダーであると思います。

このたび、松本総長は本会の「アフリカ遺児教育支援百年構想」を支えるサポーターである「賢人達人」への就任もご快諾くださいました。今後、松本総長と共に、この活動を通じて世界の貧困削減に貢献していくことを、心から楽しみにしております。



幅広い教養や経験を総動員する イノベーション創出の取組み

文部科学審議官

土屋 定之 つちや さだゆき

2年前、常識や既存の枠組みにとらわれない、真に革新的なイノベーションの実現を目的とする新たなプログラムを創設するため、松本総長にご意見をおうかがいしました。先生が重要とされた要素は、ビジョンとアイデアです。イノベーションには、「先端」も大事だが、「ローテク」+「ビジョン」+「アイデア」で起きると、スティーブ・ジョブスの成功例をあげつつ、ご指摘されました。関連して、お話されたのが、1901年1月に報知新聞に掲載された「二十世紀の豫言」です。100年以上前の日本人は、クレジットカードやFAX等将来の夢が描けているが、現代の日本人には描けないのではないかとの問題意識でした。松本総長は、“以前は「必要

は発明の母」と言っていたが、最近では「発明は必要の母」の感がある。技術があるから誰か使ってください、ではなく、幅広い教養や経験を総動員して、何が必要かをまず考えるべき」と仰り、その上で将来に向けた大きなビジョンを持つ人、ビジョンを強く持った人の構想や情熱が十分に発揮できる場の設定の重要性を指摘されました。

幅広い知識と深い専門性、柔軟な思考力と実行力を重視した「思修館」設立をはじめ数多くの改革を実行されたこと等に基づく先生のお考えは、極めて明確であり、検討中の新規プログラムの柱をしっかりとさせることが出来ました。

文部科学省では、平成25年度新規

施策として、幅広い教養を土台として、誰も考えつかなかった「人や社会に関するビジョン」を構想し、その実現を目指して果敢に挑戦する新たな試みを開始しました。可能性は低いですが、目標を達成した場合、より大きな価値や利益を得る研究活動を促すもので、活発化する世界の活動の中で低下傾向にある我が国の研究開発の取り組み方を改革することに繋がると確信しておりますが、簡単には、状況を改革できるものではありません。松本先生には、日本が再び輝くため、今後とも、より革新的に、より高いレベルで、挑戦的な取り組みを強力にリードしていただくよう、お願いいたします。



稚気愛すべし、松本紘前総長

立命館大学 教授
(前 京都大学経営協議会 委員)

土岐 憲三 とぎ けんぞう

松本紘先生が総長として京都大学に多大の貢献をされたことは、大学内外の多くの人が語るどころである。これには鋭い先見性と強いリーダーシップが必要なのは言うまでもない。こうしたことは他の人々に譲り、ここでは、別の視点からの松本先生のお人柄を紹介しましょう。

松本先生とは長いお付き合いではあるが、頻繁に出会うことが多くなったのは、先生が宇治のセンター長、研究所長の頃であり、自分も各種の役職に携わっていたので、学内の委員会などでご一緒する機会が増えた。その頃には二人は共に鞆、カメラ、携帯電話等の小物フェチであって、新しいものを次々に手に入れる競争をしていた。学内の

会議で研究室を離れている時に、松本先生が工学部の研究室に訪ねてこられ、秘書に何か小物を見せて、「土岐先生はこれを持っていたか？」と尋ね、秘書が「お持ちでないと思います」と答えると、「そうか、勝ったな」と嬉しそうに帰って行かれました、と報告されたのも一度ならずであった。

ある時は秋葉原の店で面白そうな鞆を見つけて買おうとしたけど、少し難点があって買わずに帰った。数日後に学内の委員会の際に、改築前の時計台の大会議室の鞆置きの上に件の鞆を見つけた。こんなものに眼をつけるのは競争相手しか居ないから、会議が終わってから「買ったんですね、私は止めたものを」と冷やかしたこともあつ

た。まるで子供のように、新しく手に入れたものを互いに自慢しあっていた。

また、15、6年も前のことであるが、その頃に海外に出張された後の学内の会議の際に、長さが1m余の軽い棒状のものを土産として渡された。何かと開いてみると、プラスチックの靴ヘラであった。「先生は背が高いから、これならあまり届まなくても良いでしょう」とのことであった。そういう心遣いをする人なのである。

総長就任後は、学内のいくつかの委員会に学外委員として就任したが、そこでの会議等では仕事を離れたときとは違った面を見ることも屢々であり、総長職の重責を窺い知った次第である。



松本紘先生の総長ご退任にあたって

国立大学法人名古屋大学 総長

濱口 道成 はまぐち みちなり

私が松本先生に初めてお目にかかったのは、2009年の春、国大協の総会であったと記憶する。先生の第一印象は、正に強直にして触れば切れる日本刀の名刀のようであった。しかし、面識を深めるにつれ、先生が深い愛情と冷静な視点を持つ方であることが、私に染み渡るように伝わってくるようになった。以来5年余、私にとって、先生は様々な局面で最も影響を受け、示唆に富む指導を頂いた方である。

先生は、この5年間、大胆な改革によって京都大学を引っ張ってこられた。先生の発案された「白眉プロジェクト」や「思修館」は、日本の大学・現代の高等教育が持つ課題に対し、「若いリーダーを如何に育成するか」という明確

なメッセージを持つ対策として提示されている。多くの大学長がこれらの構想に、啓示を得たに違いない。私も、先生の構想のお話を聞きつつ、名古屋大学なりの改革を探り、「YLC」やリーディング大学院プログラム「登龍門」や「ウエルビーイング・アジア」を立ち上げることができた。

2013年6月より、先生が国立大学協会会長に就任され、私も筆頭副会長として、お仕えすることとなった。まじかに接する先生は、以前にもまして深い戦略と行動力を持つ方であることを実感することとなった。先生は、多様性に富む国立大学協会を、1人1人の発言を十分引き出しながら、第3期中期計画に向けての課題をまとめられた。また

2013年末には、率先して行動され、科研費の大幅減額の危機を未然に防がれた。

先生と知己を得たことは、私にとってかけがえのない体験である。ネルソン・マンデラの言葉に、「I learned that courage was not the absence of fear, but the triumph over it. The brave man is not he who does not feel afraid, but he who conquers that fear.」とある。様々な苦難、体験を通して勇者となった人の姿を、私は先生の中に見る。

変革期にある日本社会は、先生を必要としています。松本先生が、引き続きご活躍されることを、心より祈念いたします。



松本紘先生の熱き思いに

国立大学法人東京大学 総長

濱田 純一 はまだ じゅんいち

松本紘先生におかれては、6年間の京都大学総長職という大任を見事に果たされたことを、まずはお祝い申し上げます。この6年の間は、東日本大震災や政権交代、さらには急速なグローバル化など社会の大きな動きもあり、その中で国立大学の財務環境はさらに厳しくなる一方、国立大学に対する期待は高まり、こうした状況に対応すべく大学改革ということがつねに大きな課題となってきました。この激動の時期に、その卓抜したリーダーシップを持って向き合ってこられた松本先生に敬意を表すると同時に、先生とさまざまな機会に率直に語り合い、ともに課題に立ち向かうことが出来たことを、感謝申し上げたいと思います。

とくに国立大学協会の活動においては、松本先生には、平成25年6月から会長職を引き受けていただきました。私の会長時代にも副会長として活躍をいただき、とくに、国立大学が責任をもって果たすべき役割や機能の強化のあり方を主体的に打ち出した「国立大学の機能強化」の考え方の展開にあたって、大きな役割を果たしていただきました。また、会長ご就任後は、大学のガバナンス改革の議論や厳しさをまず一方の財務環境などの課題をめぐり、先頭に立って精力的に要望活動などを展開されたことは記憶に新しいところです。

国立大学の中でも、とくに京都大学と東京大学の動きは、社会からの注目

度も高く、日本社会の活力の強化を学術の面から担いながら、国際社会の中で存在感を示していくべき役割は大きいものがあります。そうした役割への期待がこれまで以上に高まってくる中で、同じ危機感をもって大学運営に取り組む松本先生との時折の懇談は、大きな励ましとなるものでした。そうした時にいつも感じていたのは、日本の未来、そしてそれを支えるべき国立大学の使命についての、松本先生の熱い思いと責任感でした。

松本先生の今後のさらなるご活躍、そしてご健康を、心より祈念申し上げます。



松本前総長のご退任に寄せて ～魅力あふれる改革のリーダー

消費者庁長官(前 文部科学審議官)
板東 久美子 ばんどうくみこ

松本前総長には、高等教育局長、文部科学審議官時代を通じ、大変お世話になりました。私の部屋にもしばしばおいでになり、京大の改革の取組や課題について、あるいは政策へのご提言を熱く語られました。そのアイデアの豊かさは飛び抜けており、お会いする度に大きな刺激と新たな視点、前進のエネルギーをいただきました。積極果敢に挑戦されてきた様々な取組は、まさに大学改革全体を牽引するものとして、各界から大きな期待が寄せられています。

総長として取り組まれたことは、極めて多岐にわたりますが、特に、教育・人材育成機能強化に大きな力を注がれたのが注目されます。国際高等教育院

創設による教養教育の強化、思修館創設をはじめとする大学院教育の質的転換、白眉プロジェクト等による若手研究人材の育成、特色入試導入による大学入試・高大接続改革など、革新的で多様な取組を推進されました。京大において研究に比べると影の薄かった教育を、全ての基盤として重視されたことは画期的だといえましょう。

また、大学のグローバル化の推進にも積極的に取り組まれました。その集約である国際戦略(“2x by 2020”)は、世界の中で卓越したスーパー・グローバル大学としての発展を支えるものです。研究力の強化も理事時代から強力に推進され、山中教授のノーベル賞受賞をはじめ、国際的にも評価される多

くの実を結びつつあります。

総長としてのご業績を支えたのは、類まれな先見性と創造性、発信力と説得力、軽やかなフットワークに加え、精神的なタフさや徹底した積極思考ではないかと思います。それぞれの取組には様々なハードルがあったようですが、相当の困難や反対にもめげないご様子には、いつも感服しておりました。

一区切りを付けられた後も、今までのご経験を活かし、イノベーターとして新たなご活躍をいただきたい。松本前総長という比類なき魅力的なリーダーに接することができた一人として、それを切に願っております。



我が敬愛する松本紘先生へ

国立大学法人大阪大学 総長
平野 俊夫 ひらのとしお

松本紘先生、この度は6年間の総長職を無事終えられたこと、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。6年間本当にご苦労様でした。

先生に初めてお会いしたのは2011年の9月であります。大阪大学総長就任のご挨拶をするために、京都大学総長室に先生を訪ねました。初めてお会いした時は、天下の京都大学の総長として大変威厳のある近寄り難いオーラを感じました。しかし先生は大変気さくな方で新米の私に総長職の大変さを語られ、かつ励ましてくださいました。その後も国内はもとより、ドイツ、イギリス、中国、ベトナムなど海外でも幾度となくご一緒させていただきました。先生のお人柄に直接ふれる事が出来た一生忘れる事のない貴重な思い出です。また色々な機会に総長としての心構えや

注意すべき点等、細やかなご指導いただきました。改めて御礼申し上げます。

松本先生は「京都から大学を変える」と、京都大学総長として、また国立大学協会会長として、ひたすら我が国の大学の発展のために大学改革に邁進されました。まさに「行動の人」です。なかなか簡単にはまねを出来るものではありません。

先生の講演をお聞きしていると、様々な言葉が飛び出して来ます。「先衰国」、「育人」、「異・自・言を鍛える」、「知・胆力を鍛える」など。そして先生は「Kyoto University機能強化プラン」や「2x by 2020の提言」などを発表されるときも、教養部改革や入試改革、若手育成のための「ジョン万プログラム」や「白眉プロジェクト」など、様々な大学改革を実行してこられました。

今、日本は大きな曲がり角にさしかかっています。このような時だからこそ、わたしたちは、未来を担う人材をしっかりと育成して行かなければなりません。国を支えるのは人であり、人材育成が全てであると言っても過言ではありません。先生の「育人」は重く大学人に響きます。そして「知」を鍛える重要さと共に、「胆力」の重要性は今も私の脳裏に焼き付いています。「胆力」こそが、リーダーの資質であり、未来を開く大きな力になりうるという確信は、先生ご自身の「胆力」が故、さらに大きな説得力をもってわたしたちに語りかけて来ます。

健康にはくれぐれも留意され、我が国の将来のために、引き続きご指導、ご助言、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。



松本紘前総長御退任に当たって

東京都教育委員会 教育長

比留間 英人 ひるま ひと

京都大学松本紘総長の御退任にあたり、東京都教育委員会を代表して、京都大学並びに松本総長がこれまで推進してこられた様々な取組に対し、心より敬意を表します。

松本総長は在任中、新たな価値創造ができる人材の育成のために、次々と改革案を打ち出されました。「入試改革」では従来の入試とは異なる「高大接続型京大方式特色入試」を導入され、「教養教育改革」では教養教育を一元化した「国際高等教育院」を設置されました。そして、「大学院改革」ではリーダーの育成を目的とした新しいタイプの大学院「思修館」を開設されました。これらの入試改革から大学院改革までの一貫した取組は、日本の教育の仕組みを大きく変えていく先駆けとなるものと思われま

す。とりわけ「入試改革」においては、「高校生には幅広い知識と教養の土台をしっかりと身に付けて欲しい。」との松本総長の強い思いから、「高校と大学の接点を広げ、より

緻密に連携することで、互いの生徒・学生の学習意欲を向上させる。」ことを目指し、高校教育に対して積極的に働きかけをされました。それが見事に結実したのが、平成23年度から京都大学と東京都教育委員会で開催している、「京都大学高校生フォーラム in TOKYO」であると思っています。

この「京都大学高校生フォーラム in TOKYO」では、平成25年度には松本総長から、「人類の100年後を考えよう! ~西暦2100年『太陽系文明』の夜明け~」と題して御講演をいただきました。松本総長の研究分野のみならず、「人間が本来持っている力を十分に発揮するには『学力・額力・顎力・楽力』の『4ガク』が必要である。」等、数々の興味深いお話に、会場を埋め尽くす高校生は熱心に聞き入っていました。会場の生徒から「研究者になるためには、高等学校ではどのような勉強をすればいいのですか。」との質問に対して、松本総長は、「高等学校においては、文科系科目も理科

系科目も幅広く学習することが大切である。」と強く訴えられました。御講演後、「松本総長のような研究者となって、新たな発見をしたい。」との志を抱いた生徒も多かったです。高校生が高等教育とはどういうものかを実感し、進路目標を明確にする取組は大変素晴らしいと感じています。

更に、平成26年7月に、明日の日本を担う人材を育てることを願い、「京都大学と東京都教育委員会との連携協定」を締結いたしました。東京都教育委員会は、松本総長が推進してこられた、「高等学校と大学が互いの現状を理解しながら、共に協力し、高校教育における幅広い学びを保証していくような高大連携」を今後とも継続、発展させていく所存であります。

結びになりますが、松本総長のこれまでの御労苦に心より感謝申し上げますとともに、今後の益々の御活躍を祈念して、私の感謝の言葉とさせていただきます。



松本紘京都大学前総長へのメッセージ

株式会社堀場製作所 最高顧問

(京都大学 総長顧問, 前 京都大学経営協議会 委員)

堀場 雅夫 ほりば まさお

最初から私事を申し上げて失礼かとは思いますが、私は京都大学の一般のOBとは少し違っていると思っています。

まず、私の父は京都大学を卒業して京都大学に奉職し、終戦時まで理学部化学教室の教授を務めておりました。その関係で、京都大学は幼少期より自分の身近にあり、偉い先生方に可愛がって頂き、父の教室の学生さんは私の家庭教師であり、夏休みの宿題もいつも半分くらいはしてもらっていました。

そして、私も当然の様に京都大学の理学部を選び、特に私の尊敬している物理学の荒勝教授のもとに入学出来たことは大変ラッキーでした。

しかし、敗戦により私の将来の希望であった研究者としての夢をぶち壊さ

れました。連合国は日本の核物理の研究を禁止すると同時に、大学の核研究施設を破壊するとの情報を受け、大学としてはそれに対抗する手段はなく、私は卒論の実験用に準備した部品を個人で新設した『堀場無線研究所』に移し、卒論を学外で作成しました。この研究所が現在の株式会社堀場製作所のスタートとなりました。

京都大学と各学部の先生方と共に産学連携して新製品を作り、現在でも製品群のオリジナルの50%は京都大学との共同開発したものです。

しかし、その関係はあくまで点の接点であり、線としていわんや面としての関係ではありませんでした。しかし、松本先生の総長就任をきっかけに、総長顧

問への就任、続いて経営協議会委員委嘱、そして平成25年の総長選考委員就任に及んで、京都大学の内情を知り、現在の世間一般の価値観、常識とはかけ離れた状態で運営されていることを目の当たりにすることとなり、松本総長の大学改革の御苦勞が如何に大変なものであったかを痛感した次第です。

もう少し総長職を続けて欲しいと願ったのですが、再任の禁止規定もあり実現は出来ませんでした。

しかし、幸いにも新総長の山極先生は引き続き改革を続けるの方針を打ち出されておりますので、京都大学の生まれ変わりを心より願い、改めて松本前総長の勇気と忍耐力と努力に心から敬意を表します。



産学の距離が縮まった6年間

公益社団法人関西経済連合会 会長、
関西電力株式会社 代表取締役会長

森 詳介 もりしょうすけ

松本先生は、2008年10月に第25代京大総長にご就任されて以降、留学生の受け入れ拡大をはじめとする大学の国際化や、2013年の思修館創設、2016年度入試からの高大接続型京大方式特色入試の導入など、先駆的な大学改革を矢継ぎ早に推進してこられました。

「人材こそが大学の最も大きな資産」という松本先生の信念は、企業にもそのまま当てはまります。企業にとっても人材こそが最大の資産であり、大学から人材を受け継ぐ立場の企業にとって、京都大学の一連の改革は頼もしく映っています。

松本先生が総長ご在任中に蒔かれた種は、近い将来、必ず大きな実を結

んでくれるものと思います。京都大学で磨き上げられた人材が、研究やビジネスなど広い領域でグローバルな活躍をし、関西のみならず日本の発展を牽引してくれることを、今から楽しみにしているところです。

松本先生は、大学と関西経済界の結びつきも強めていただきました。2009年には国立大学として初めて関経連の会員に登録していただき、今では、外国人留学生の就職支援や人材育成のコンソーシアム構築事業などで互いに協力しあう間柄です。意見交換の場では、経済界の声に真摯に耳を傾けていただくとともに、示唆に富んだご意見を多く頂戴したことが印象に残っています。京都大学と関経連の関係は、松本

先生のおかげでより高度なものとなりました。心から感謝申し上げます。

かつて松本先生から、「大学と経済界のつながりが関西にはない。近くにいなながら協力関係を構築できていない部分がある」と厳しいご指摘をいただいたことがあります。近くにいることに甘えては、経済界にとって最も大切な産学の連携が進まないと感じておりました。今でも覚えています。

関経連では今後も、京都大学とともに関西の発展に力を尽くしてまいります。松本先生には引き続き、関経連の活動に対し、大所高所からご指導を賜りますようお願い申し上げます。



松本先生ご退任に寄せて

DMG森精機株式会社 取締役社長
(前 京都大学経営協議会 委員)

森 雅彦 もりまさひこ

このたびは、松本先生がつつがなく退任の日を迎えられましたことを心より喜び申し上げます。

松本先生と私は、奈良県大和郡山市の出身です。私は1985年に京都大学工学部精密工学科を卒業しました。工学系分野においては産業と民間との連携が重要と考え、京都大学をはじめ国内外の大学や、ドイツFraunhofer協会等との共同研究を行って参りました。今考えますと、この点が松本先生の目に留まり、経営協議会委員への参加をお声がけ頂くことになったのではと考えております。

経営協議会では平成20年からの6年間、2期にわたり協議会委員としてお世話になりました。改革は常に様々な

評価があるものですが、松本先生の取り組みにより、京都大学生の、他大学と比較したユニークさや優位性は大変改善改良されてきたと考えております。なかでも、先生の言う「顎力(がくりよく、噛む力)」には深い意味があると感じ、弊社の社員教育においても念頭において取り組みを行っております。

世界各国に広く活動を行うことと、伝統を守り地域に根ざすことは、反対の事柄のように思われがちです。しかしながら、国や人種を問わずにグローバルであること・日本全土に広がりナショナルであること・地域に根ざしたローカルであることは、決して対立する概念ではありません。京都は観光や歴史、文化において特色のある素晴らしい都

市であるのみでなく、培われた資源を活用することにより、様々な文化背景を持った知の集積となりうる土地であると考えております。私は京都大学が松本先生の取り組みを踏襲し、知の発信地として今後更なる発展を遂げ、世界でも稀有な大学となることを心より期待しております。



日本の京大から世界の京大へ — やればできる —

文部科学事務次官

山中 伸一 やまなか しんいち

OECDの行っている中学校卒業時の知識活用能力を評価する国際的学力調査で、日本の生徒はOECD34か国中、理科、読解力で1位、数学で2位とトップの成績である。このこともあり、国際的には日本の小学校、中学校の教育は世界でも一流と評価されている。

これに対し、日本の大学教育への評価はどうか。TIMES等の国際ランキングで見ても、とても一流とは言えない。知の時代である21世紀これでもいいのか。しかも日本の人口は急減する。どうすればいいのか。「学士力」といった学部教育の改革。大学入試の改革。大学院教育の実質化。20年以上前から同じことが言われ続けてきた。しかしほとんど変わらない。何故か。総論賛成。各論

賛成。しかし動けない。一步踏み出してもその先に進めない、続かない。

松本先生はこのような日本の大学の現状に大いなる危機感を抱いた。抱いただけでなく、具体的行動に出た。出ただけでなく、更に進めた。京大方式特色入試の全学部での実施。学部教育での教養教育を充実し発信力、英語力を高める国際高等教育院の発足。リーダーを育成する大学院「思修館」の創設による大学院改革。若手研究者を支援する「白眉プロジェクト」、「ジョン万プログラム」など。

大学入試改革。学部教育改革。大学院教育改革。若手研究者育成改革。いずれも重要な改革である。日本の大学社会では重要なことは慎重に検討す

る。重要な事ほど、慎重の上に慎重な検討が必要になり、結果、20年、30年かけても僅かしか変わらない。松本先生はこれらすべての改革を6年間の任期の間に実行した。これらの改革は、大学関係者が長年提言し続けたが実行に移せなかったものである。文部科学事務次官として、松本総長にお会いした時、これらをすべて実行すると言われた。本当に驚き、できる限りの支援をしてきた。

京都大学がこれだけの改革を実行してきたことに対し、松本先生をはじめとする京都大学関係者に心から敬意を表したい。更なる進展を期待したい。やれば出来る。他大学も大いに範として頂きたい。



増々のご活躍を期待致します。

日本電信電話株式会社 特別顧問
(京都大学鼎会 前会長)

和田 紀夫 わだ のりお

私は、鼎会(産業界現役の卒業生有志による総長支援会)の初代会長の任にありました。その事もあり、総長とは多くの意見交換の場を持たせて頂いた。そして、総長の大学経営に取り組む確固とした信念を感じ取った。その信念とは「大学の存在価値は、その存在が人間社会の発展に役立っているかどうかにかかっている。それはまた、変えねばならない事にいかに挑戦するか、変えてはいけない事をいかに死守するかにかかっている」という事だと私なりに受け止めている。総長の業績は、多くの場面で触れられると思うので、私は、鼎会の基金を使い、世に役立つ人材の育成に取り組まれた総長の4つの施策をご披露する事としたい。一

つは、グレート・ブックス・ライブラリーの創設、二つは、世界のビッグネームと直接対話できる場の設定、三つは海外留学への支援、四つは、学際研究構想コンテストの開催である。一と二の目指す所は、世界の古典と自由に向かい合い、また、世界の一流の人々と直に意見交換をする。その事により自らの行動の軸となる自らの価値観を打ち立てる事にある。三と四は今、最も進化、変化の激しいグローバリゼーションとオープンイノベーションの場に身を置き、それに適格に対応するには何が最も求められているのかを実感としてとらえる事にある。

総長は、この四つの施策を“心”を培うための四つの試みであり、これらを

「本質について大胆に」というコンセプトのもとに展開して行きたいと述べておられる。鼎会は、発足後、三年目に入ったばかりであり、その成果はこれからだと考えるが、産業界に身を置ける者として、この取り組みを皆さん高く評価しており、ここから骨太で進取の気に富んだ人材が多数輩出してくる事を心待ちにしている。

私としては、総長の新しい数々の取り組みに敬意を評しつつ、お疲れ様でしたと申し上げたい気持ちの一方、まだまだこれからもう一踏張りしてご活躍頂きたいという気持ちで一杯である。

改革の道程

活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2008 平成20年	10月 October	11月 November	12月 December	2009 平成21年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 松本紘理事・副学長が第25代京都大学総長に就任 ■ 拡大役員懇談会を創設 ■ 総長室を設置 ■ 外部戦略室を設置(平成23年3月まで) ■ 先端技術グローバルリーダー養成ユニットを設置 ■ 微生物科学寄附研究部門を設置(平成26年3月時限到来廃止) ■ 英国・ブリストル大学と産学連携に関する協定を締結 ■ 総長交代式を実施 ■ 京都サステイナビリティ・イニシアティブ(KSI)シンポジウムを開催 ■ 益川敏英名誉教授のノーベル物理学賞受賞に関する京大広報号外を発行 ■ 財団法人稲盛財団(稲盛和夫理事長)の寄付による「稲盛財団記念館」が完成 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 理事補制度を創設 ■ 学生コンサルティング室を開設 ■ 第3回京都大学ホームカミングデイを開催(平成18年度以降、毎年度開催) ■ 先端医療開発特区(スーパー特区)に3件が採択 ■ 京都大学重点事業アクションプラン2006～2009(第3版)を策定(平成22年3月まで随時改定) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 法務・人権推進室を設置 ■ 京都大学東京フォーラムを開催(平成13年度以降、毎年度開催) ■ 京都大学で第12回京都大学国際シンポジウムを開催 ■ 益川敏英名誉教授がノーベル賞授賞式に出席。松本総長が式典に参加 ■ シャープ株式会社と共同研究包括契約を締結 ■ 総長と記者クラブとの定例懇談会を実施(以降、定期的に実施) 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 第2回京都大学・大阪大学・神戸大学連携シンポジウムを開催(平成19年度以降、定期的に開催) ■ 附属図書館「学習室24」を開室 ■ タイ・バンコクで第3回、インドネシア・ボゴールで第4回の京都大学東南アジアフォーラムを開催(平成19年度以降、定期的に開催) ■ 英国・医学研究評議会(MRC)および技術移転会社(MRCT)と技術移転に関する大学間協定を締結 ■ アラン・ケイ氏に名誉博士号授与 ■ 奈良県立医科大学と特別研究学生交流協定を締結 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 英国・ロンドンに産官学連携欧州事務所を開設



附属図書館学習室24

3月
March

- 京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）を創設,第1回授賞式を実施（以降,毎年度実施）
- 男女共同参画アクション・プランを策定
- 京都大学総長賞を授与（平成17年度以降,毎年度授与）
- 「京都大学大学院案内」を発刊（以降,毎年度刊行）
- 物質—細胞統合システム拠点（iCeMS）本館が完成

4月
April

- 附属図書館全館改修工事により閲覧スペース大幅拡大
- 医学部附属病院が厚生労働省より「がん診療連携拠点病院」に選定
- 米国・ワシントンD.C.に慶應義塾大学,東京大学,立命館大学,早稲田大学と共同で米国NPO法人「日米研究インスティテュート」(USJI)を設立
- 「京都大学におけるハラスメントの防止と対応について」(和文・英文両冊子)を刊行（以降,毎年度刊行）
- 構内検収所を設置（以降,随時機能強化）
- 役員戦略会議を開催（以降,平成26年9月まで開催）
- 情報環境部に統合認証センターを設置
- 韓国・浦項での第24回東アジア研究型大学協会(AEARU)理事会を議長校として開催
- フランス・エコールノルマルシュペリウールと大学間学術交流協定を締結

5月
May

- 大阪大学・神戸大学と共に,国立大学法人で初めて関西経済連合会に入会
- 平成21年度科学技術振興調整費に4件が採択

6月
June

- 「京大・学術語彙データベース 基本英単語1110」を刊行
- 新エネルギー・産業技術総合開発機構の革新型蓄電池先端科学基礎研究事業に本学を中心とするコンソーシアムが採択
- 平成21年度グローバルCOEプログラムに1件が採択
- スギホールディングス株式会社社長杉浦広一氏,杉浦昭子氏の寄付による杉浦地域医療研究センターが完成
- 松本総長が環太平洋大学協会(APRU)の理事に就任（平成25年6月まで）
- 米国・カリフォルニアでの第13回APRU年次学長会議に松本総長が出席

7月
July

- 国際化拠点整備事業(グローバル30)の拠点大学に採択

8月
August

- 中央府省庁との人事交流を開始
- 京都大学オープンキャンパス2009を開催（平成14年度以降,毎年度開催）
- 宇治おうばくプラザが完成

9月
September

- 次世代研究者育成センター(現 白眉センター)を設置
- 次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」を開始
- 京都大学東京オフィスを開設
- 第2回湯川・朝永奨励賞授賞式を実施（以降,第3回まで実施）
- ベトナム・ハノイ工科大学と大学間学術交流協定を締結
- 最先端研究開発支援プログラム(FIRST)に2件が採択
- 第13回 京都大学全学教育シンポジウムを開催（平成8年度以降,毎年度開催）
- ジュニアキャンパス2009を開催（平成17年度以降,毎年度開催）
- 独立行政法人都市再生機構が施行する木津中央特定土地区画整理事業地区内へ,農学研究科附属農場の移転を決定



ジュニアキャンパス2009



第1回たちばな賞授賞式



AEARU理事会での議事進行



宇治おうばくプラザ



白眉プロジェクト記者会見

改革の道程 活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2009 平成21年	10月 October	11月 November	12月 December	2010 平成22年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 体育会スキー競技部OB会から志賀高原ヒュッテを移管受入・利用開始 ■ 科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)2009に松本総長が出席(以降、毎年度参加) ■ 京都大学の名義並びに京都大学マーク、エンブレム、ロゴタイプ及びスクールカラーに関する規程を制定 ■ 中国・天津での第6回日中学長会議に松本総長が出席 ■ 西部課外活動施設が完成 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 大学院生のための研究科横断型セミナー2009を実施(以降、研究科横断型教育プログラムとして毎年度実施) ■ 松本総長と職員との対話を開催(平成22年3月まで) ■ 国公立9大学による学術研究懇談会を発足(※平成22年8月に2大学が加入し、RU11となる) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 京都大学で第13回京都大学国際シンポジウムを開催 ■ アセアン大学連合(AUN)と大学間学術交流協定を締結 ■ 総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催(以降、毎年度開催) 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 学内カフェ「タリーズ コーヒー京都大学時計台店」がオープン ■ 独立行政法人産業総合技術研究所と連携協力の推進に係る協定を締結 ■ 男女共同参画推進シンポジウムを開催 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 第二期中期目標期間における人件費・定員管理の在り方に関する基本方針を策定 ■ 大学評価シンポジウム「大学の発展に向けた評価及び質保証システムの充実」を開催 ■ 看護師宿舎・白眉寮が完成 ■ ボート部合宿所、宇治学生合宿所等の改修工事が完成 ■ iPS細胞研究所(CiRA)研究棟が完成



外国人研究者との交歓会



男女共同参画推進シンポジウム



iPS細胞研究所研究棟

3月
March

- 学際融合教育研究推進センターを設置
- 重点施策定員の整理統合等を行い、戦略定員を創設
- 京都大学共同研究講座及び共同研究部門制度を制定
- 株式会社国際電気通信基礎技術研究所と組織対応型(包括的)連携契約を締結
- 米国・ハーバード大学技術移転部門と産学連携に関する協定を締結
- 京都産業大学と特別研究学生交流協定を締結
- 近畿大学と単位互換協定を締結
- ウイルス研究所北実験棟が完成
- 山内溥氏(任天堂株式会社相談役)の寄付による医学部附属病院新病棟「積貞棟」が完成

4月
April

- iPS細胞研究所(CiRA)を設置
- 産官学連携センターを廃止、産官学連携本部に統合
- 総合専門業務室を設置
- 全教職員にIC職員証ならびに全学生にIC学生証を配付
- 教員の定年を段階的に65歳に引上げる定年延長をスタート
- 独自に拡充した授業料免除を実施(以降、毎年度実施)
- 新入生特別セミナーを実施(以降、毎年度開催)
- 早期退職制度を整備
- 教職員用全学メールKUMailの運用を開始
- 第二期重点事業実施計画を策定(以降、随時改定)
- 独自の財源による部局運営活性化経費を導入
- 神戸大学と計算科学分野における連携協力に関する協定を締結
- 「京都の未来を考える懇話会」に参画
- 「総長と新社長との意見交換会」を開始(以降、定期的に開催)

5月
May

- 大阪ガス株式会社と組織対応型包括連携協定を締結
- 日本医科大学と特別研究学生交流協定を締結
- 平成22年度科学技術振興調整費に4件が採択

6月
June

- 京都女子大学と特別研究学生交流協定を締結
- 最先端研究基盤事業に4件が採択

7月
July

- 産業競争力懇談会(COCN)へ入会
- 「小中高大連携事業～サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト～」を実施(以降、平成23年度まで)
- 理学研究科5号館北棟が完成
- ドイツ・ハイデルベルク大学での第1回日独6大学学長会議に松本総長が出席

8月
August

9月
September

- 京都大学アラムナイ・ネットワークシステムを開設
- 吉田南構内京大生協共北ショップがオープン
- 新任教員教育セミナーを開催(以降、毎年度開催)



iPS細胞研究所設立記者会見



第1回日独6大学学長会議

改革の道程 活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2010 平成22年	10月 October	11月 November	12月 December	2011 平成23年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 渉外部を設置 ■ 総長室Twitterによる情報発信開始(平成26年9月まで) ■ 物質—細胞統合システム拠点(iCeMS)研究棟が完成 ■ 医学部教育研究支援基金による医学部学生会館が完成 ■ 高度マイクロ波エネルギー伝送実験棟が完成 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 連続講演会「東京で学ぶ京大の知」を開催(以降,毎年度4シリーズ16回開催) ■ 船井電機株式会社と組織対応型包括連携協定を締結 ■ 株式会社カネカと組織対応型包括連携協定を締結 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 京大生がつくるキャンパスマップ「Welcome! 京大」を刊行 ■ 総長と部局執行部との意見交換会を開催(平成23年10月まで) ■ エジプト科学アカデミーと大学間学術交流協定を締結 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 京都大学で第9回AEARU Web Technology and Computer Science Workshopを開催 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最先端・次世代研究開発支援プログラム(NEXT)に36件が採択 ■ 中央府省庁と京都大学との意見交換会を開催(以降,平成25年5月までの間に6省と実施) ■ 関西学院大学と特別研究学生交流協定を締結 ■ 宇治地区先端イノベーション拠点棟が完成



連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」



京大生がつくるキャンパスマップ「Welcome! 京大」



第9回AEARU Web Technology and Computer Science Workshop



宇治地区先端イノベーション拠点棟

3月
March

- 未来戦略検討チームによる提言
- 東日本大震災被災地にDMAT隊員(災害時派遣医療チーム)を派遣
- 第1回全学共通教育国際学生シンポジウムを開催(以降,毎年度開催)
- タッチパネルおよび3Dセンサーを用いた広報用映像コンテンツを構築(百周年時計台記念館・学士会館・東京オフィス)
- 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構との連携・協力の推進に関する協定を締結
- ドイツ・ゲッチンゲン大学と大学間学術交流協定を締結
- 次世代低炭素ナノデバイス創製ハブ拠点施設が完成
- 北部総合教育研究棟(益川記念館)が完成
- 熊野寮の耐震改修工事が完成
- 医学部附属病院先端医療機器開発・臨床研究センター棟が完成

4月
April

- 東日本大震災により被災した学生への入学料・授業料免除を開始(以降,毎年度実施)
- 放射性同位元素総合センター,環境保全センター,保健管理センターを廃止し,環境安全保健機構に統合
- 国際交流センターを国際交流推進機構に統合
- 情報環境機構にIT企画室を設置
- 新入生対象シリーズ講演「京大スピリッツへの招待」を実施
- 米国・ワシントン大学と大学間学術交流協定を締結
- フィンランド・ヘルシンキ大学と大学間学術交流協定を締結
- 中国・清華大学での第15回APRU年次学長会議に松本総長が出席

5月
May

- 東日本大震災被災地にこころのケアチームを派遣(以降,平成26年3月まで派遣)
- 朝日新聞「大学力」の掲載に協力(以降,毎年度協力)

6月
June

7月
July

- 学術情報リポジトリ「KURENAI」が世界リポジトリランキング2011年7月版において,世界第8位,国内第1位を獲得
- 外国向け研究紹介冊子「Kyoto University Research Activities」を発刊(以降,定期的に刊行)
- ドイツ・カールスルーエ工科大学と大学間学術交流協定を締結
- 京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後を考えるー安全・安心な輝ける国づくりを目指してー」を開催(以降,平成24年3月まで計20シリーズ開催)
- 「京大中期目標・中期計画ハンドブック(2010~2016)」を刊行
- 医学部B棟が完成

8月
August

- 基金運営委員会を設置

9月
September

- トルコ・コッチ大学と大学間学術交流協定を締結
- トルコ・イスタンブールで第16回京都大学国際シンポジウムを開催
- リクルート「大学の約束」の出版に協力(以降,毎年度協力)
- 「京都大学の機能強化プランについて」(2011~2014)を策定



第16回京都大学国際シンポジウム



コッチ大学との交流協定締結式



仙台医療センターで活動するDMATチーム



先端医療機器開発・臨床研究センター

改革の道程 活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2011 平成23年	10月 October	11月 November	12月 December	2012 平成24年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 京都大学同窓会(京大アラムナイ)Facebookの運用を開始 ■ 科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)2011 University Presidents' Breakfast Meetingを開催 ■ 京都大学東京フォーラムをリニューアル開催(以降,毎年度開催) ■ フランス・サノフィ・アベンティス社と包括的連携協定を締結 ■ 京都で第7回日中中学長会議を開催 ■ 米国・カリフォルニア大学デービス校と大学間学術交流協定を締結 ■ 京大ウィークスを開催(以降,毎年度開催) ■ 英国・ブリストル大学と大学間学術交流協定を締結 ■ 気象庁と火山活動の常時監視に係る火山観測データの提供に関する協定を締結 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 初めて米国でのiPS基本特許が成立 ■ 大学の世界展開力強化事業に1件が採択 ■ 京都府と「東日本大震災」被災地の復興支援に係る包括的連携協定を締結 ■ エフエム京都「Kyoto University Academic Talk」の放送開始(以降,毎週水曜日放送) ■ 東京都教育委員会との共催により高大接続事業「京都大学高校生フォーラム in Tokyo」を開催(以降,毎年度開催) ■ 公益財団法人稲盛財団との共催により「京都賞高校フォーラム」を開催(以降,毎年度開催) ■ 博士課程教育リーディングプログラムのオールラウンド型に1件(思修館),複合領域型に1件が採択 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 学生用全学メールKUMOIの運用を開始 ■ 技術移転活動等の充実のため関西TLO株式会社の株式を取得 ■ ロンドン大学教育研究所と大学間学術交流協定を締結 ■ 「10年後の京都大学の発展を支える教育研究組織改革に向けて」を策定 ■ AEARUとの共催により京都大学で第17回京都大学国際シンポジウムを開催 ■ 関西イノベーション国際戦略総合特区に参画 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 教育研究活動データベースを構築し,一般公開開始 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 総長のリーダーシップを支えるため,本学卒業の財界トップによって「京都大学鼎会」が設立 ■ 大阪府教育委員会と連携協定を締結 ■ 理学研究科附属地球熟学研究施設火山研究センター本館が登録有形文化財に登録



東京フォーラム(懇親会)



京大ウィークス 気象気球観測のデモンストレーション



「東日本大震災」被災地の復興支援に係る京都府との包括的連携協定締結式



第17回京都大学国際シンポジウム市民公開パネルディスカッション

3月
March

- 「京都大学ファンブック」(日本語版)を刊行
- 総合体育館附設プールに係るプールのスタンド・脱衣室を整備
- 住友ベークライト株式会社と組織対応型包括連携協定を締結
- 「東日本大震災を受けた本学施設の耐震化の取り組み」を取りまとめ
- 経費削減情報Naviを策定(以降、随時改定)
- 京都大学で第2回日越学長会議を開催
- 大学評価シンポジウム「国立大学法人を取り巻く評価制度を再考する」を開催
- ニュージーランド・オークランド大学, Uni Services社及び関西TLO株式会社と産学連携・技術移転に関する覚書を締結
- 京都大学で第2回日独6大学学長会議を開催

4月
April

- 次世代研究者育成支援センターを白眉センターに改称
- 学術研究支援室(URA室)を設置
- 全学委員会としてIT戦略委員会を設置
- 日立造船「先端ビーム応用・材料創成を基盤とした共同研究の在り方探索」寄附研究部門を設置
- 総長諮問機関として入学試験検討タスクフォースを設置
- 同志社大学と特別研究学生交流協定を締結
- 寄付によるラグビー部クラブハウスが完成
- 黄檗宿泊施設が完成
- 本部構内中央食堂がリニューアルオープン

5月
May

- タイ・バンコクで第18回京都大学国際シンポジウムをチュラロンコン大学及びAUN(ASEAN University Network)の協力により開催
- エジプト日本科学技術大学(E-JUST)と大学間学術交流協定を締結

6月
June

- 医学部附属病院が厚生労働省より「臨床研究中核病院」に選定
- 元素戦略プロジェクトの研究拠点形成型に2件が採択
- 米国・オレゴン大学での第16回APRU年次学長会議に松本総長が出席

7月
July

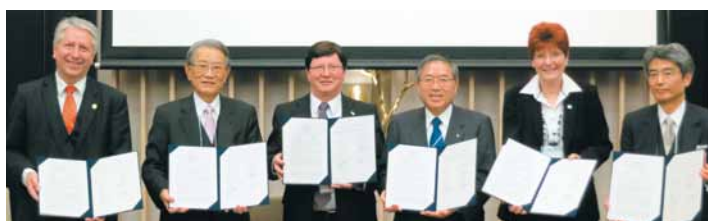
- 清風荘が重要文化財(建造物)に指定
- ボツワナ大学と大学間学術交流協定を締結
- 米国・ハーバード大学との共催により京都大学で第19回京都大学国際シンポジウムを開催
- 高槻市, 独立行政法人都市再生機構と京都大学大学院農学研究科附属農場の移転等に係る基本協定を締結

8月
August

- 関西経済連合会及び京都大学・大阪大学・神戸大学3大学学長懇談会を開催(以降、定期的に開催)
- 韓国・建国大学校と大学間学術交流協定を締結

9月
September

- 学生・研究者・職員に向けた若手人材海外派遣事業「ジョン万プログラム」を創設
- 京都大学・神戸大学・大阪大学・復旦大学・上海交通大学・蘇州大学・同済大学・浙江大學による中国蘇州シンポジウムに松本総長が出席
- ハラスメント相談マニュアルを作成(以降、随時更新)
- AERAムック「京都大学 by AERA—知の大山脈, 京大。」を刊行
- 工学研究科物理系総合研究棟:C3棟が完成
- 博士課程教育リーディングプログラムの複合領域型に2件が採択
- 大学の世界展開力強化事業に2件が採択



第2回日独6大学学長会議共同宣言書署名



重要文化財に指定された清風荘



中国蘇州シンポジウム

改革の道程 活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2012 平成24年	10月 October	11月 November	12月 December	2013 平成25年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 法務・コンプライアンス対策室を設置 ■ 山中伸弥iPS細胞研究所長・教授のノーベル生理学・医学賞受賞に関する京大広報号外を発行 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 入試改革検討本部を設置 ■ 「京都大学ファンブック」(英語版)を刊行 ■ ASEAN+3大学連合(ASEAN+3 UNet)と大学間学術交流協定を締結 ■ ユネスコとインターンシップ協定を締結するとともにユネスコ事務局長講演会を開催 ■ 京都大学で第1回京都大学・サウジアラビア共催ワークショップを開催 	<ul style="list-style-type: none"> ■ インドネシア・ガジャマダ大学と大学間学術交流協定を締結 ■ 山中伸弥iPS細胞研究所長・教授がノーベル賞授賞式に出席。松本総長が式典に参加 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 山中伸弥iPS細胞研究所長・教授のノーベル賞授賞式出席に関する京大広報号外を発行 ■ 英国・ブリストルで第1回ブリストル大学—京都大学シンポジウムを開催 ■ 百周年時計台周辺環境整備の照明設備が環境省「省エネ・照明デザインアワード2012」の優秀事例に選定 ■ 順天堂大学と特別研究学生交流協定を締結 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 医学部附属病院が厚生労働省より「小児がん拠点病院」に選定 ■ 「本 de 募金」を開始 ■ 全学的スペースチャージ制度「施設修繕計画」を策定 ■ 米国・イリノイ大学理学会(アーバナ・シャンペーン校)と大学間学術交流協定を締結 ■ リーディング大学院等の全学共用施設建設用地として旧左京区総合庁舎跡地を取得



山中伸弥教授のノーベル賞授賞式



ブリストル大学との宣言書署名



思修館第一研修施設「廣志房」除幕式

3月
March

- 再生医療実現拠点ネットワークプログラム:iPS細胞研究中核拠点に採択
- 「名誉フェロー」称号を創設
- 大阪大学と単位互換協定を締結
- 沖縄科学技術大学院大学と特別研究学生交流協定を締結
- 京大生協生活協同組合と相互協力関係に関する協定を締結
- 大学技術移転協議会との共催によりAUTM(Association of University Technology Managers) Asia 2013 Kyotoを開催
- 全学部における平成28年度入試からの京都大学特色入試の導入について発表
- 産官学連携本部長が関西TLO株式会社の社外取締役役に就任
- 吉田国際交流会館が完成
- 「人件費削減、運営費交付金削減への対応と機能強化に向けた取組の方策について」を策定
- 思修館第一研究施設「廣志房」が完成
- 医学研究科メディカルイノベーションセンター棟が完成
- 北部グランド人工芝化等整備の完成
- ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーを廃止、事業を産官学連携本部に継承

4月
April

- 高等教育研究開発推進機構を廃止、国際高等教育院を設置
- 大学院総合生存学館(思修館)を設置
- 全学8か所に共通事務部を設置
- サステイナブルキャンパス推進室を設置
- 法務・コンプライアンス対策室を法務・人権推進室に統合
- 外部資金公募情報サイト「鎗(やり)」の本格運用開始
- 本部構内に入構カーゲートを設置
- 情報システムに関する脆弱性診断システムの運用を開始
- 新たな予算配分制度を構築
- 第2期環境賦課金制度を実施
- アウン・サン・スー・チャーミャンマー国民民主連盟議長に名誉フェローの称号を授与するとともに講演会を開催
- 西部学生会館がリニューアルオープン
- 関西大学と特別研究学生交流協定を締結



アウン・サン・スー・チャーミャンマー国民民主連盟議長名誉フェロー授与

5月
May

- 大規模公開オンライン講座「edX」に日本で初めて参加
- 全学共用施設「京都大学東一条館」を着工
- 滋賀県教育委員会と連携協定を締結
- 本学が参加する京都の未来を考える懇話会が「京都ビジョン2040」を発表

6月
June

- 国際戦略[2x by 2020]を策定
- 松本総長が一般社団法人国立大学協会会長に就任(以降、平成26年9月まで)
- 高大連携事業「学びコーディネーター」プロジェクトを開始
- 兵庫県立大学と特別研究学生交流協定を締結
- ロシア・サンクトペテルブルグ大学と大学間学術交流協定を締結
- ウクライナ・キエフ工科大学と大学間学術交流協定を締結
- ドイツ・ケルン大学と大学間学術交流協定を締結
- 英国・UCL, UCL Business社及び関西TLO株式会社と技術移転等に関する協定を締結
- 英国・グラスゴー大学と大学間学術交流協定を締結
- ギニア・コナクリ大学と大学間学術交流協定を締結
- ダイキン工業株式会社と組織対応型包括連携協定を締結

- 京都大学孜孜賞を創設、第1回授賞式を実施(以降、毎年度実施)

7月
July

- けいはんなオープンイノベーション拠点(旧・私のしごと館)整備事業に京都府・京都大学協働パネルとして参画
- 英国・オックスフォード大学,ISIS社(オックスフォード大学産学連携部門)及び関西TLO株式会社と技術移転に関する大学間協定を締結
- 京都大学ICT基本戦略を策定

8月
August

- カウンセリングセンター,キャリアサポートセンター,障害学生支援室を統合し、学生総合支援センターを設置
- 中長期研究人材交流システム構築事業に本学を中心とする「産学協働イノベーション人材育成コンソーシアム事業」が採択
- 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)に1件が採択
- 研究大学強化促進事業に採択
- ブータン王立大学と大学間学術交流協定を締結
- 国際科学イノベーション棟の着工
- 稲盛和夫京セラ株式会社名誉会長・公益財団法人稲盛財団理事長ならびに山内溥任天堂株式会社相談役に名誉フェローの称号を授与
- インドネシア・ボゴール農業大学と大学間学術交流協定を締結

9月
September

- 平成24年度補正予算「産学共同の研究開発による実用化促進(大学に対する出資事業)」に係る「京都大学産学共同実用化促進事業実施委員会」を設置
- 博士課程教育リーディングプログラムのオンリーワン型に1件が採択
- ドイツ・ゲッチンゲン大学で開催の第3回日独6大学学長会議に松本総長が出席
- 京都大学で京都大学・コッチ大学共催シンポジウムを開催
- 京都市と共同で提案した京都市成長産業創造センターの施設が完成



ダイキン工業との組織対応型包括連携協定締結式

改革の道程 活動年表 平成20年10月—平成26年9月

2013 平成25年	10月 October	11月 November	12月 December	2014 平成26年	1月 January	2月 February
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 大学改革推進事業として外国人教員の採用を開始 ■ 「教員の新たな人員管理制度の導入について」を策定 ■ 医学部附属病院とブータン保健省及びブータン医科大学との医療スタッフ交流に関するMOUを締結、医師及び看護師等の派遣事業を開始 ■ ミャンマー・マンダレー工科大学と大学間学術交流協定を締結 ■ ミャンマー・ヤンゴン工科大学と大学間学術交流協定を締結 ■ フランス国立科学研究センター(CNRS)と大学間学術交流協定および産学連携に関する大学間協定を締結 ■ シンガポール・南洋理工科大学と大学間学術交流協定を締結 ■ オランダ・フローニンゲン大学と大学間学術交流協定を締結 ■ 国連環境計画(UNEP)と覚書を締結 ■ 総合地球環境学研究所と連携・協力の推進に関する協定を締結 ■ 防災研究所流域災害研究センター本館が完成 ■ 革新的イノベーション創出プログラム(COISTREAM)に本学を中心とする「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」拠点が採択 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 名誉教授による教育・研究・社会貢献等の活動を支援する仕組みとして「京都大学シニアアカデミー」を開設 ■ ポーランド・ヤゲウォ大学と大学間学術交流協定を締結 ■ スイス・チューリッヒで第1回スイス—京都シンポジウムを開催 ■ スイス・チューリッヒ大学と大学間学術交流協定を締結 ■ 医学部附属病院に次世代ハイブリッド手術室を整備 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 吉田寮新棟を着工 ■ 台湾で第1回国立台湾大学-京都大学共催シンポジウム2013を開催 ■ 京都大学・神戸大学・大阪大学・貿易大学・ハノイ理工大学・ハノイ国家大学によるベトナムハノイシンポジウムに松本総長が出席 ■ 京都大学、大阪大学および神戸大学における相互の協力に関する協定を締結 ■ みよこキャピタル株式会社と「京大ベンチャーファンドに関する覚書」を締結、学外にベンチャーファンド(2号)を設立 		<ul style="list-style-type: none"> ■ 産学協働イノベーション人材育成コンソーシアム事業の推進のため一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会を設立 ■ 兵庫県教育委員会と連携協定を締結 ■ 京都大学で第2回京都大学-ブリストル大学シンポジウムを開催 ■ ブリストル大学が松本総長に名誉工学博士学位を授与 ■ 福島県立医科大学と特別研究学生交流協定を締結 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 京都府・京都市教育委員会と連携協定を締結 ■ 大規模災害等発生時における近畿地区国立大学法人間の連携・協力に関する協定を締結 ■ 京都工芸繊維大学との共同調達を実施(契約期間:平成26年4月1日～平成31年3月31日) ■ 米国・カリフォルニア大学サンディエゴ校と大学間学術交流協定を締結 ■ ブラジル・サンパウロ大学と大学間学術交流協定を締結 ■ ベトナム・ダナン大学と大学間学術交流協定を締結 ■ 学生集会所建替工事を着工
					 <p>第2回京都大学-ブリストル大学シンポジウム</p>	
		 <p>第1回スイス—京都シンポジウム</p>	 <p>次世代ハイブリッド手術室</p>		 <p>産学協働イノベーション人材育成コンソーシアム事業記念シンポジウム</p>	

3月
March

- 米国ボストンでハーバード大学との共催により第20回京都大学国際シンポジウムを開催
- 「Asian Future Leaders Scholarship Program」実施協定に調印
- 和歌山県教育委員会と連携協定を締結
- 平成28年度京都大学特色入試選抜要項「概要」を発表
- 「サステナブルキャンパス構築」国際シンポジウムを開催
- 「京都大学の持続的発展を支える組織改革の骨子」を策定
- 旧京都織物構内テニスコート張替工事が完成
- 北部トレイ・シャワー棟女子更衣室改修工事が完成

4月
April

- 平成26年度学部新入生の英語科目履修者を対象にTOEFL ITP試験を義務化
- 国際高等教育院附属国際学術言語教育センター(i-ARRC)を設置
- 京都大学公式Face bookの運用開始
- 大規模公開オンライン講座「edX」においてKyotoUxとして講義配信開始
- 附属図書館ラーニング・コモンズ、サイレントエリアを開設
- 男女共同参画推進重点プランを策定
- 統合認証センターを廃止、ITサービスの総合窓口として情報環境支援センターを設置し、窓口を一元化
- 学術情報メディアセンター北館の一部をデータセンター化し、ハウジングサービスを開始
- 奈良県と連携協定を締結
- 滋賀県立大学と特別研究学生交流協定を締結
- 男女共同参画推進室、男女共同参画推進事務室、女性研究者支援センターを統合、男女共同参画推進本部を設置

5月
May

- 北部学生会館がリニューアルオープン
- 北部グラウンド部室棟の建替が完成
- 英国・ロンドンで開催の日英研究教育大学協議会に松本総長が出席
- ドイツ・ハイデルベルクに京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィスを開設
- フランス・ボルドーでボルドー-京都シンポジウムを開催
- フランス・ボルドー大学と大学間学術交流協定を締結
- インドネシア科学院(LIPI)と大学間学術交流協定を締結
- 三重県教育委員会と連携協定を締結

6月
June

- 「京都大学カード」(クレジットカード)を発行
- 英国・キングス・カレッジ・ロンドンと大学間学術交流協定を締結
- 東京における報道関係者と総長との懇談会を実施
- あしなが育英会「京都インターンシッププログラム」を発表
- タイ・バンコクに京都大学ASEAN拠点を開設
- 船井哲良船井電機株式会社取締役会長の寄付による思修館第二研修施設「船哲房」が完成

7月
July

- 京都大学の広報戦略を策定
- APWiL男女共同参画/女性リーダー育成ワークショップを開催
- 米国・オーリン工科大学と大学間学術交流協定を締結
- 第1回京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催
- スペイン・バルセロナ大学と大学間学術交流協定を締結
- 東京都教育委員会と連携協定を締結
- 「LAUREATES Award-Winning Scholars at Kyoto University」を発刊
- 石川県教育委員会と連携に関する協定を締結
- 自転車シェアサービスの本格導入を決定

8月
August

- 「京都大学基金寄付者銘板」を設置
- 京都大学基金「感謝の集い」を開催
- 国際核融合エネルギー機構と大学間学術交流協定を締結
- 徳島県教育委員会および徳島市教育委員会と連携に関する協定を締結
- 京都大学広報センター(正門)をリニューアルオープン
- 医学部附属病院生活習慣病予防研究センターハイメディック棟寄贈について調印
- 福井県教育委員会と連携に関する協定を締結
- インドネシア・ボゴールで第21回京都大学国際シンポジウムを開催
- ブルネイ・ダルサラーム大学と大学間学術交流協定を締結
- 京都大学サマースクール2014を開催
- 国際人材総合教育棟を着工

9月
September

- 京都大学で第2回京都大学-国立台湾大学共催シンポジウム2014を開催
- 京都大学基金戦略を策定
- スウェーデン・ストックホルムで第1回スウェーデン-京都シンポジウムを開催
- サウジアラビア・キング・アブドゥルアズィズ大学と大学間学術交流協定を締結
- 京都大学ホームページをリニューアル
- 船井哲良船井電機株式会社取締役会長に名誉フェローの称号を授与
- スーパーグローバル大学創成支援タイプA(トップ型)に採択
- 「産学共同の研究開発による実用化促進(大学に対する出資事業)」に関する支援事業者として京都大学ベンチャーキャピタル株式会社が認定
- 吉田南グラウンド照明装置、北部グラウンド投擲場等改修工事が完成
- 総長引継式、総長退任式を実施



附属図書館ラーニング・コモンズ



オーリン工科大学との協定締結式(文部科学大臣立会) 東京都教育委員会との連携協定締結式



京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィス開所式



京都インターンシップ・プログラム記者発表



総長引継式

松本 HIROSHI
MATSUMOTO 紘
第二十五代総長の
挑 CHALLENGE 戦

～魅力・活力・実力ある大学を目指して～

京都大学

渉外部広報・社会連携推進室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL 075-753-2071

E-mail kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

